

るもの(815), 平らな底部で, 口縁の立ち上りがほとんどなく, いわゆる円板形の端部がわずかに上反りする形状を呈するもの(819)などがある。見込みの暗文は平行線状暗文である。

820は耳環である。銅芯であるが, 表面は剝離してしまっており不明である。径2.6cm, 厚み4mmを測った。古墳時代にみられるもので, 何故16-00から出土したかは定かではないが, 伝承品, あるいは盗掘にかかわるものなどという推測もでき得る。また2個一対が普通であるが, 今回検出したのは1個のみであった。

16-00の年代観を瓦器碗の形態から判断すると, 出土した瓦器碗には12世紀後半の特徴を示すものと, 12世紀末~13世紀初頭の特徴を示すものがほぼ同数みられる。したがって16-00の時期はこの中で最も新しい段階である13世紀初頭と考えておく。

17-00

第2地区の北半部の, J03WL・XLにまたがる地区で検出した土坑である。不定形状を呈し, 長径0.32m, 短径1m, 深さ0.1mを測った。埋土は1層で, N3/暗灰色土である。内部から須恵器・瓦器などがごく少量出土した。

17-00出土遺物(第139図821~823)

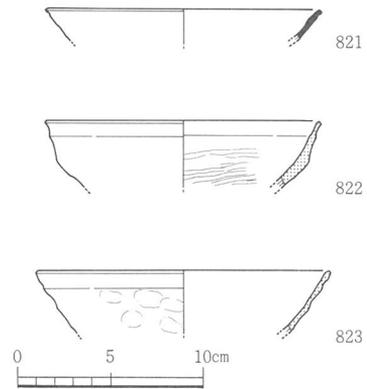
17-00からは須恵器・瓦器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

821は須恵器で, 皿の破片と思われる。口縁部みの小片であり, 全体の形状などは不明である。

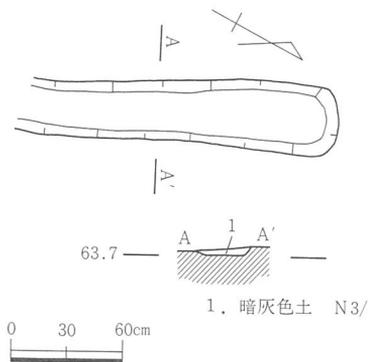
822, 823は瓦器の碗で, とともに口縁部みの破片である。822には内面にヘラミガキがみられる。

2. 溝

第2地区では, 鎌倉時代に比定される溝が1条検出された。



第139図 17-00出土遺物



第140図 7-OS平面図・断面図

7-O S (第140図)

第2地区の北半部の、J08YMで検出した溝である。検出長1.7mで、幅0.3m、深さ0.04mを測った。南北方向に走っており、遺構の北端は検出されたが、南端部は現代の水路に削平されて消失している。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から瓦器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第141图 第3地区平面图

第4節 第3地区

第1項 古墳時代前期

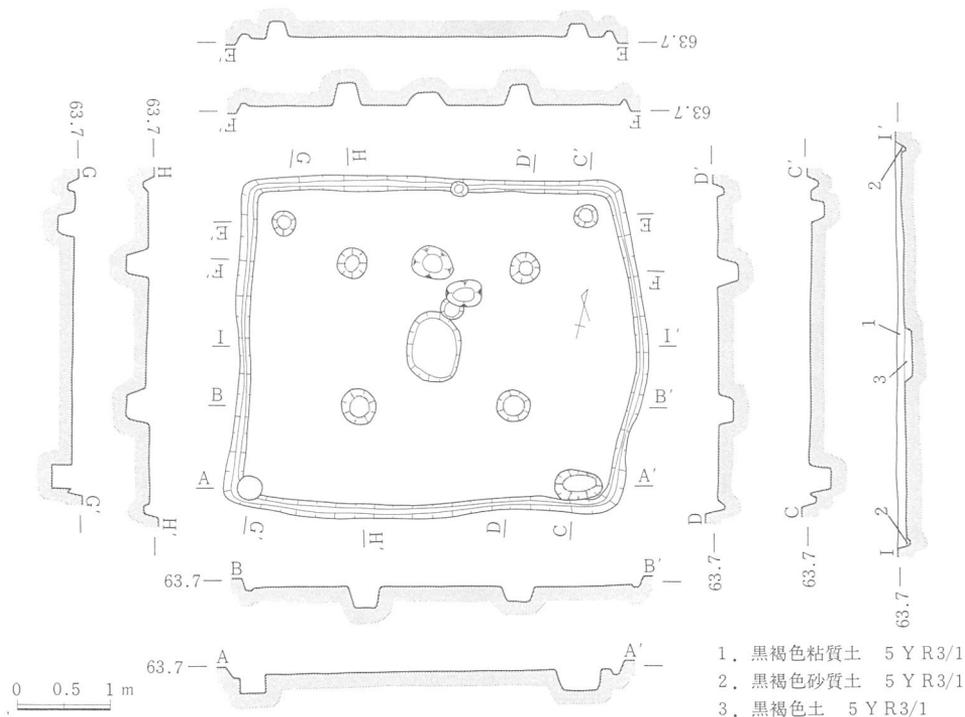
古墳時代前期に比定される遺構としては竪穴住居・掘立柱建物・溝などがある。

1. 竪穴住居

第3地区では、古墳時代前期に比定される竪穴住居が2棟検出された。

1-O D (第142図, 図版22)

第3地区の中央部東端付近の、J 13B P・B Q・C P・C Qにまたがる地区で検出した竪穴住居である。長方形の平面プランを呈し、方位はN-12°-Wを示す。南北4.36m、東西3.65mの規模で、緩斜面上に位置するため検出面のレベルは東が高く西がやや低い。平面プランの周縁全体に幅0.15m、深さ0.05m~0.1mの壁溝を巡らせている。柱穴は、各コーナーから1/3の地点に4ヶ所主柱穴がみられ、各コーナー付近にも4ヶ所副柱穴が存在した。掘方は径0.2m~0.5mの円形ないしは楕円形状を呈し、深さ0.18m~0.2mを測った。平面プランのほぼ中央で長径0.75m、短径0.5m、深さ0.1mの土坑を検出した。



土坑内の埋土は5 Y R3/1黒褐色土で、炭、焼土などは含まれておらず、この土坑を炉とする決め手はない。平面プラン内の埋土は5 Y R3/1黒褐色粘質土、壁溝内は5 Y R3/1黒褐色砂質土である。内部から古式土師器の破片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2-OD (第143図, 図版23)

第3地区の中央部やや東寄りの、J13A O・APにまたがる地区で検出した竪穴住居である。長形状の平面プランを呈し、方位はN-35°-Wを示す。南北2.44m、東西1.95mの規模で、1-ODと同様に東

が高く、西がやや低い。壁溝はみられなかった。柱穴は各コーナー付近で4ヶ所検出された。平面プランの東端部付近で、長径0.8m、短径0.5mの楕円形状を呈する土坑が検出された。土坑内の埋土は5 Y

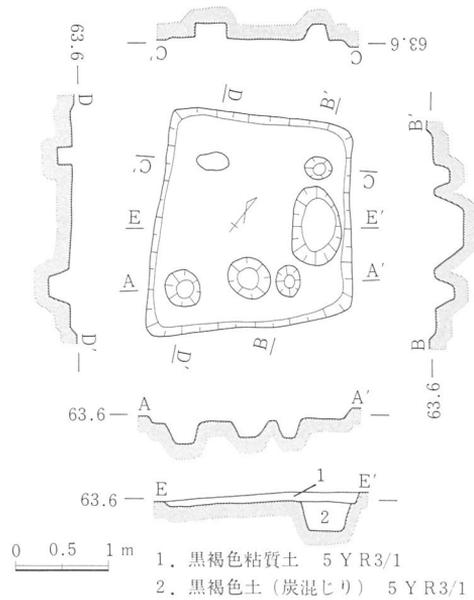
R3/1黒褐色土で、炭を多く含んでおり、炉跡と考えられる。平面プラン内の埋土は5 Y R3/1黒褐色粘質土で、内部から古式土師器の破片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2. 掘立柱建物

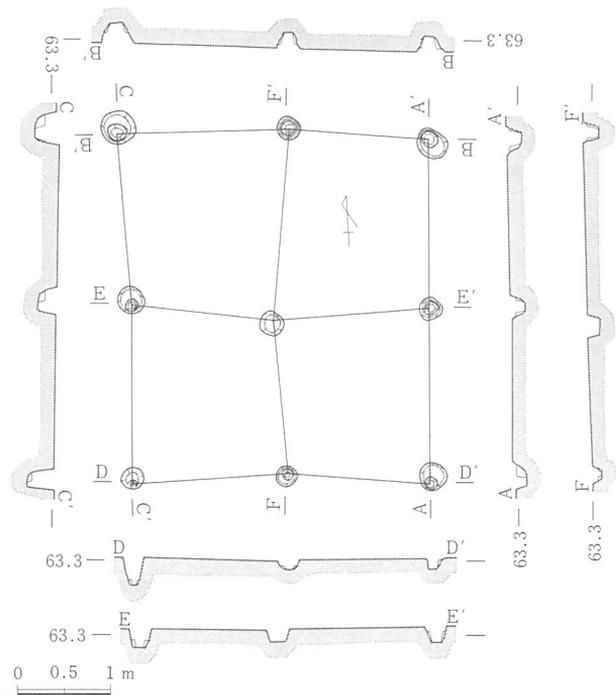
第3地区では、古墳時代前期に比定される掘立柱建物が2棟検出された。

13-OB (第144図, 図版23)

第3地区の南半部やや西

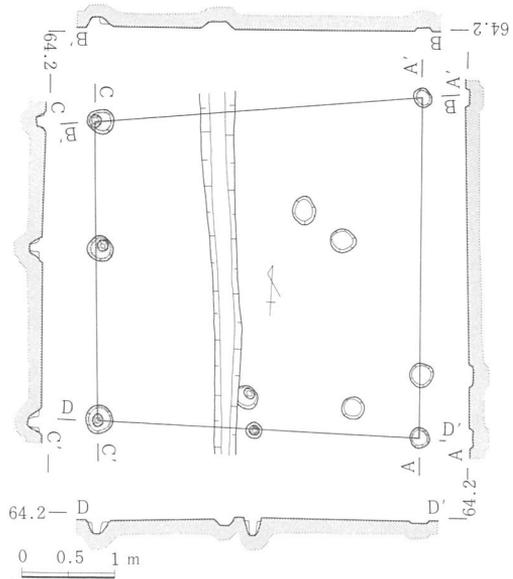


第143図 2-OD平面図・断面図



第144図 13-OB平面図・断面図

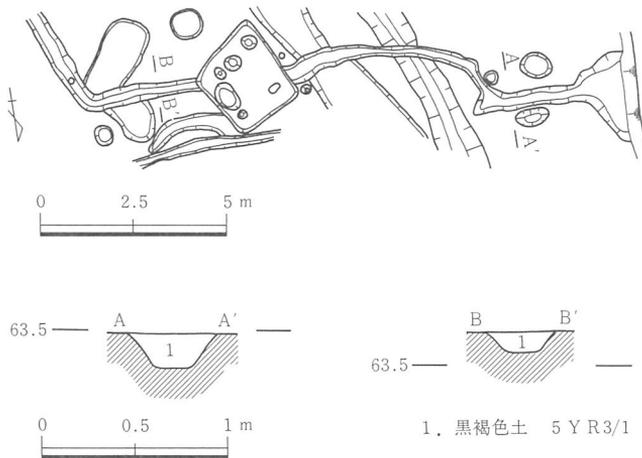
寄りの、J13EN・EO・FN・FOにまたがる地区で検出した2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-90°-Eを示す。桁行間2間×梁間2間で、実数値は西桁行間3.77m、東桁行間3.7m、北梁間3.36m、南梁間3.27mを測った。13-OBは、棟持柱の他に中央に東柱を1ヶ所有する総柱の建物であり、倉庫と考えられる。棟持柱の柱穴は径0.2m~0.38mの円形状で、深さ0.2m~0.3mを測った。東柱は径0.24mの円形で、深さ0.14mを測った。柱穴内から古式土師器の破片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第145図 14-OB平面図・断面図

14-OB (第145図, 図版24)

第2地区の北半部東端の、J08UP・UQ・VP・VQにまたがる地区で検出した2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-90°-Eを示す。桁行間2間×梁間2間で、実数値は西桁行間3.25m、東桁行間3.7m、北梁間3.55m、南梁間3.45mを測った。棟持柱のうち北梁部と東桁行部の中間の柱穴は確認できなかった。柱穴は径0.18m~0.3mの円形で、深さ0.06m~0.3mを測った。内部から古式土師器の破片がごく少量出土したが、図



第146図 8-OS平面図・断面図

示し得るものはなかった。

3. 溝

第3地区では、古墳時代前期に比定される溝が1条検出された。

8-O S (第146図)

第3地区の中央部の、J 13AM・AN・AO・AP・AQ・BQにまたがる地区で検出した溝である。竪穴住居1-OD付近から北西方向へ約3m走り、その後西へ折れて調査区を横断し、調査区西壁外へのびている。西壁付近で平安時代の土坑に切られている。又、8-O Sは竪穴住居1-OD、2-ODにも切られており、両者より前出のものといえる。検出長22.5m、幅0.5m、深さ0.3mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から古式土師器の破片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

第2項 奈良時代

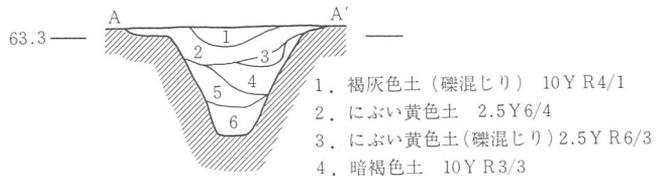
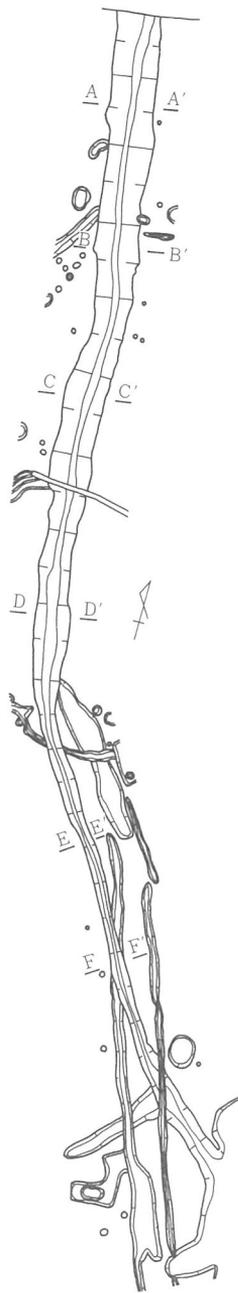
奈良時代に比定される遺構としては溝がある。

1. 溝

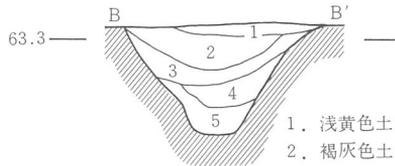
第3地区では、奈良時代に比定される溝が1条検出された。

1-O S (第147図、図版24, 25)

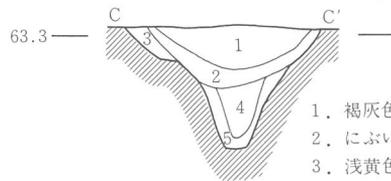
第1地区、第2地区で検出された1-O Sの続きである。第3地区の北西部から南東部にかけての、J 08PM~WM・PN~WN・J 13AN・BN・AO~CO・DP・EPにまたがる地区で検出した。第3地区の南東端部から北西方向に中央部付近まで走り、その後北に折れて北西半部を北流し、第2地区に至る。第3地区での検出長64.5mで、幅0.6m~2m、深さ0.6m~1.09mを測った。南側の部分では溝幅・深度ともに規模が縮小しているが、これは、この部分が後世の整地によって削平され、上部が削られていることによる。埋土は所によって3層から6層に分層できるが、2.5Y4/2暗灰黄色、N3/暗灰色を基調とする下層と、10YR4/1褐灰色、2.5Y6/4にぶい黄色を基調とする上層に大別される。埋土内からの遺物は須恵器・土師器が北端部付近でごく少量出土し、中央部付近では古式土師器がごく少量出土したのみで、図示し得るものはまったくなかった。第2地区を中心に1-O Sからは多量の遺物が出土しているが、南方に約20m隔てた第3地区からはまったく遺物が出土していない。この現象は第1地区の北に隣接する「山直中遺跡」でもみられ、1-O Sのつづきと思われる大溝からは遺物がほとんど出土していない。



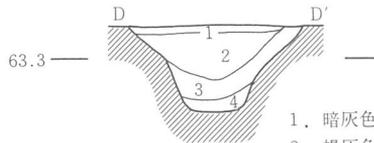
1. 褐灰色土 (礫混じり) 10Y R4/1
2. にぶい黄色土 2.5Y6/4
3. にぶい黄色土 (礫混じり) 2.5Y R6/3
4. 暗褐色土 10Y R3/3
5. 暗灰色粘質土 N3/
6. 暗灰黄色土 (礫混じり) 2.5Y4/2



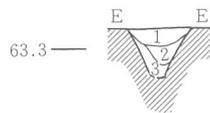
1. 浅黄色土 2.5Y7/4
2. 褐灰色土 (礫混じり) 10Y R4/1
3. にぶい黄色土 2.5Y6/4
4. にぶい黄色土 (礫混じり) 2.5Y6/3
5. 暗灰黄色土 (礫混じり) 2.5Y4/2



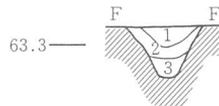
1. 褐灰色土 (礫混じり) 10Y R4/1
2. にぶい黄色土 2.5Y6/4
3. 浅黄色土 2.5Y7/4
4. 暗灰黄色土 (礫混じり) 2.5Y4/2
5. 暗灰黄色土 2.5Y4/2



1. 暗灰色土 (礫混じり) N3/
2. 褐灰色土 (礫混じり) 10Y R4/1
3. 褐灰色粘質土 10Y R4/1
4. 淡黄色シルト 2.5Y8/3



1. 褐色混じり灰色粘質土 5Y5/1
2. 浅黄色粘質土 2.5Y7/4
3. 暗灰色砂 N3/



1. 浅黄色粘質土 2.5Y7/4
2. 灰黄色粘質土 2.5Y7/2
3. 暗灰色砂 N3/



第147図 1-O-S平面図・断面図

第3項 平安時代

平安時代に比定される遺構としては土坑がある。

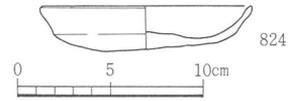
1. 土坑

18-00

第3地区の中央部西端の、J13AMで検出した土坑である。遺構の西半部が調査区西壁外へのびているため、全体の形状は不明である。南北2.38m、東西検出長1.3m、深さ0.64mを測った。埋土は5層に分層でき、上より7.5YR5/6明褐色土、2.5YR5/3にぶい赤褐色土、5YR3/1黒褐色土、5YR2/1黒褐色砂質土、5Y5/1灰色砂質土である。内部から土師器が少量出土した。

18-00出土遺物（第148図824）

18-00からは土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。



824は土師器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方へのびる。

第148図 18-00出土遺物

第4項 室町時代

室町時代に比定される遺構としては溝がある。

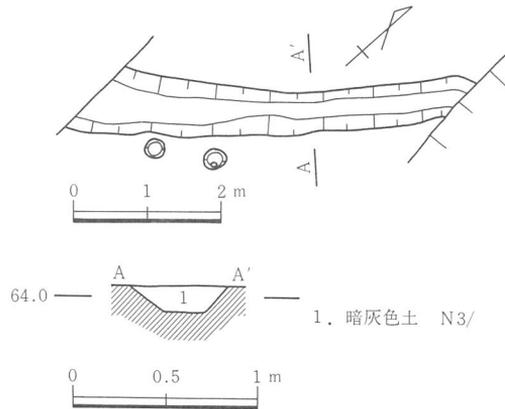
1. 溝

9-0S（第149図）

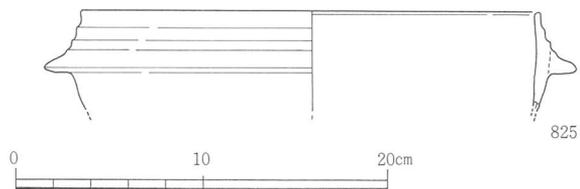
第3地区の北西半部の、J08SM・TMにまたがる地区で検出した溝で

ある。南西から北東方向に走る。北東端部は確認したが、南西部は調査区西壁外へのびている。検出長4.6mで、幅0.53

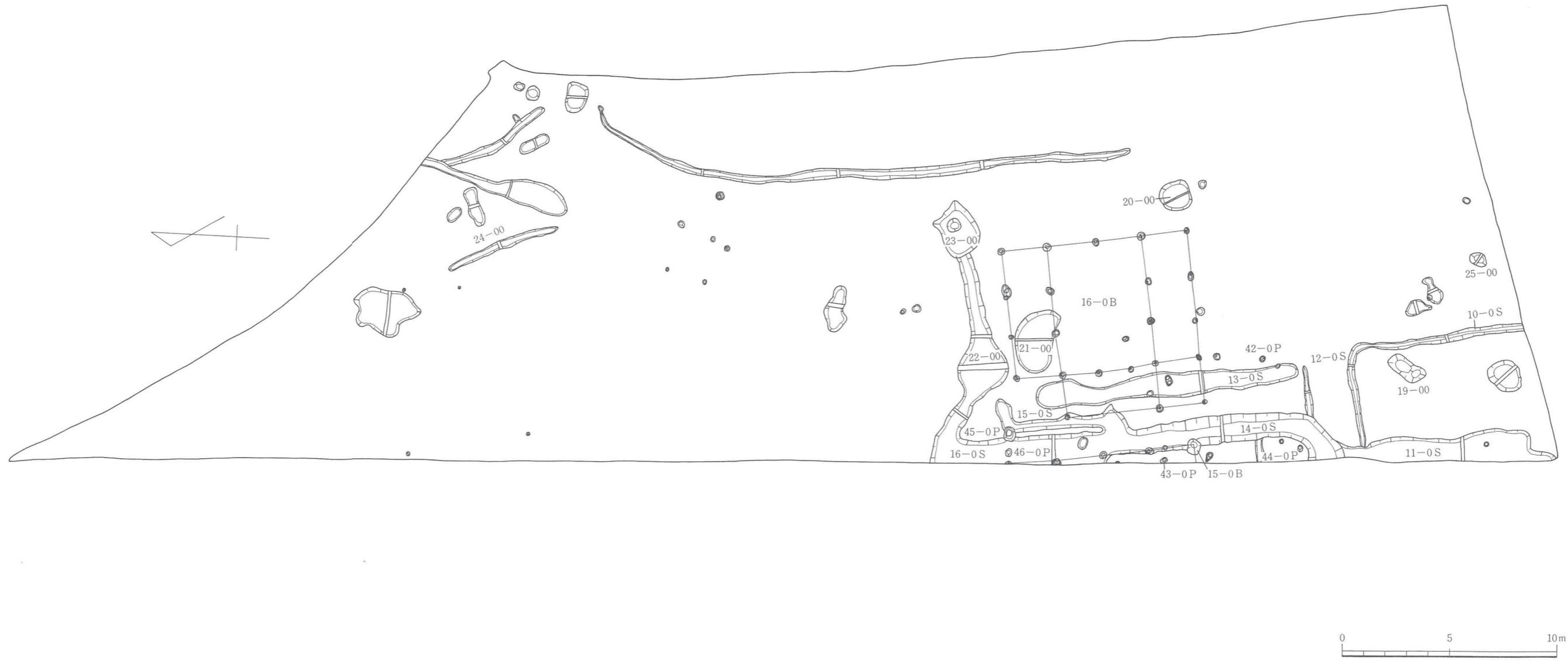
m、深さ0.14mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から瓦器・瓦質土器が少量出土した。



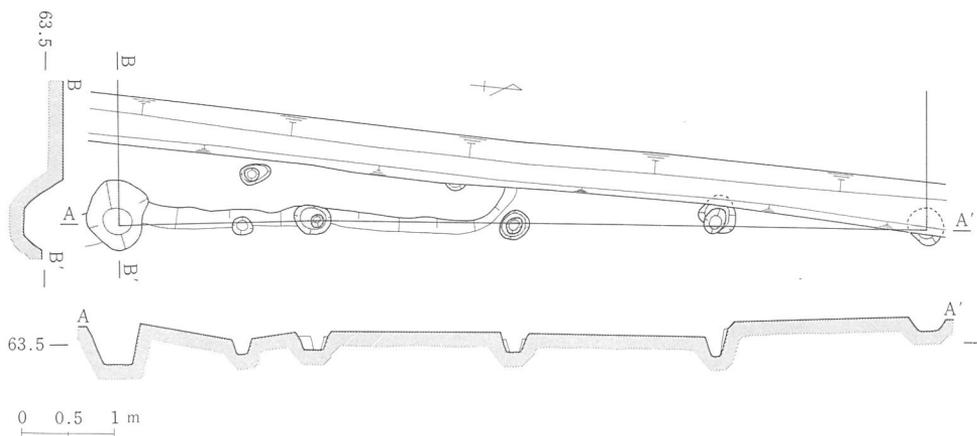
第149図 9-0S平面図・断面図



第150図 9-0S出土遺物



第151图 第4地区平面图



第152図 15-OB平面図・断面図

9-OS出土遺物（第150図825）

9-OSからは瓦器・瓦質土器が少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

825は瓦質土器の羽釜である。体部上端及び口縁部のみの破片である。半球形に近い体部と思われ、口縁部が直立する。肩部に幅の狭い鏝を付している。口縁部外面に段を巡らせている。

第5節 第4地区

第1項 平安時代

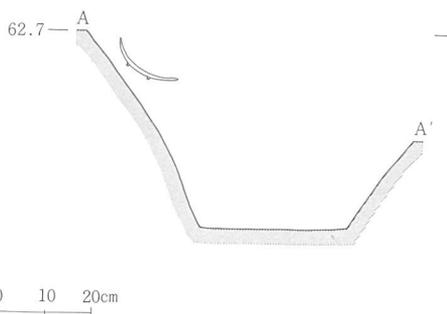
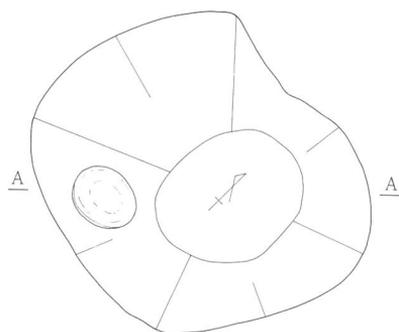
平安時代に比定される遺構としては掘立柱建物・土坑・溝・ピットなどがある。

1. 掘立柱建物

第4地区では、平安時代に比定される掘立柱建物が2棟確認された。

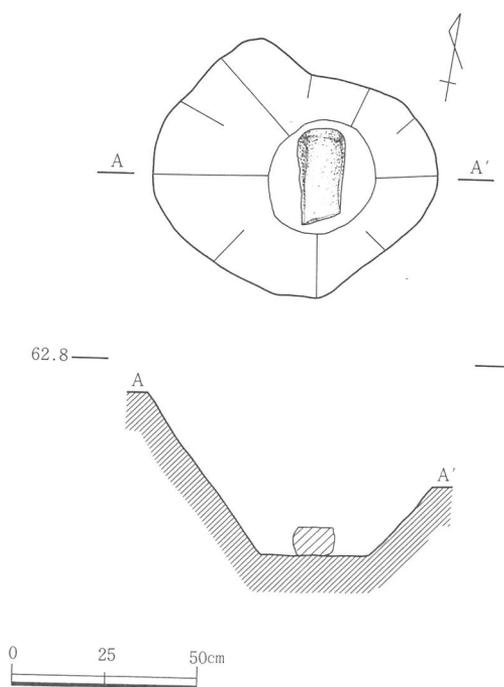
15-OB（第152図，図版29）

第4地区の南半部西端の、J13SN・TN・UN・VNにまたがる地区で検出した掘立柱建物である。主軸はN-



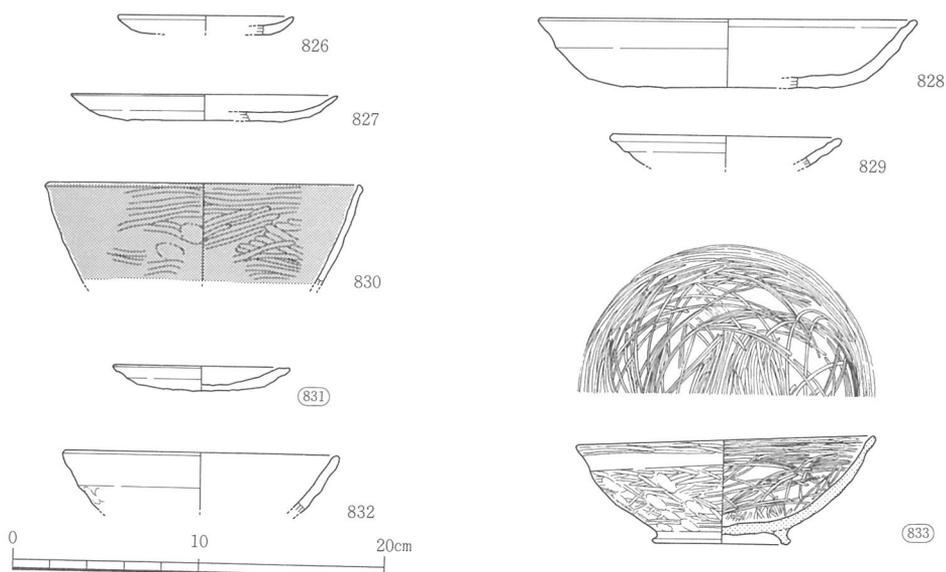
第153図 15-OB遺物出土状況

97° -Wを示す。今回検出したのは東梁部の棟持柱列のみで、平面プランの大部分は調査区西壁外にある。東梁部は4間で、実数値8.7mを測った。すぐ東側に並存する16-OBとは主軸方位も一致し、柱間も同じであり、16-OBと同様に、梁間2間でその外側に庇を持つ可能性もある。柱穴は径0.3m~0.6mの円形で、深さ0.1m~0.4mを測った。南東コーナー部の棟持柱柱穴内には、上面に平坦な面を持つ石が置かれていた。これは礎石あるいは根石として使われていたものと思われる。柱穴内から土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。

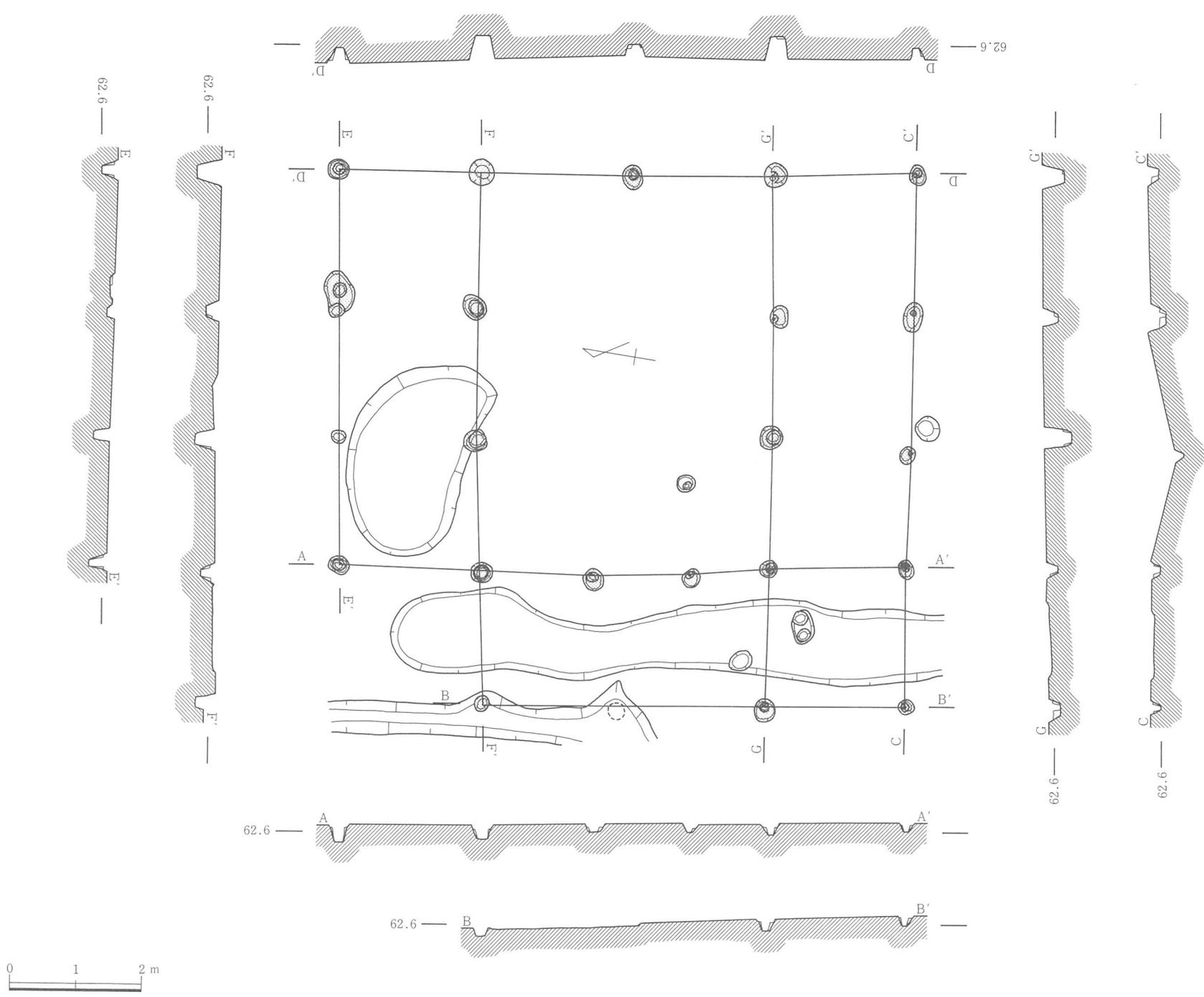


第154図 15-OB根石検出状況

15-OB出土遺物 (第155図826~833)



第155図 15-OB出土遺物



第156图 16-O B平面图·断面图

掘立柱建物15-OBを構成する柱穴からは土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは8点である。

826は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外上方にのびるものである。

827は土師器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外上方にのびる。小皿828を大型にしたという感がある。

828は土師器の杯である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じている。

829は土師器の小皿である。口縁部のみの小片のため、全体の形状などは不明である。

830は黒色土器B類の碗である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがわずかに内湾しつつ外上方へのびる。内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

831は土師器の小皿である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方にのびる。端部を軽く外側につまみ出している。

832は土師器で、碗と思われる。口縁部のみの破片で、器壁は肉厚である。

833は瓦器の碗である。やや丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのび、縁部付近でわずかに外反する。底部外面周縁付近に、径の大きな高い貼付高台を付す。内・外面ともに比較的密なヘラミガキ調整を施している。見込みに平行線状暗文がみられる。

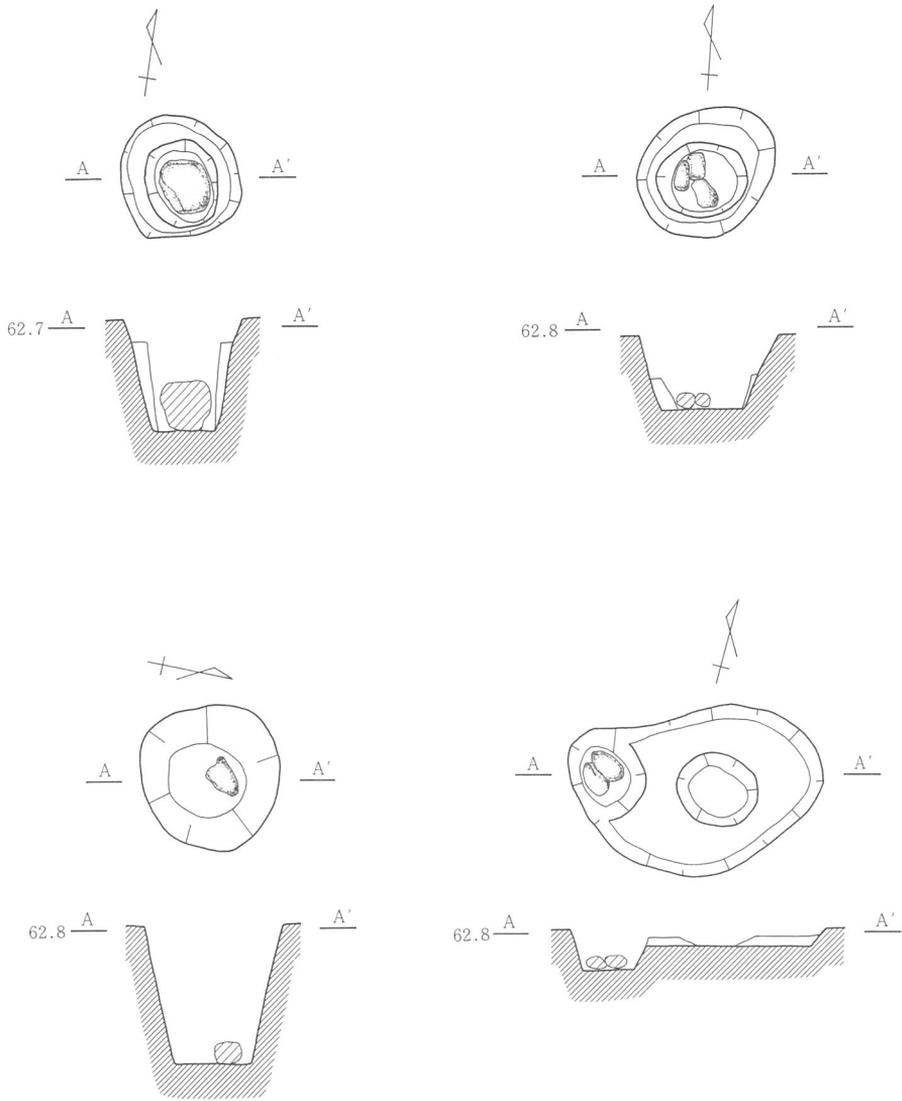
16-OB (第156図, 図版27, 28)

第4地区の南半部の、J 13TN~VN・SO~VO・SP~UPにまたがる地区で検出した2間×3間の掘立柱建物である。主軸はN-97°-Wを示す。桁行間3間×梁間2間で、北側、西側、南側の三面に庇を持つ形態を呈している。実数値は北桁行間5.8m、南桁行間5.8m、西梁間4.5m、東梁間4.4mを測った。棟持柱の柱穴は、径0.2m~0.4mの円形状を呈し、深さ0.2m~0.4mを測った。柱穴の中には根石を置いているものがみられる(第157図)。柱穴内からは土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。

16-OB出土遺物(第158図834~837)

掘立柱建物16-OBを構成する柱穴からは土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは4点である。

834, 835は土師器の小皿である。そのうち834は小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ低く外上方へのびる。全体的に丸みを持ち、浅い形状を呈する。

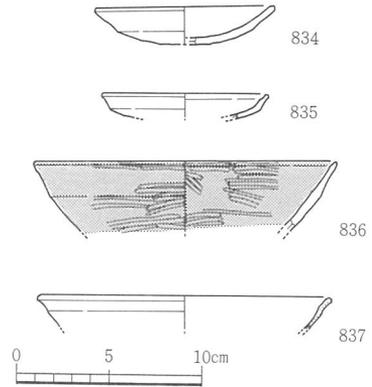


第157図 16-O B 根石検出状況

835は底部を欠損しているが平底と思われる。口縁の立ち上りが低く、短く外上方へ直立気味にのびる。

836は黒色土器B類の椀で、口縁部だけの破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。口縁端部外面に横ナデにより、軽く段が残る。肉厚で、内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

837は瓦器で、椀の破片と思われる。口縁端部付近のみの小片のため、全体の形状などは不明である。



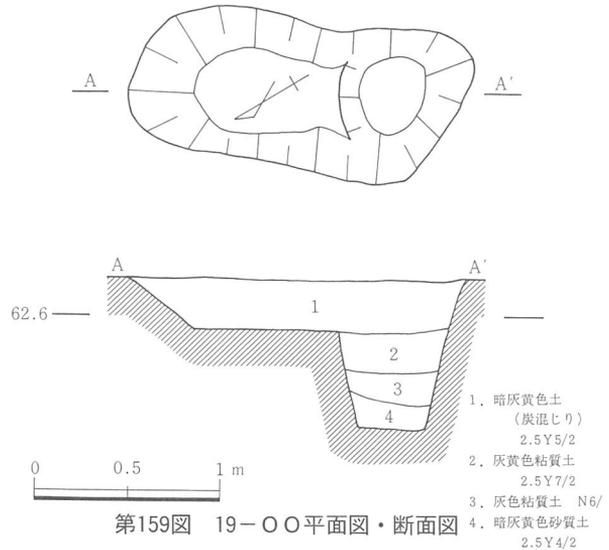
第158図 16-O B出土遺物

2. 土坑

第4地区では、平安時代に比定される土坑が7基検出された。

19-O O (第159図)

第4地区の南東端部の、J 13X Oで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.75m、短径0.77m、深さ0.86mを測った。埋土は4層に分層でき、上より2.5Y5/2暗灰黄色土（炭混じり）、2.5Y7/2灰黄色粘質土、N6/灰色粘質土、2.5Y4/2暗灰黄色粘質土となっている。内部から土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。



第159図 19-O O平面図・断面図

19-O O出土遺物 (第160図

838~844)

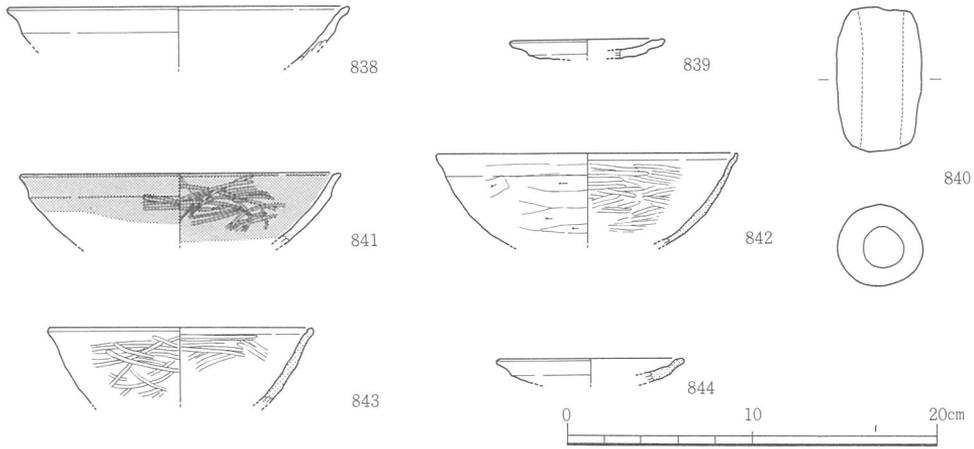
19-O Oからは土師器・黒色

土器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは7点である。

838は土師器の椀である。口縁部だけの破片で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へ低くのびる。端部付近で軽く外反して終る。

839は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外反して終る。

840は土師質の土錘である。径4.6cmの円形の断面で、長さ7.7cmの筒形を呈し、ほぼ中



第160図 19-〇〇出土遺物

中央部に径2.2cmの円孔を穿っている。

841は黒色土器A類の碗である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。内面は密なヘラミガキ調整、外面は端部付近にのみヘラミガキ調整が施されている。

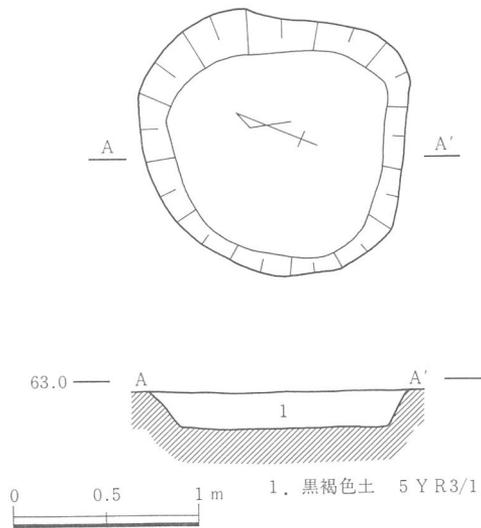
842, 843は瓦器の碗で、ともに口縁部のみの破片である。そのうち842は口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび、端部を内側に曲げ込んでいる。外面はヘラケズリした後ヘラミガキ、内面は密なヘラミガキ調整を施している。

843は口縁の立ち上りが比較的まっすぐ外上方へのびる。内・外面ともにヘラミガキ調整を施している。

844は瓦器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外反して終る。

20-〇〇 (第161図)

第4地区の南半部やや東寄りの、J13UQで検出した土坑である。不整楕円形状を呈し、長径1.56m、短径1.4m、深さ0.18mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から土師器がごく少量出土した。

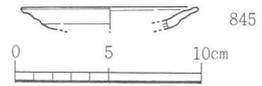


第161図 20-〇〇平面図・断面図

20-00出土遺物（第162図845）

20-00からは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

845は土師器の小皿である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外反して終る。



第162図 20-00出土遺物

第4地区の南半部の、J13SO・TOにまたがる地区で検出した土坑である。不整楕円形状を呈し、長径3m、短径1.8m、深さ0.06mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

21-00出土遺物（第163図846～852）

21-00からは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは7点である。

846, 849は土師器の小皿である。そのうち846は小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方にまっすぐのびる。

849は平らな底部で、口縁の立ち上りが一度短く内弯した後外方に屈曲するもので、端部を内側に曲げ込んでいる。

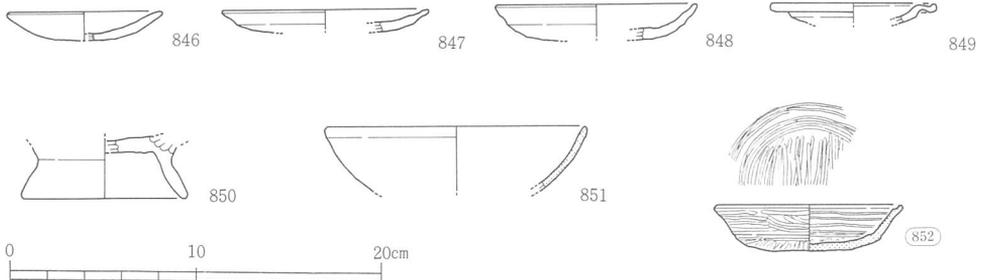
847, 848は土師器の皿である。そのうち847は平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外上方へのびる。

848は平らな底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。

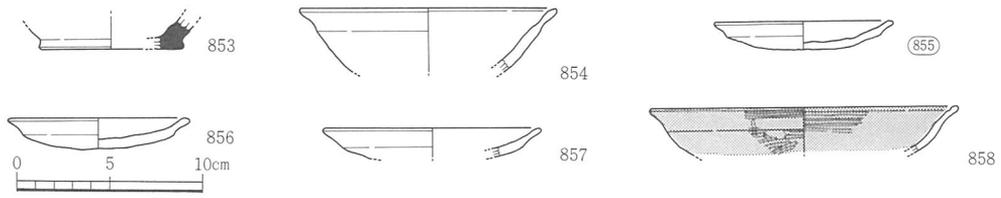
850は土師器で、脚付皿と思われる。脚部みの破片であるが、杯部は平らな底部で、口縁の立ち上りが低く内弯しつつ外上方へのびる形状を呈するものと思われる。脚部は比較的肉厚で、「ハの字状」に開く比較的高い形状を呈する。

851は瓦器の椀で、口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。

852は瓦器の小皿である。わずかに丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがゆるく外反し



第163図 21-00出土遺物



第164図 22-〇〇出土遺物

つつ外上方へのびる。内・外面ともに密なヘラミガキ調整を施している。

22-〇〇

第4地区の中央部やや西寄りの、J13S〇で検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径2.4m、短径2.2m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から須恵器・土師器・黒色土器などが少量出土した。

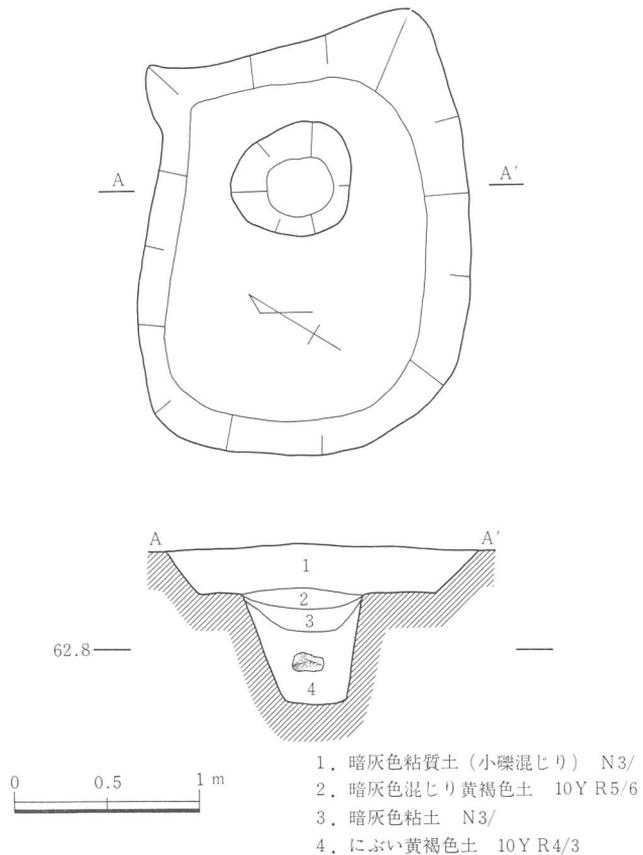
22-〇〇出土遺物（第164図853～858）

22-〇〇からは須恵器・土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは6点である。

853は須恵器の杯と思われる。底部周縁付近のみの小片であり、全体の形状などは不明である。底部外面に回転糸切りの痕跡が残る。

854は土師器の椀である。口縁部だけの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。

855～857は土師器の小皿である。ともにやや丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方へのびる。



第165図 23-〇〇平面図・断面図

1. 暗灰色粘質土（小礫混じり） N3/
2. 暗灰色混じり黄褐色土 10Y R5/6
3. 暗灰色粘土 N3/
4. にぶい黄褐色土 10Y R4/3

858は黒色土器B類の皿である。口縁部のみの破片であるが、平らな底部と思われる。口縁の立ち上りが内弯しつつ低く外上方へのび、その後わずかに外反して終る。内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

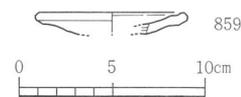
23-〇〇 (第165図)

第4地区の中央部やや東寄りの、J13SPで検出した土坑である。不整楕円形状を呈し、長径2.15m、短径1.7mを測った。深さは平均0.28mであるが、東半部で径0.7mの円形状に一部深い地点があり、最深部で0.9mを測った。埋土は4層に分層でき、上よりN3/暗灰色粘質土(小礫混じり)、10YR5/6暗灰色混じり黄褐色土、N3/暗灰色粘土、10YR4/3にぶい黄褐色土となっている。内部から土師器がごく少量出土した。

23-〇〇出土遺物 (第166図859)

23-〇〇からは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

859は土師器の小皿である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが一度低く内弯しつつ外上方へのび、その後短く外反して終る。肉厚である。



第166図 23-〇〇出土遺物

24-〇〇

第4地区の北半部の、J13Q〇で検出した土坑である。不定形状を呈し、長径2.2m、短径0.75m、深さ0.12mを測った。埋土は1層で、5YR3/1黒褐色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

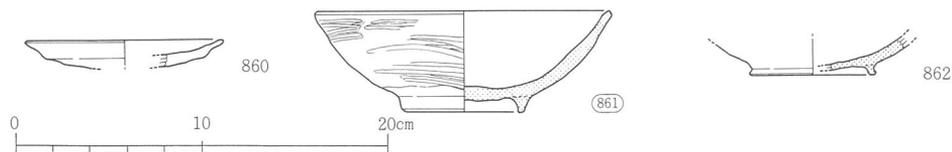
24-〇〇出土遺物 (第167図860~862)

24-〇〇からは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

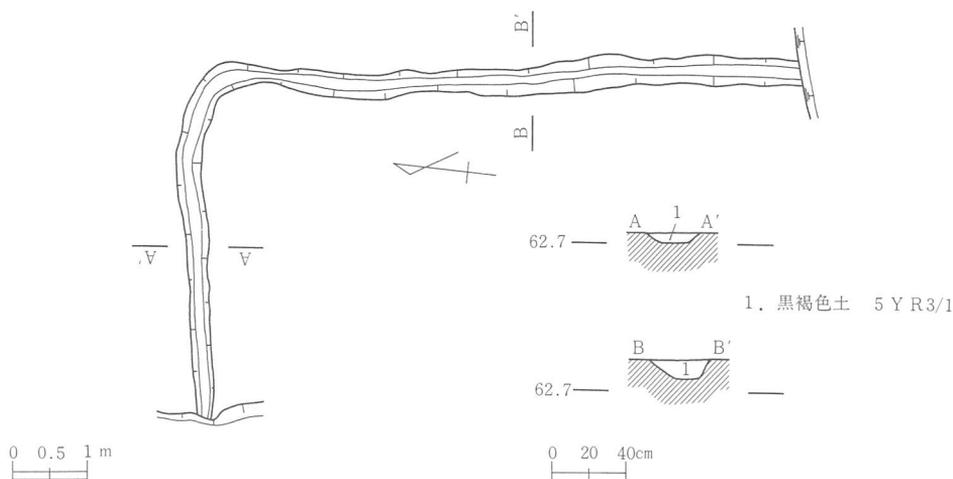
860は土師器の小皿である。やや丸みを持つ肉厚の底部で、口縁部はごく低く短く、周縁を外上方につまみ出すのみのものである。

861, 862は瓦器の椀である。そのうち861は平らな底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。底部外面周縁付近に断面台形状の貼付高台を付す。内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

25-〇〇



第167図 24-〇〇出土遺物



第168図 10-O S平面図・断面図

第4地区の南端部の、J 13 Y Pで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径0.85m、短径0.63m、深さ0.11mを測った。埋土は1層で、2.5 Y 5/2暗灰黄色土である。内部から土師器・瓦器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

3. 溝

第4地区では、平安時代に比定される溝が7条検出された。

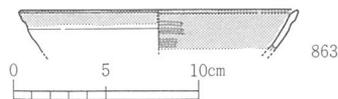
10-O S (第168図)

第4地区の南西半部の、WN・XN・WO～YOにまたがる地区で検出した溝である。調査区南端部から北へ8m走り、その後西へ直角に折れて調査区西壁外へのびている。検出長13m、幅0.2m～0.45m、深さ0.07mを測った。埋土は1層で、5 Y R 3/1黒褐色土である。内部から土師器・黒色土器などがごく少量出土した。

10-O S出土遺物 (第169図863)

10-O Sからは土師器・黒色土器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

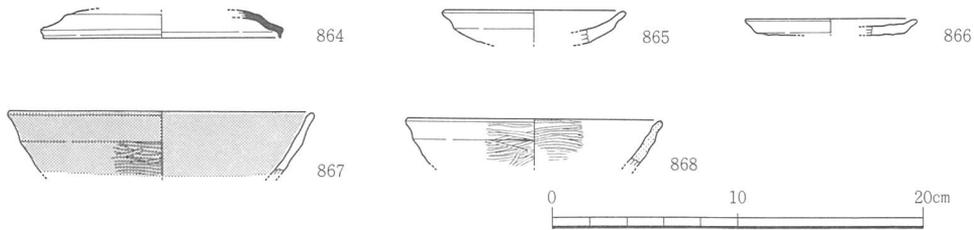
863は黒色土器A類で、碗と思われる。口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部でわずかに外反する。内面にヘラミガキ調整を施す。



第169図 10-O S出土遺物

11-O S

第4地区の南西端部の、J 13 WN～J 18 ANにまたがる地区で検出した溝である。南北方向に走り、西側の溝肩は調査区西壁外にある。検出長は10mで、幅1m～1.3m、深さ



第170図 11-O S 出土遺物

0.1mを測った。埋土は1層で、5 Y R3/1黒褐色土である。内部から須恵器・土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。

11-O S 出土遺物 (第170図864~868)

11-O Sからは須恵器・土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは5点である。

864は須恵器の杯蓋である。平坦な頂部と屈曲する縁部からなるものである。

865, 866は土師器の小皿である。そのうち865は比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外側へつまみ出すものである。

866は平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外上方へのびる。

867は黒色土器B類で、碗と思われる。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

868は瓦器で、碗と思われる。口縁部のみの破片で、口縁端部外面に横ナデによる凹みが生じている。

これらの遺物のうち864は他の遺物に比べてかなり時代が遡るものであり、11-O Sの時期には合致しないが、この遺物の出土は付近に奈良時代の遺構の存在をうかがわせるものいえる。

12-O S

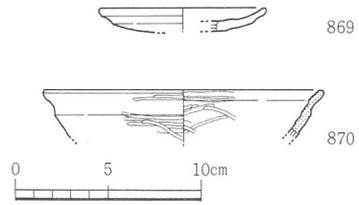
第4地区の南西半部の、J 13WN・WOにまたがる地区で検出した溝である。東西方向に走り、東端は途切れており、西側は14-O Sに合流している。検出長は2.5mで、幅0.2m~0.3m、深さ0.05mを測った。埋土は1層で、5 Y R3/1黒褐色土である。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土した。

12-O S 出土遺物 (第171図869, 870)

12-O Sからは土師器・瓦器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

869は土師器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方にのびる。

870は瓦器で、碗と思われる。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。



第171図 12-O S出土遺物

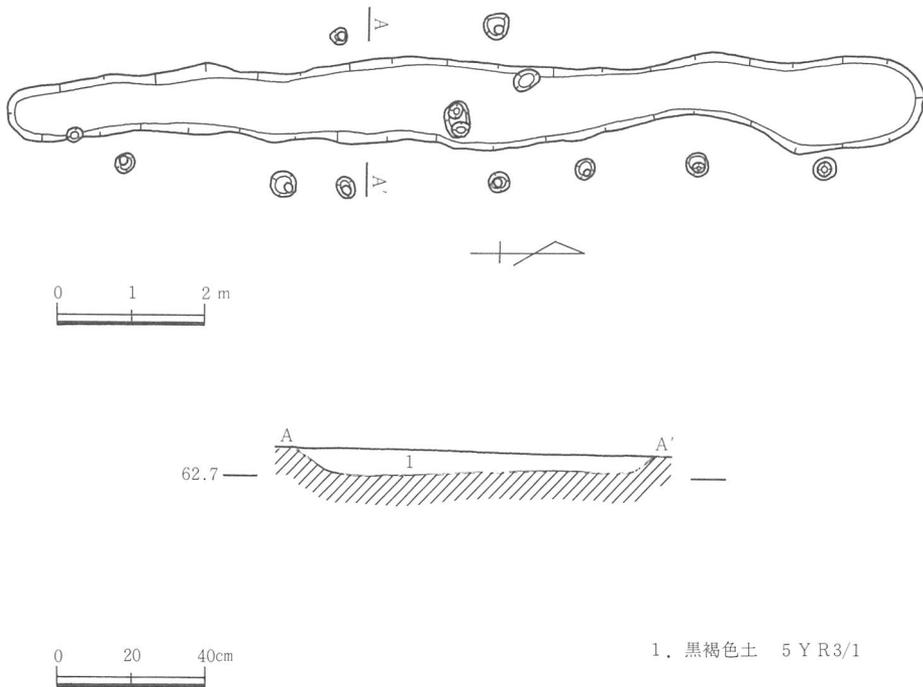
13-O S (第172図)

第4地区の南半部西寄りの、J 13TN~VN・TO~WOにまたがる地区で検出した溝である。南北方向に走り、検出長は約12mで、幅0.75m~1.2m、深さ0.05mを測った。埋土は1層で、5 Y R3/1黒褐色土である。内部から土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。

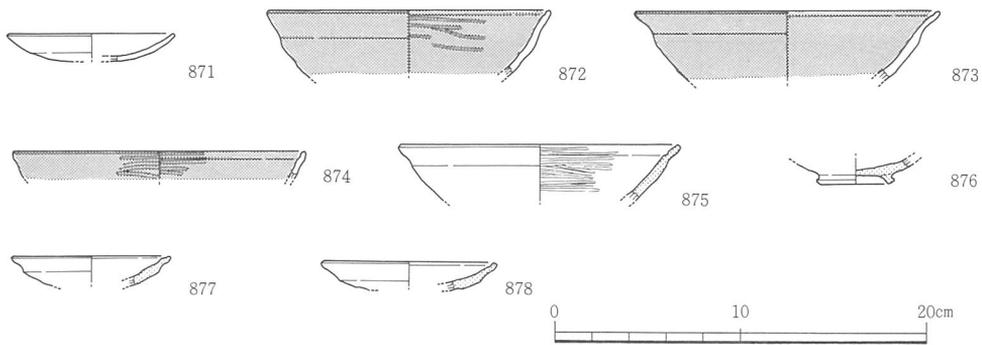
13-O S 出土遺物 (第173図871~878)

13-O Sからは土師器・黒色土器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは8点である。

871は土師器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へ低くのびる。



第172図 13-O S 平面図・断面図



第173図 13-O S出土遺物

872～874は黒色土器B類の碗である。いずれも口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

875, 876は瓦器の碗である。そのうち875は口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。

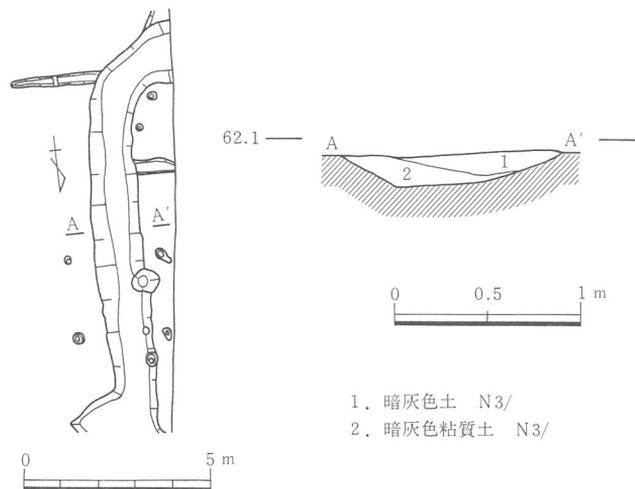
877, 878は瓦器の小皿である。そのうち877は比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがごく低く、わずかに外反して終る。

878は平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方へのびる。

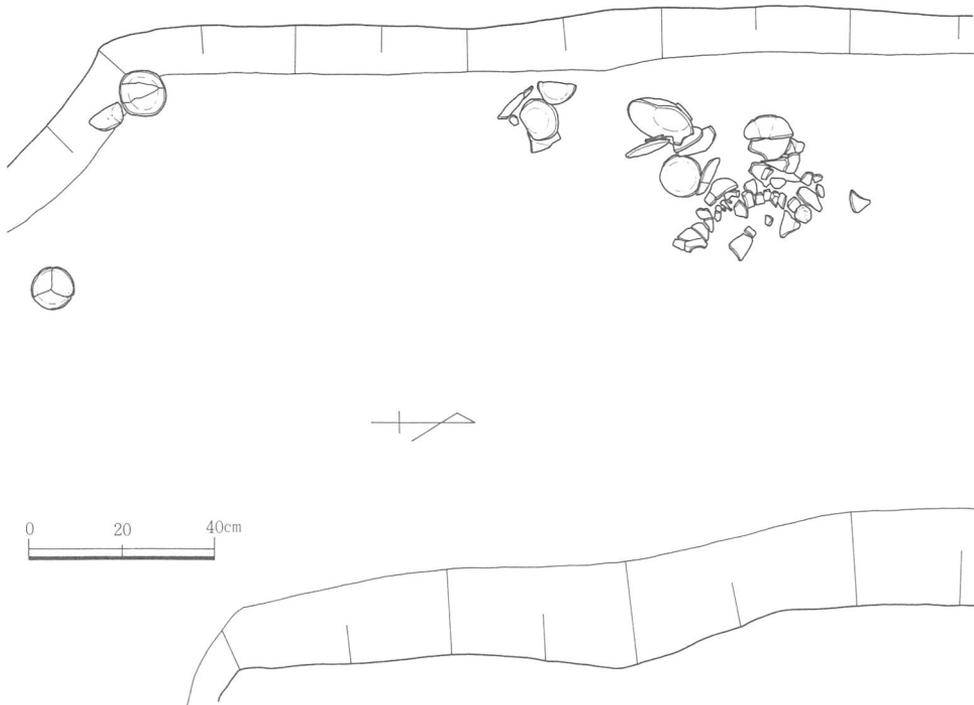
14-O S (第174図)

第4地区の南半部西端の、J 13TN～VN・TO～WOにまたがる地区で検出した溝である。調査区西壁から東へ1.5m走り、その後直角に折れて10m北流し、再び西へ直角に折れて調査区西壁外へ出る。

検出長12mで、幅0.85m、深さ0.2mを測った。埋土は2層に分層でき、上よりN3/暗灰色土、N3/暗灰色粘質土となっている。内部より須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・磁器などが多量に出土した。



第174図 14-O S平面図・断面図



第175図 14-O S 遺物出土状況

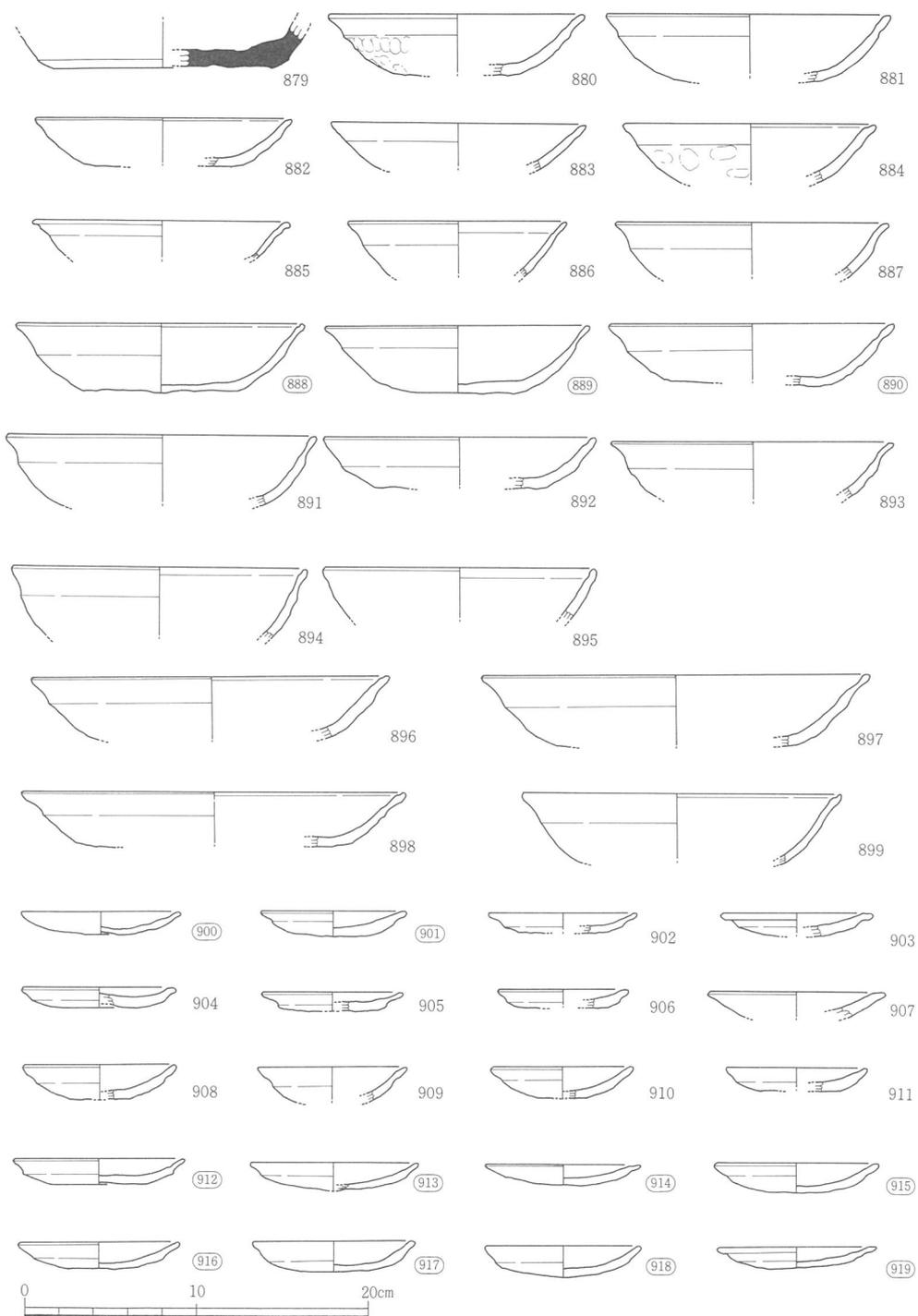
14-O S 出土遺物 (第176図879～第179図1012)

14-O Sからは須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・磁器などが多量に出土した。整理の段階では可能なもののすべてを図化しているが、ここでは134点を抽出して掲載した。

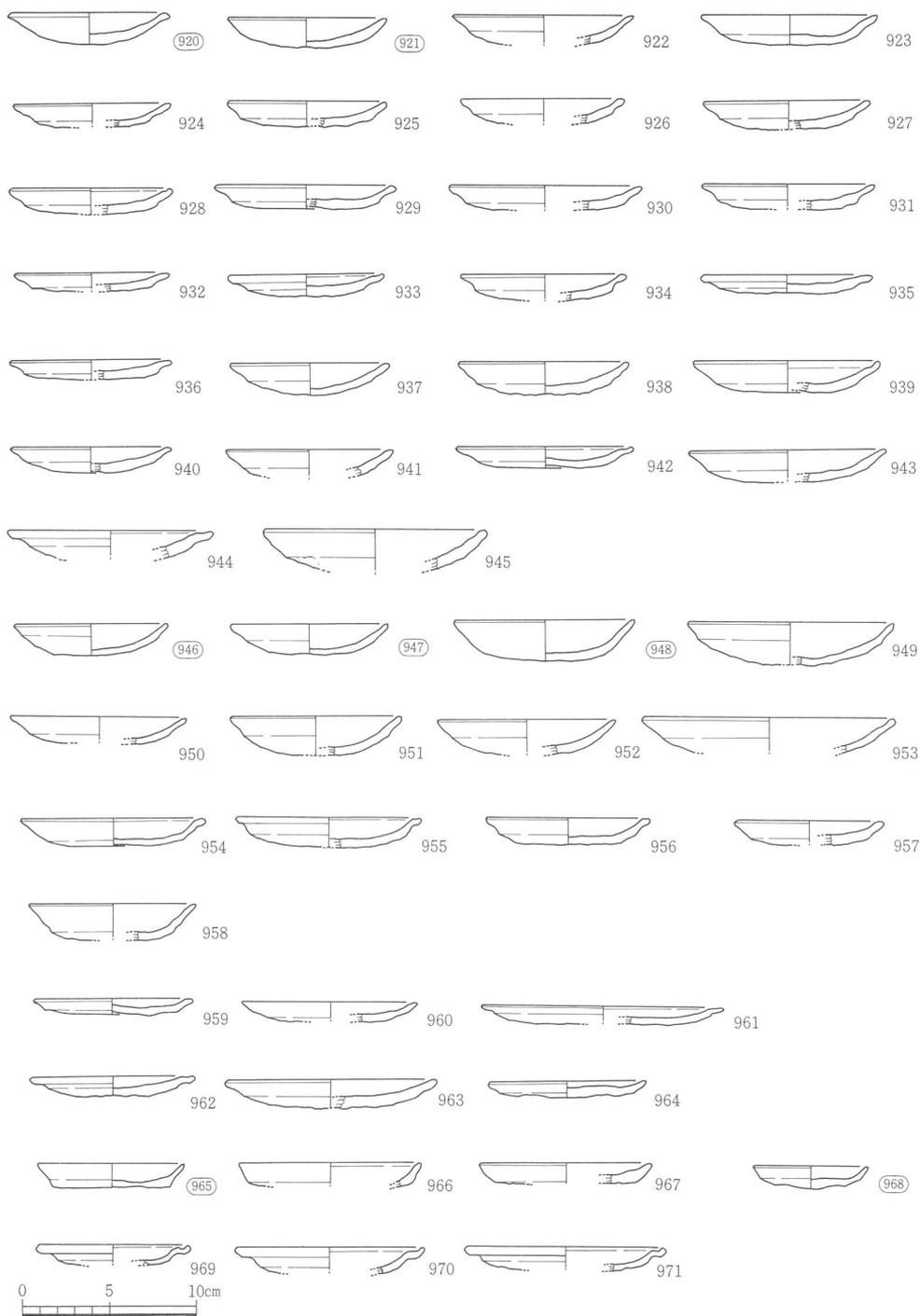
879は須恵器で、底部のみの破片である。平らな底部で、体部が外上方へまっすぐのびる。

880～899は土師器の杯である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方にのび、全体的に丸みを持つもの(880, 881, 884)と、平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびるもの(882, 888～890, 896～899)などがある。

900～952, 954～960, 962～971は土師器の小皿である。丸底ないしは小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび、全体的に丸みを持つ形状を呈するもの(900, 908, 917, 918, 921, 946～948など)、平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、内弯しつつ外上方へ短くのび、端部を外方へ軽くつまみ出すもの(901, 912～916, 919, 924～935など)、平らな底部で、口縁の立ち上りが低く、まっすぐ外上方へのびるもの(957, 958)、平らな底部で、口縁の立ち上りがほとんどなく、わずかに上反り気味に開



第176图 14-O S 出土遺物(1)



第177图 14-O S出土遺物(2)

く程度のもの（936, 959, 960, 962～964）, 平らな底部で, 口縁の立ち上りがごく低く, 短く外上方に開くもの（965～968）, 平らな底部で, 口縁の立ち上りが一度内弯しつつ外上方へ低くのび, その後外反して外上方へ開くもの（969～971）などがある。

945, 953, 961は土師器の皿である。そのうち945は底部を欠損しているが, 比較的丸みを持つ底部と思われ, 口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。全体的に丸みを持つ形状を呈する。

953は底部を欠損しているが, 平底の底部と思われ, 口縁の立ち上りが低くまっすぐ外上方へのびる。

961は平底の底部で, 口縁の立ち上りがほとんどなく, わずかに上反り気味にのびる程度のものである。

972は土師器で, 堦の破片と思われる。口縁部のみの破片で, 口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部上面に面をなす。

973～975, 977は黒色土器A類の碗である。そのうち973は平らな底部で, 口縁の立ち上りが比較的直線的に外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。底部外面周縁付近に断面台形状の貼付高台を付す。内面全体をヘラミガキ調整し, 外面は指押さえの後ヘラミガキ調整している。

974は口縁部のみの破片で, 口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。全体的に丸みを持つ形状を呈している。内面はヘラミガキ調整, 外面はヘラケズリの後ヘラミガキ調整を施す。

975は口縁部のみの破片で, 口縁の立ち上りが内弯しつつ低く外上方へのび, 端部付近でわずかに外反して終る。比較的浅い形状を呈する。

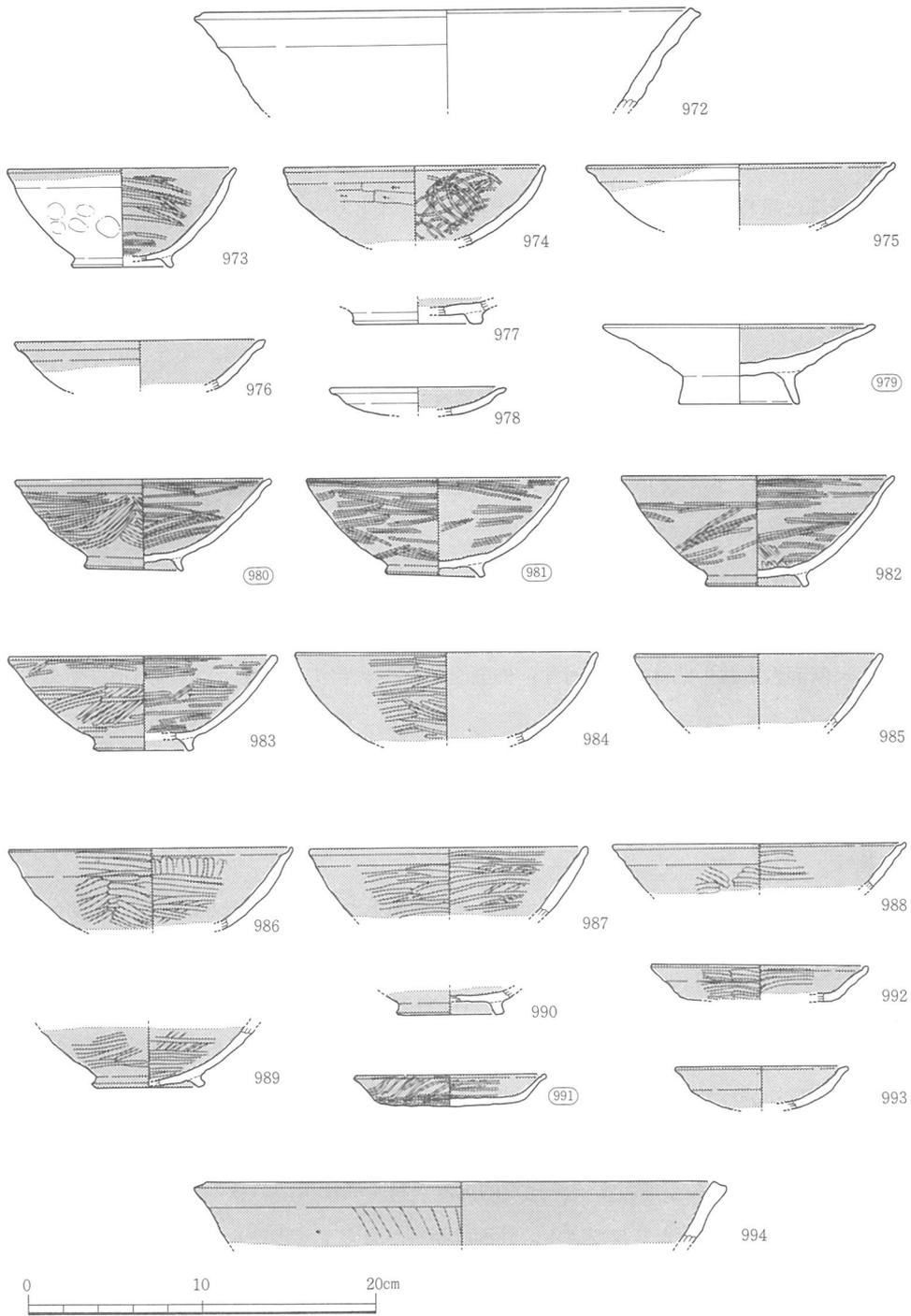
977は底部のみの破片で, 断面台形状の貼付高台を付す。

976は黒色土器A類の杯である。底部は欠損しているが, 比較的平らな底部と思われ, 口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。内面をヘラミガキ, 外面は指ナデによる調整を施す。

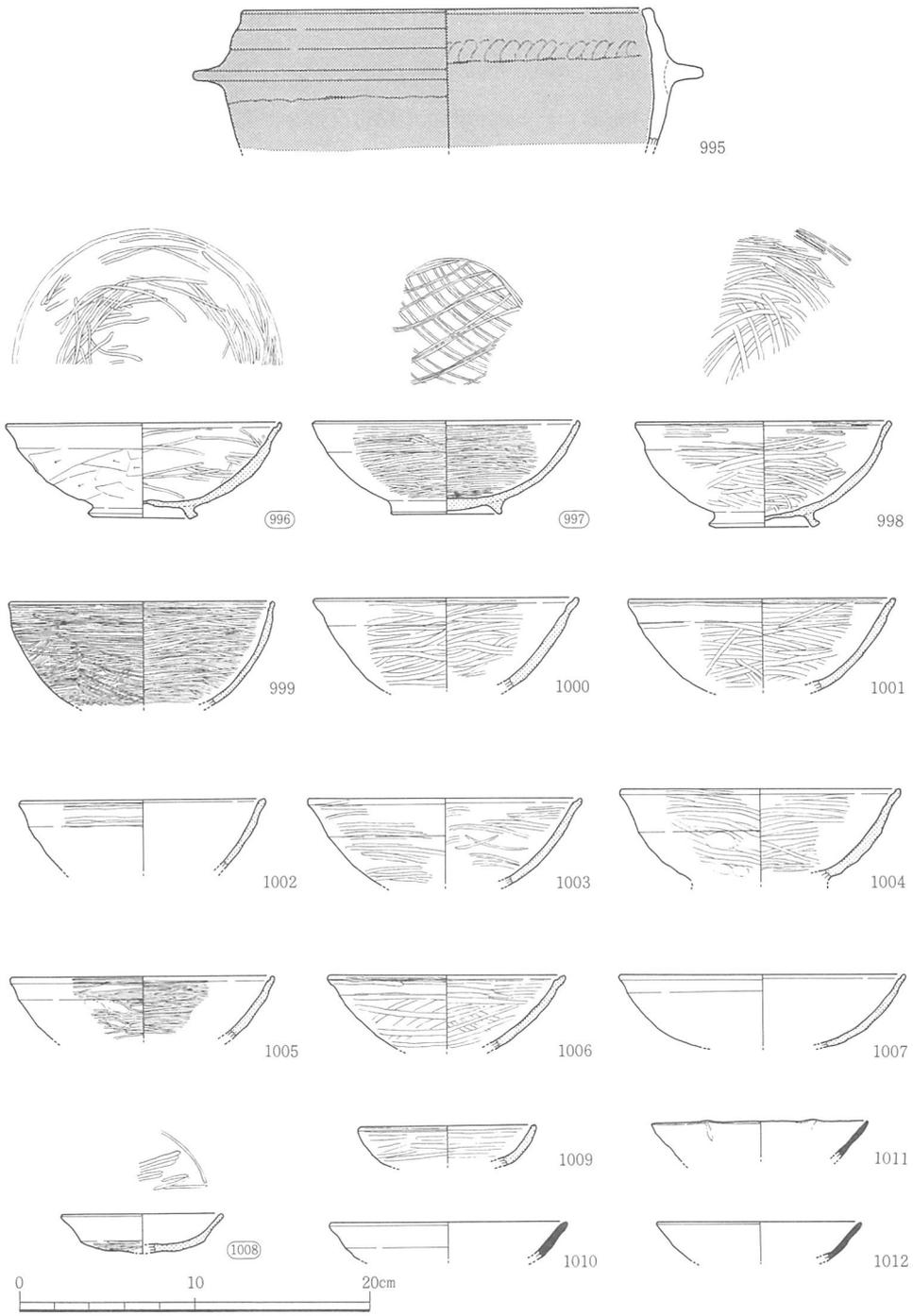
978は黒色土器A類の小皿である。比較的丸みを持つ底部で, 口縁の立ち上りが低く, 短く外反して終る。内面をヘラミガキ, 外面は指押さえとナデ調整を施す。

979は黒色土器A類の台付皿である。平らな底部で, 口縁の立ち上りが低く外上方にまっすぐのびる。底部外面周縁付近に肉厚で高い貼付高台を付す。

980～990は黒色土器B類の碗である。小さい平底の底部で, 口縁の立ち上りが比較的まっ



第178图 14-O S出土遺物(3)



第179图 14-O S 出土遺物(4)

すぐ外上方へのびる。口縁端部付近でわずかに外反するもの（980～982），そのまま丸くおさめるもの（983～985，987），端部内面に凹みが生じるもの（986，988）などがある。底部外面周縁付近に断面三角形ないしは台形状の貼付高台を付す。内・外面ともに比較的密なヘラミガキ調整を施す。

991～993は黒色土器B類の小皿である。そのうち991，992は平らな底部で，口縁の立ち上りがわずかに外反しつつ外上方へのびる。内・外面ともに密なヘラミガキ調整を施す。

994は丸みを持つ底部で，口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび，端部を軽く外側へつまみ出す。内・外面ともにヘラミガキ調整を施す。

995は黒色土器B類の羽釜である。体部下半は欠損しているが，半球形の体部と思われ，口縁部はわずかに内傾する。口縁部外面に段を巡らしている。肩部に幅の狭い鏝を付している。

996～1007は瓦器の椀である。比較的丸みを持つ底部で，口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび，深い椀形を呈する。1002以外は端部内面に沈線を1条巡らせている。底部外面周縁付近に高い貼付高台を付す。器面の調整は内・外面ともに密なヘラミガキで，外面をヘラケズリした後ヘラミガキするものもみられる。見込みに斜格子状暗文，連結輪状暗文などを施すものがある。

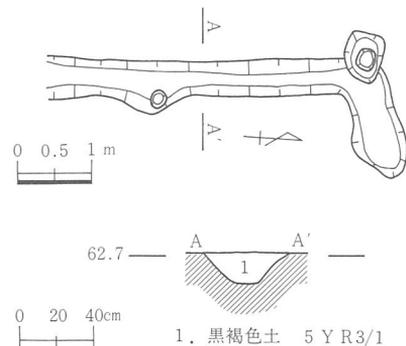
1008，1009は瓦器の小皿である。そのうち1008は比較的丸みを持つ底部で，口縁の立ち上りがわずかに外反しつつ外上方へのびる。見込みに平行線状暗文を施す。

1009は口縁部のみの破片である。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。内・外面ともに比較的密なヘラミガキ調整を施している。

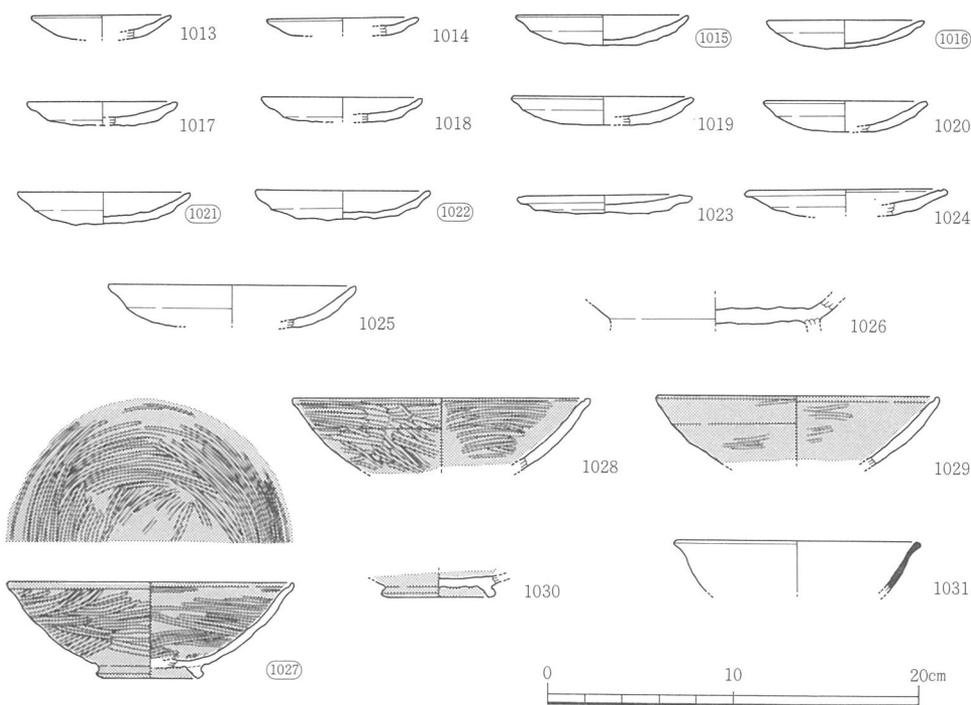
1010～1012は磁器で，そのうち1010は白磁の皿，1011，1012は青磁の皿と思われる。いずれも小片のため，全体の形状などは不明である。

15-O S（第180図）

第4地区の中央部西端の，J 13 S N～U Nにまたがる地区で検出した溝である。ほぼ南北方向に走るが，その北端部は東に直角に折れて終る。南端部は14-O Sに合流する。検出長6mで，幅0.46m～0.71m，深さ0.18mを測った。埋土は1層で，5 Y R 3/1黒褐色土である。内部から土師器・



第180図 15-O S平面図・断面図



第181図 15-O S 出土遺物

黒色土器・陶器などが比較的まとまった量出土した。

15-O S 出土遺物（第181図1013～1031）

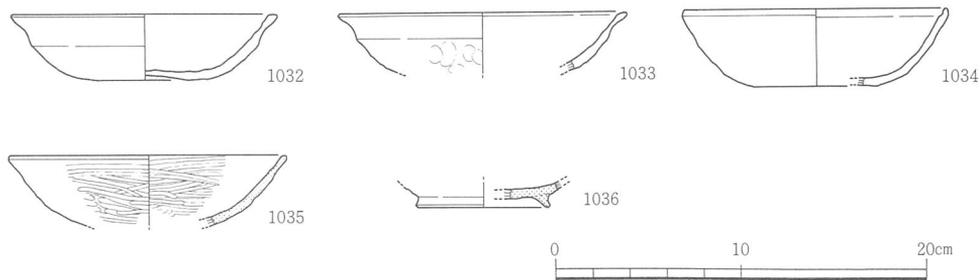
15-O Sからは土師器・黒色土器・陶器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは19点である。

1013～1024は土師器の小皿である。丸底ないしは小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのび、全体的に丸みを持つもの（1013, 1015, 1016, 1019, 1020）、平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、内湾しつつ外上方へ短くのび、端部を外側へ軽くつまみ出すもの（1014, 1017, 1021～1024）などがある。

1025は土師器の皿である。口縁部のみの破片であるが、平らな底部と思われる。口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へ低くのび、その後短く外反する。

1026は土師器で、底部のみの破片である。脚ないしは高台を付すものと思われる。器種は不明である。

1027～1030は黒色土器B類の椀である。全体の形状がうかがえるのは1027のみで、他は口縁部のみあるいは底部のみの破片であるが、どれも似かよった形状を呈していると思われる。底部は平底で、口縁の立ち上りがわずかに内湾しつつ外上方へのびる。端部内面に



第182図 16-O S 出土遺物

沈線を1条巡らす。底部外面周縁付近に、高く肉厚の貼付高台を付す。内・外面ともに密なヘラミガキ調整を施す。

1031は灰釉陶器で、碗の破片と思われる。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。

16-O S

第4地区の中央部の、J 13 S N～UNにまたがる地区で検出した溝である。蛇行しつつ東西方向に走る。東端部は23-O Oに接しており、西側は調査区西壁外へのびている。検出長約10mで、幅0.73m～0.86m、深さ0.06mを測った。埋土は1層で、5 Y R 3/1黒褐色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

16-O S 出土遺物 (第182図1032～1036)

16-O Sからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは5点である。

1032～1034は土師器の杯である。ともに小さな平底の底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じるもの(1032, 1033)、内面に凹みが生じるもの(1033)などがある。

1035, 1036は瓦器の碗である。ともに小片のため、全体の形状などは不明である。

1035は口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。

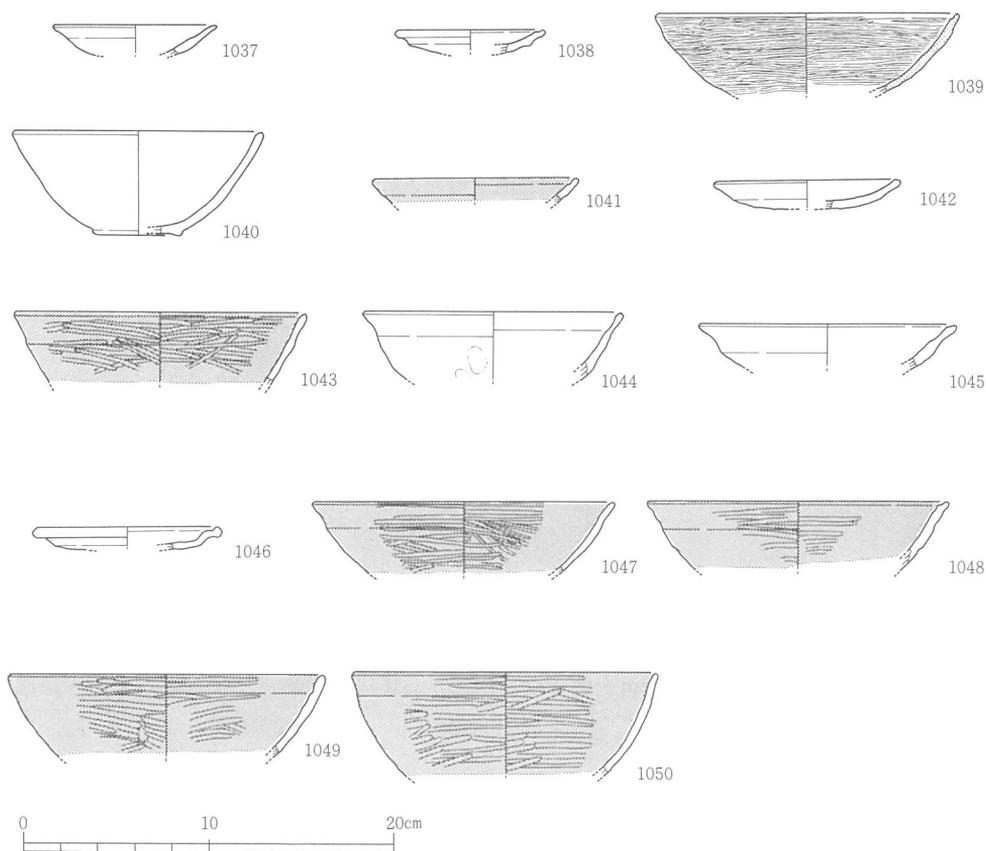
1036は底部のみの破片で、外面に貼付高台を付す。

4. ピット

第4地区では、20ヶ所を超えるピットが検出されたが、そのうち時期が比定できたものは5ヶ所であった。

42-O P

第4地区の南半部の、J 13 V Oで検出したピットである。円形状を呈し、径0.26m、深さ0.08mを測った。内部から土師器がごく少量出土した。



第183図 第4地区平安時代ピット出土遺物

42-O P 出土遺物 (第183図1037)

42-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1037は土師器の小皿で、口縁部のみ破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。

43-O P

第4地区の中央部西端の、J 13UNで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.33m、短径0.21m、深さ0.2mを測った。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

43-O P 出土遺物 (第183図1038, 1039)

43-O Pからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

1038は土師器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りが低く短く外反する。

1039は瓦器の椀である。口縁部のみ破片で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方への

びる。端部内面に沈線を1条巡らす。内・外面ともに密なヘラミガキを施す。

44-O P

第4地区の南半部西端の、J13WNで検出したピットである。円形状を呈し、径0.29m、深さ0.15mを測った。内部から土師器・黒色土器などがごく少量出土した。

44-O P 出土遺物 (第183図1040, 1041)

44-O Pからは土師器・黒色土器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

1040は土師器の椀である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。底部外面周縁に断面三角形の低い貼付高台を付す。

1041は黒色土器B類で、皿と思われる。口縁部のみの小片のため全体の形状などは不明である。

45-O P

第4地区の中央部西端の、J13SNで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.66m、短径0.50m、深さ0.12mを測った。内部から土師器・黒色土器などがごく少量出土した。

45-O P 出土遺物 (第183図1042, 1043)

45-O Pからは土師器・黒色土器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。

1042は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く内弯しつつ外上方へのびる。

1043は黒色土器B類の椀である。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。内・外面ともに密なヘラミガキを施す。

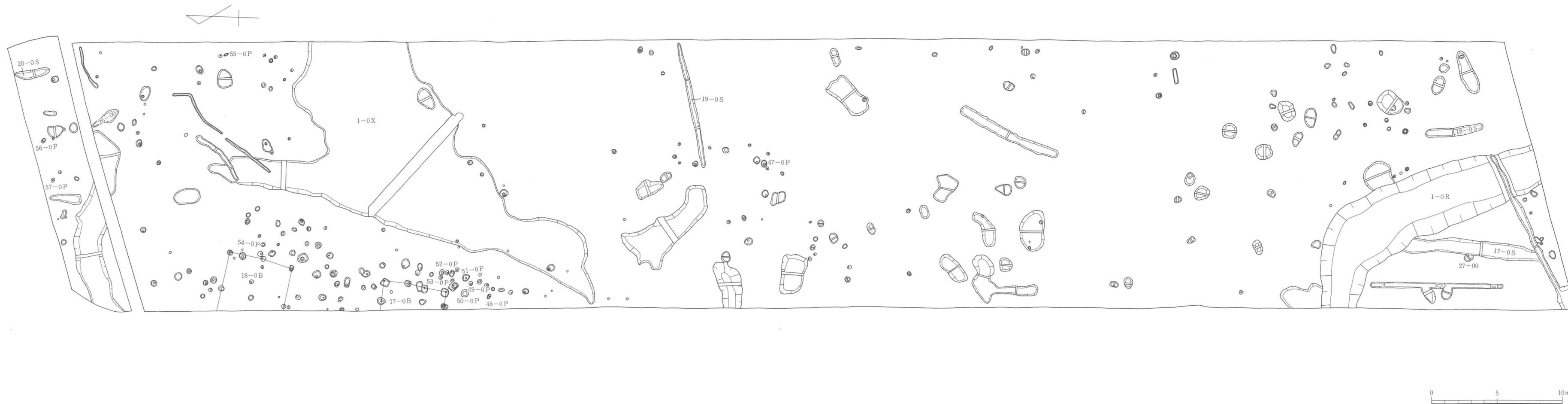
46-O P

第4地区の中央部西端の、J13SNで検出したピットである。円形状を呈し、径0.35m、深さ0.05mを測った。内部から土師器・黒色土器などが少量出土した。

46-O P 出土遺物 (第183図1044~1050)

46-O Pからは土師器・黒色土器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは7点である。

1044, 1045は土師器の椀である。ともに口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。



第184图 第5地区平面图

1046は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが一度内弯しつつ外上方へ低くのび、その後外反して外方へ開く。

1047～1050は黒色土器B類の椀である。すべて口縁部だけの破片である。そのうち1047～1049は口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびるもので、1050は口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。内・外面ともに密なヘラミガキ調整を施す。

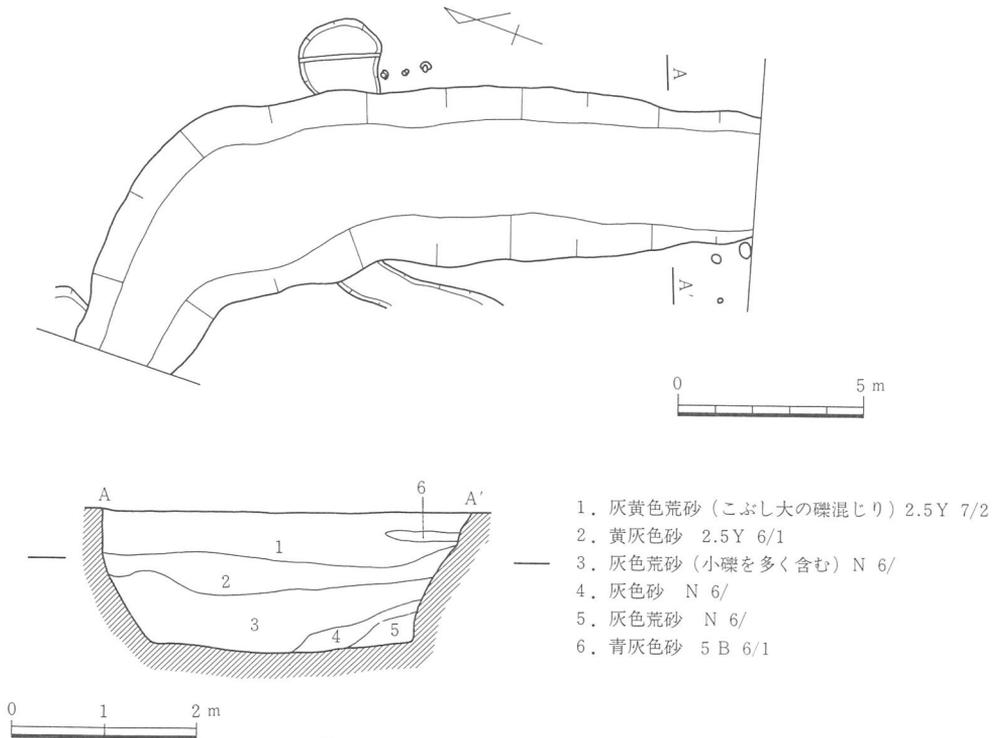
第6節 第5地区

第1項 古墳時代前期

古墳時代前期に比定される遺構としては自然河川がある。

1. 自然河川

第5地区では、古墳時代前期に比定される自然河川が1条検出された。この河川は第6地区から続いているもので、第5地区では遺物が出土せず、時期が不明であったが、第6



第185図 1-O R平面図・断面図

地区の調査の際に遺物が出土し、これらによって古墳時代前期のものと判明した。

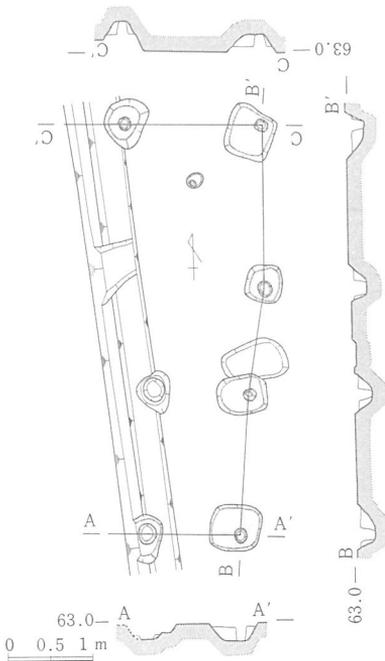
1-OR (第185図, 図版33, 34)

第5地区の南端部の, J 18Y O~Y Q・J 23A P・B P・A Q~D Q・B R~D Rにまたがる地区で検出した自然河川である。第6地区から続いて, 南端から北北西にまっすぐ約15m走り, その後西へ折れて調査区西壁外へのびる。検出長18mで, 幅約5m, 深さ1.6mを測った。埋土は大きく5層に分層できるが, 上層が2.5Y 7/2灰黄色ないしは2.5Y 6/1黄灰色系の砂, 下層はN6/灰色系の砂と, 埋土はすべて砂層で, 所々で礫を多量に含んでいる。これは, 1-ORが比較的短期間に埋没した事を物語るものである。内部から遺物は出土しなかった。

第2項 奈良時代

奈良時代に比定される遺構としては掘立柱建物・ピットなどがある。又, 北半部で検出された浅い窪みに堆積した埋土内からも同時期の遺物が出土している。

1. 掘立柱建物

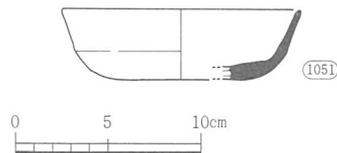


第186図 17-OB 平面図・断面図

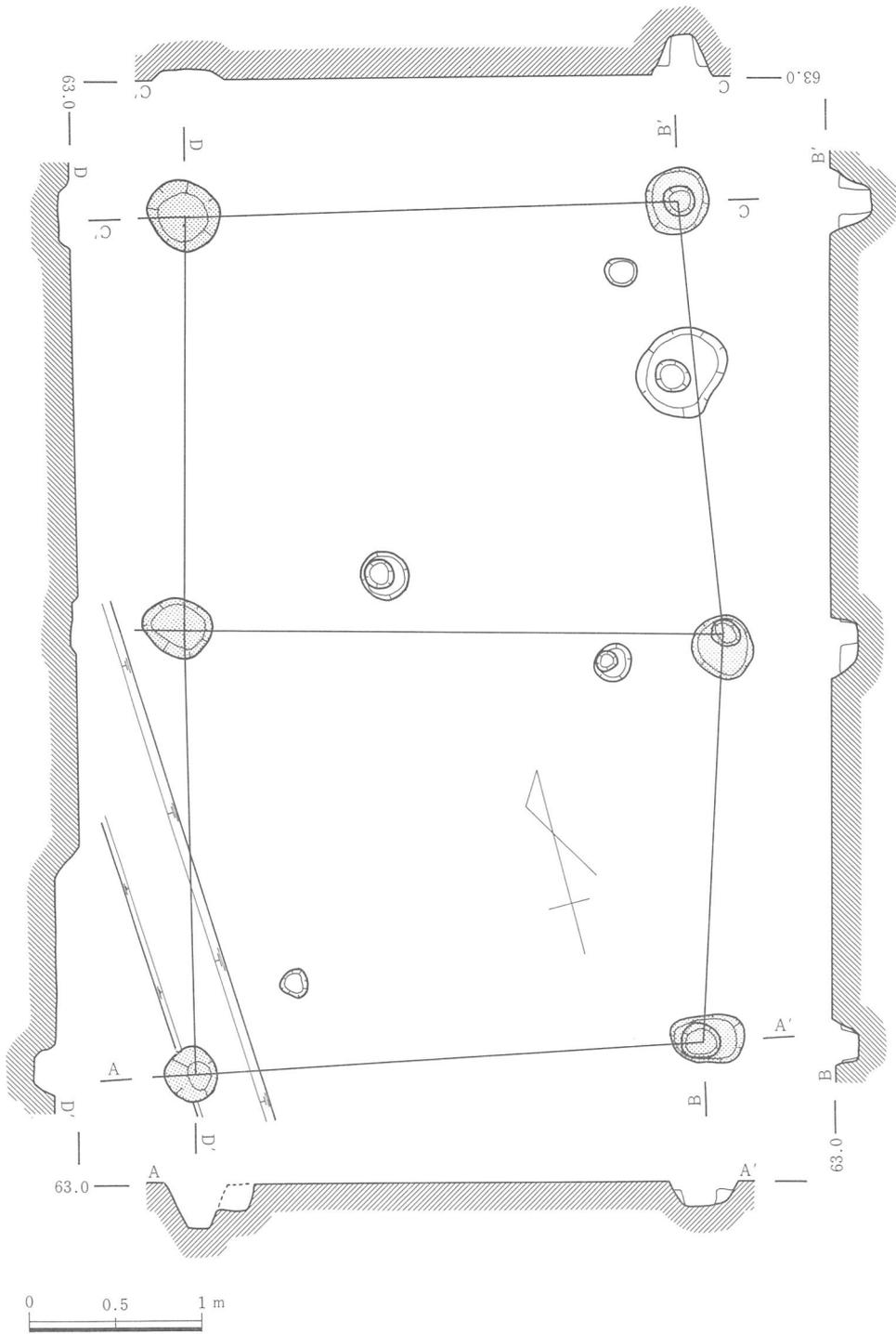
第5地区では, 奈良時代に比定される掘立柱建物が2棟検出された。

17-OB (第186図, 図版32)

第5地区の北半部西端の, J 18G N・H Nにまたがる地区で検出した3間×1間以上の掘立柱建物である。建物の大部分は調査区西壁外にある。主軸はN-7°-Eを示す。棟持柱列のうちその規模を把握し得たのは東側の列のみである。3間の規模で, 実数値は4.9mを測った。柱穴は一辺0.5m内外の四角形状を呈し, 深さ0.2m~0.4m



第187図 17-OB 出土遺物



第188图 18-O B平面图·断面图

を測った。柱穴内から須恵器・土師器などがごく少量出土した。

17-O B 出土遺物 (第187図1051)

掘立柱建物17-O Bを構成する柱穴内からは須恵器・土師器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1051は須恵器の杯である。平らな底部で、口縁の立ち上りが最初内弯しつつ外上方へのび、その後直立気味に上方へ立ち上る。

18-O B (第188図, 図版33)

第5地区の北半部西端の、J 18DN・EN・DO・EOにまたがる地区で検出した2間×1間以上の掘立柱建物である。主軸はN-7°-Eを示す。棟持柱列のうち、その規模を把握し得たのは東側の列のみである。2間の規模で、実数値は4.9mを測った。18-O Bは、棟持柱の他に東柱を1ヶ所持つ総柱の形態を呈しており、倉庫と思われる。柱穴は径0.3m~0.4mの円形状を呈し、深さ0.2mを測った。柱穴内から須恵器・土師器などがごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2. ピット

第5地区では、奈良時代に比定されるピットを11ヶ所検出した。

47-O P (第189図)

第5地区の中央部の、J 18NQで検出したピットである。円形状を呈し、径0.52m、深さ0.16mを測った。柱痕は径0.2mの円形である。内部から須恵器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

48-O P (第189図)

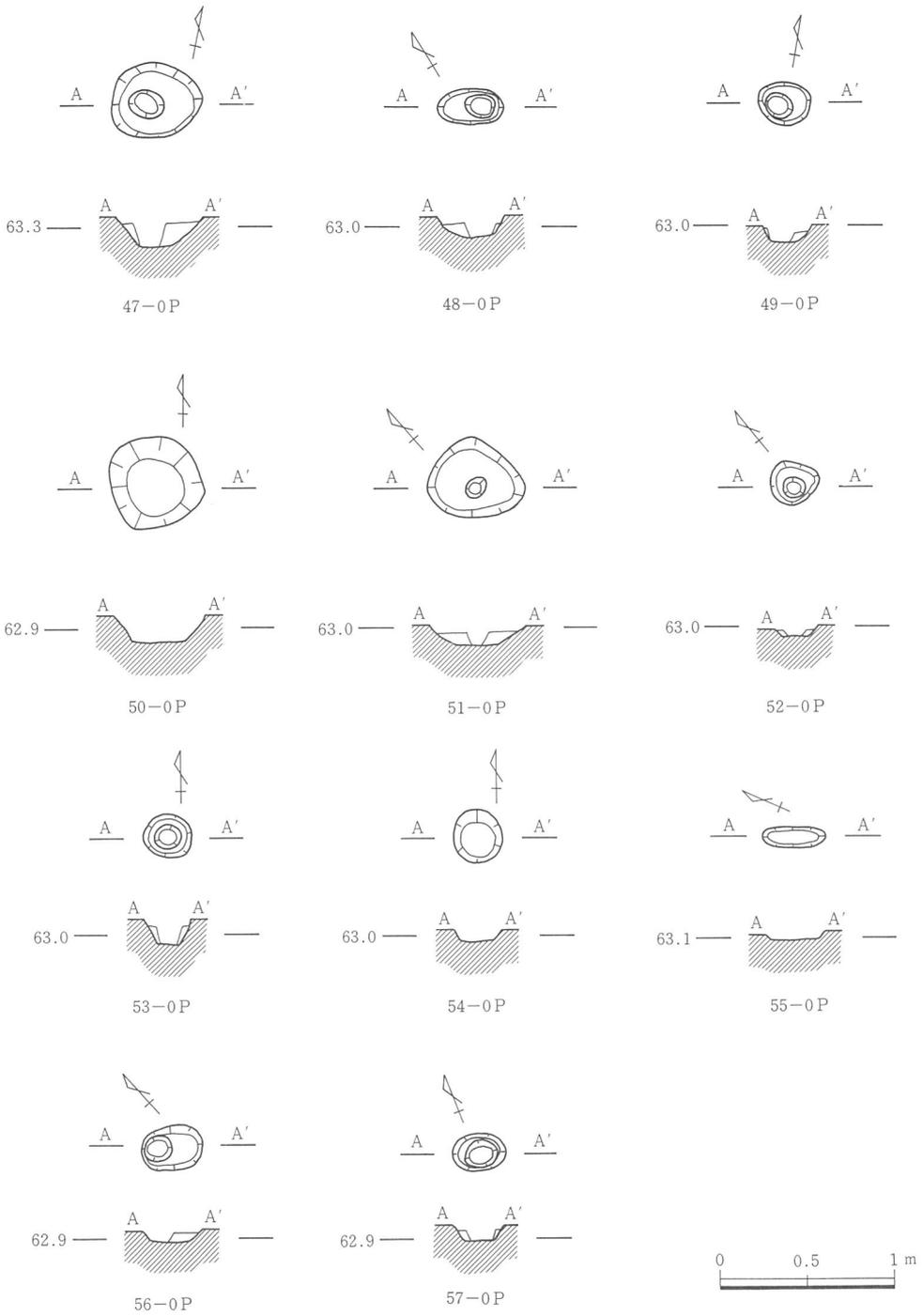
第5地区の北半部西端の、J 18INで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.38m、短径0.2m、深さ0.12mを測った。柱痕は径0.16mの円形である。内部から須恵器、土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

49-O P (第189図)

第5地区の北半部西端の、J 18HOで検出したピットである。円形状を呈し、径0.29m、深さ0.1mを測った。柱痕は径0.1mの円形である。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

50-O P (第189図)

第5地区の北半部西端の、J 18HNで検出したピットである。円形状を呈し、径0.53m、深さ0.16mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から須恵器・土師器がごく少量出土



第189図 第5地区奈良時代ピット平面図・断面図

したが、図示し得るものはなかった。

51-O P (第189図)

第5地区の北半部西端の、J 18HOで検出したピットである。不整円形状を呈し、径0.56m、深さ0.12mを測った。柱痕は径0.08mの円形である。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

52-O P (第189図)

第5地区の北半部西端の、J 18HOで検出したピットである。不整円形状を呈し、径0.27m、深さ0.07mを測った。柱痕は径0.1mの円形である。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

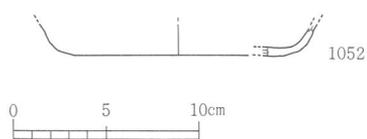
53-OP (第189図)

第5地区の北半部西端の、J 18HOで検出したピットである。円形状を呈し、径0.28m、深さ0.15mを測った。柱痕は径0.1mの円形である。内部から土師器がごく少量出土した。

53-O P 出土遺物 (第190図1052)

53-O Pからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1052は土師器で、皿の破片と思われる。平らな底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのびる。端部付近を欠損している。



第190図 53-O P 出土遺物

54-O P (第189図)

第5地区の北半部西端の、J 18DOで検出したピットである。円形状を呈し、径0.28m、深さ0.07mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

55-O P (第189図)

第5地区の北半部東端の、J 18DSで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径0.36m、短径0.11m、深さ0.05mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から須恵器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

56-O P (第189図)

第5地区の北端部の、J 13YQで検出したピットである。円形状を呈し、径0.36m、深さ0.07mを測った。柱痕は径0.12mの円形である。内部から土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

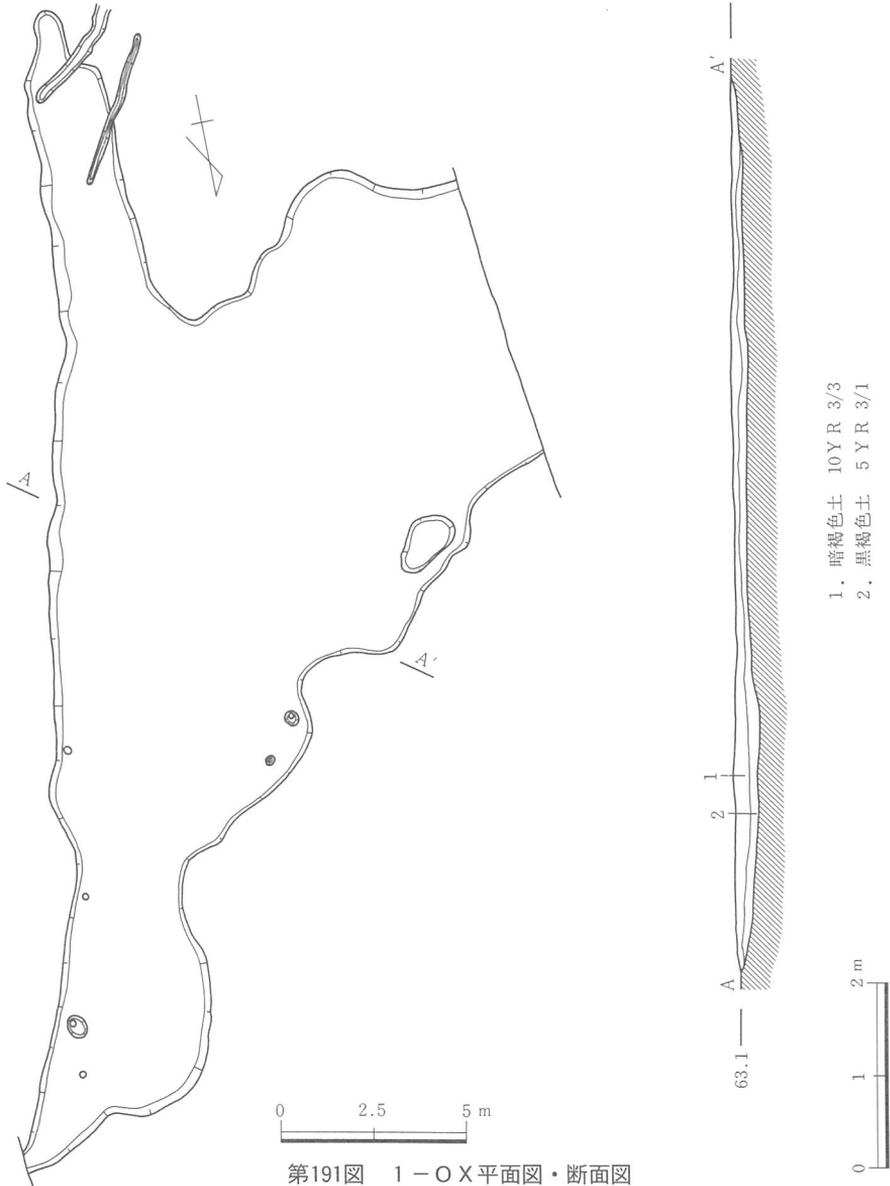
57-O P (第189図)

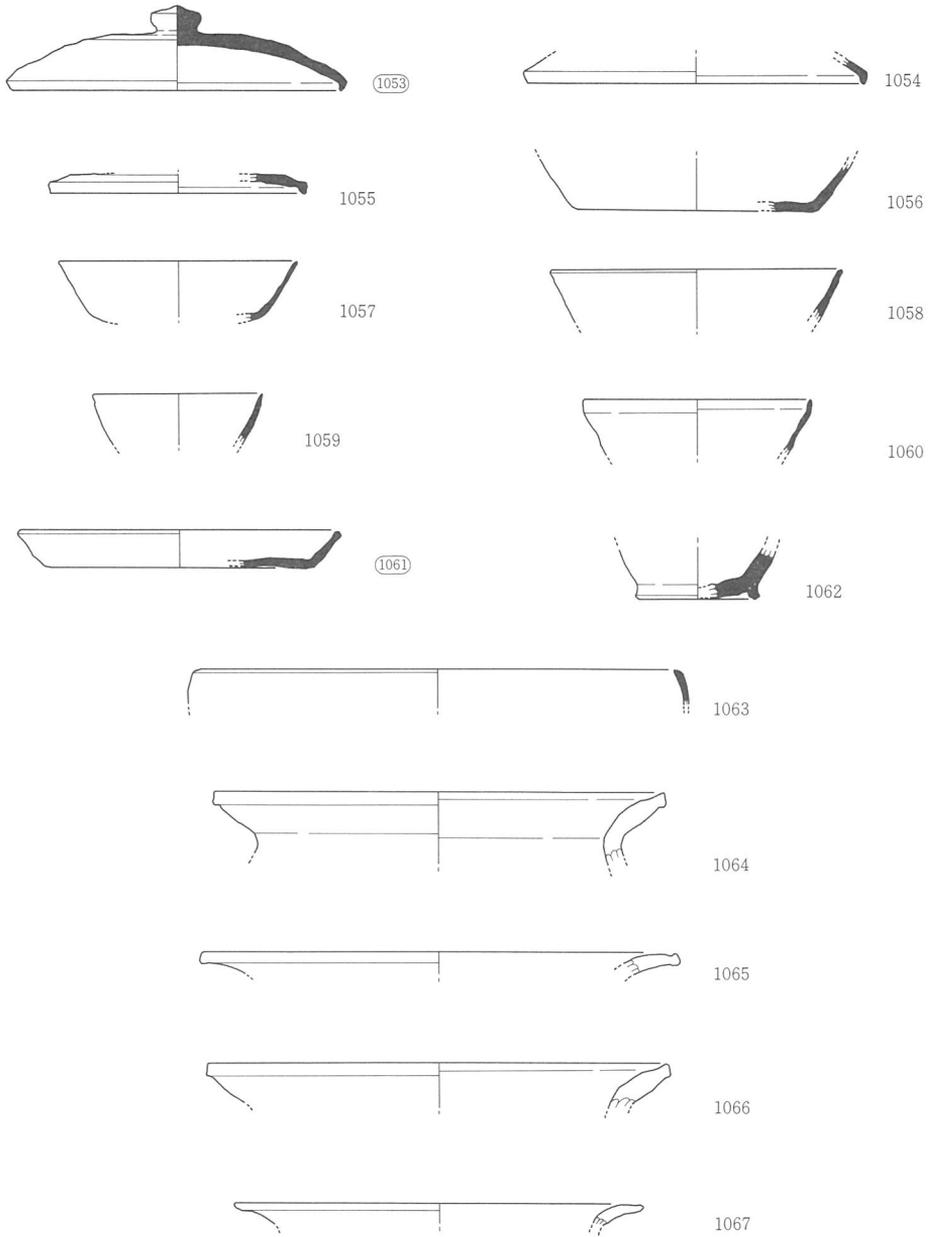
第5地区の北端部の、J13YPで検出したピットである。円形状を呈し、径0.29m、深さ0.1mを測った。柱痕は径0.12mの円形である。内部から須恵器・土師器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

3. 落ち込み

第5地区では、奈良時代に比定される浅い谷状の落ち込みが1ヶ所検出された。

1-OX (第191図, 図版34)





第192図 1-O X 出土遺物

第1地区の北半部の、J18JN・KN・GO～KO・CP～JP・CQ～IQ・ER～HR・ES～QSにまたがる地区で検出した落ち込みである。北東から南西方向に長い不定形状を呈し、長径27m、短径8m、深さ0.3mを測った。埋土は2層に分層でき、上より10YR3/3暗褐色土、5YR3/1黒褐色土となっている。内部から須恵器・土師器などが比較的まとまった量出土した。

1-OX出土遺物（第192図1053～1067）

1-OXからは須恵器・土師器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは15点である。

1053～1055は須恵器の杯蓋である。そのうち1053～1054は頂部が丸く笠形を呈し、縁部は屈曲せず彎曲気味に端部に至るもので、頂部中央付近に擬宝珠つまみを付している（1053）。

1055は口縁部のみの破片であるが、平らな頂部と、屈曲する縁部からなるものと思われる。

1056～1060は須恵器の杯である。そのうち1056、1057は平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。底部外面に貼付高台はみられない。

1058～1060は口縁部のみの破片である。いずれも口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。貼付高台の有無は不明である。

1061は須恵器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方にまっすぐのびる。

1062は須恵器の壺と思われる。底部付近のみの破片であり、全体の形状などは不明である。底部外面周縁に貼付高台を付す。

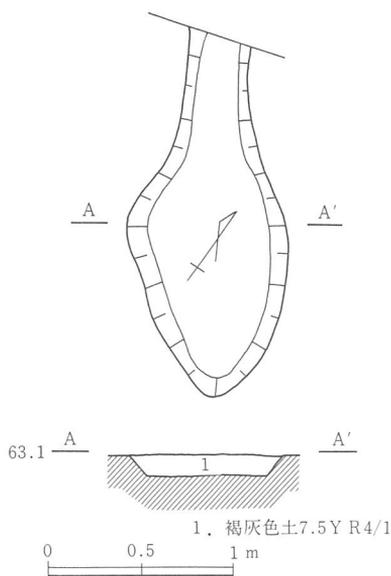
1063は須恵器で、鉢の破片と思われる。口縁部のみの破片で、口縁の立ち上りがやや内傾する。端部上端を内側に軽くつまみ出している。

1064～1067は土師器の甕である。いずれも口縁部のみの破片で、全体の形状などは不明である。

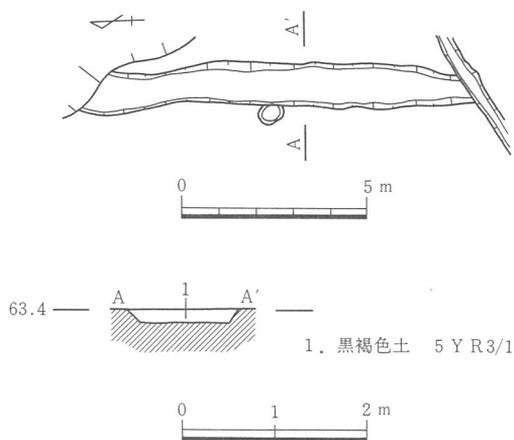
第3項 平安時代

平安時代に比定される遺構としては土坑・溝などがある。

1. 土坑



第193図 26-〇〇平面図・断面図



第194図 17-〇S平面図・断面図

第5地区では、平安時代に比定される土坑が1基検出された。

26-〇〇（第193図）

第5地区の北半部の、J18AQ・ARにまたがる地区で検出した土坑である。不定形状を呈し、長径2m、短径0.85m、深さ0.11mを測った。埋土は1層で、7.5Y R4/1褐灰色土である。内部から土師器・黒色土器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2. 溝

第5地区では、平安時代に比定される溝が1条検出された。

17-〇S（第194図）

第5地区の南西端部の、J23AP～DPにまたがる地区で検出した溝である。南北方向に走る。検出長は10mで、幅約1.2m、深さ0.15mを測った。埋土は1層で、5Y R3/1黒褐色土である。内部から土師器・黒色土器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。

第4項 鎌倉時代

鎌倉時代に比定される遺構としては土坑・溝などがある。

1. 土坑

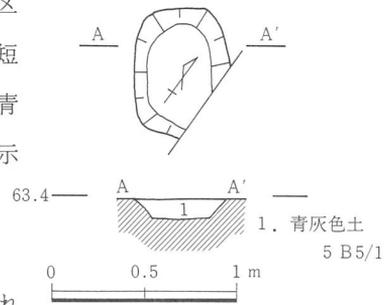
第5地区では、鎌倉時代に比定される土坑が1基検出された。

27-00 (第195図)

第5地区の南西端部の、J 23B P・C Pにまたがる地区で検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径1.4m、短径0.5m、深さ0.11mを測った。埋土は1層で、5 B 5/1青灰色土である。内部から瓦器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2. 溝

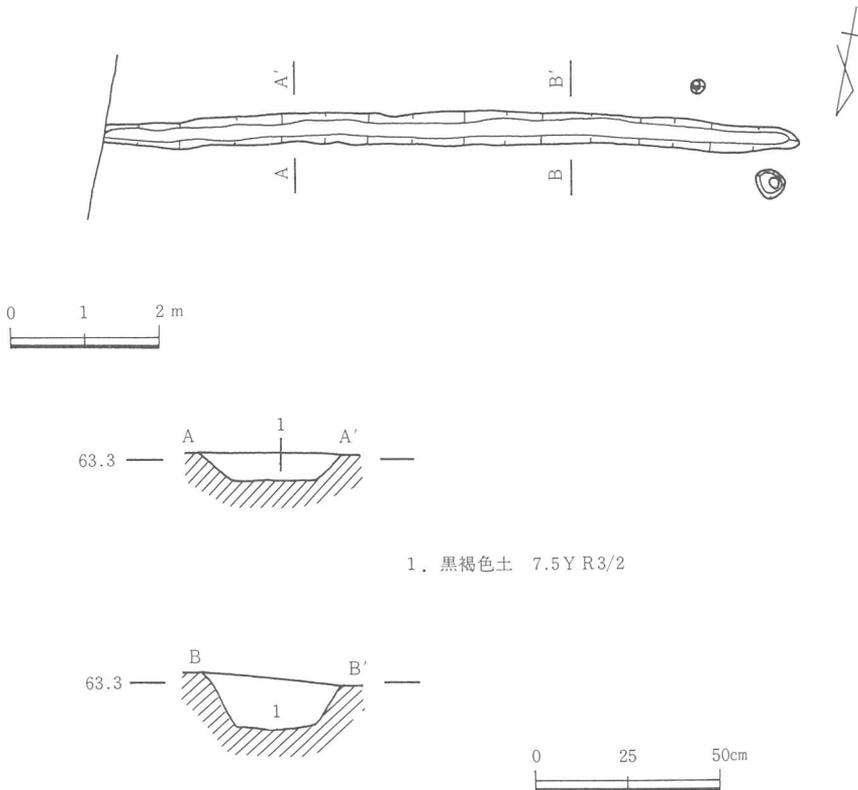
第5地区では、鎌倉時代に比定される溝が3条検出された。



第195図 27-00平面図・断面図

18-0S

第5地区の南東端部の、J 23B R・C Rにまたがる地区で検出した溝である。南北方向に走る。検出長4.5mで、幅0.6m、深さ0.1mを測った。埋土は1層で、7.5Y R3/2黒褐色土



第196図 19-0S平面図・断面図

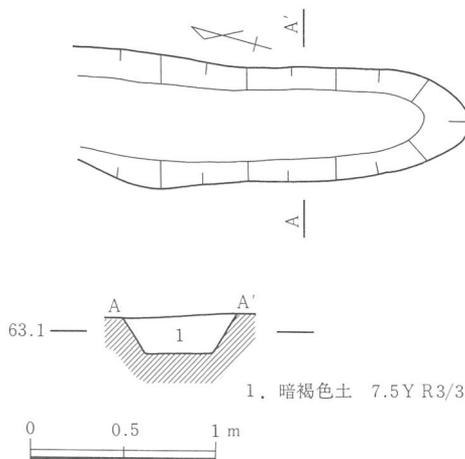
色土である。内部から瓦器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

19-O S (第196図)

第5地区の中央部の、J 18MQ・MR・LR・LSにまたがる地区で検出した溝である。東西方向に走り、西端は途切れるが、東側は調査区東壁外へのびている。検出長は9.5mで、幅0.4m、深さ0.11mを測った。埋土は1層で、7.5Y R3/2黒褐色土である。内部から瓦器が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

20-O S (第197図)

第5地区の北東端部の、J 13Y Rで検出した溝である。南北方向に走り、南端は途切れているが、北側は調査区外へのびている。検出長2mで、幅0.6m、深さ0.21mを測った。埋土は1層で、7.5Y R3/3暗褐色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第197図 20-O S平面図・断面図

第7節 第6地区

第1項 古墳時代前期

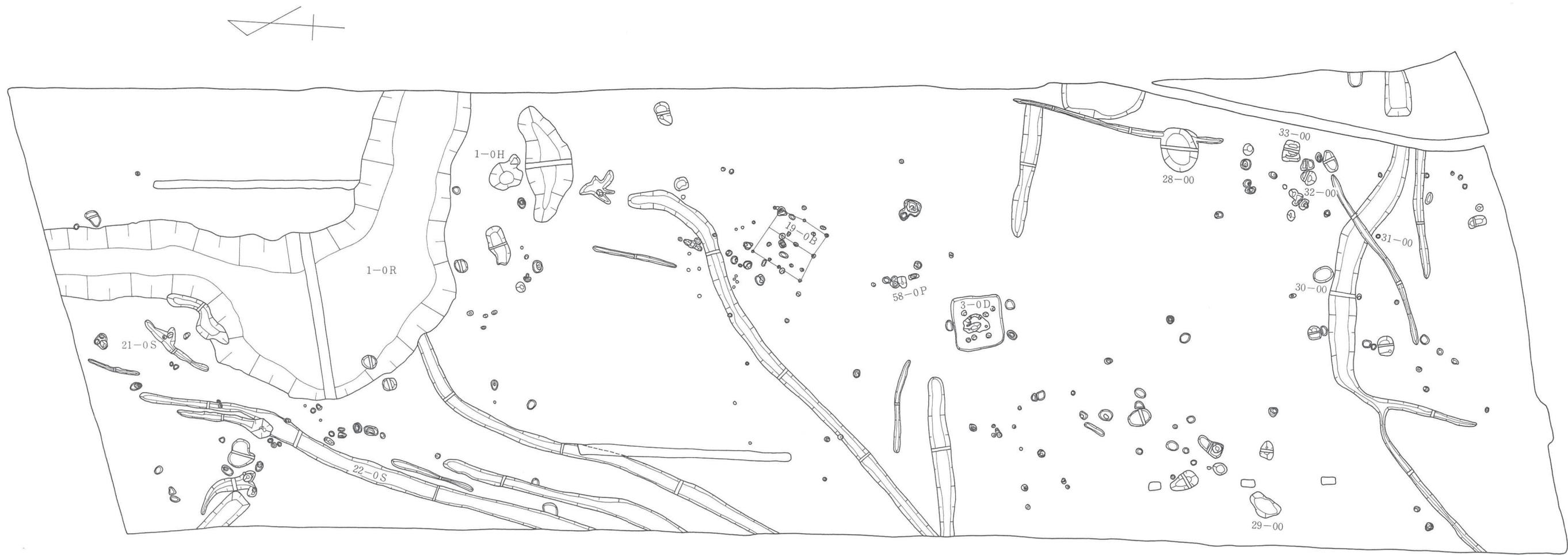
古墳時代前期に比定される遺構としては竪穴住居・掘立柱建物・炉穴・土坑・ピット・自然河川などがある。

1. 竪穴住居

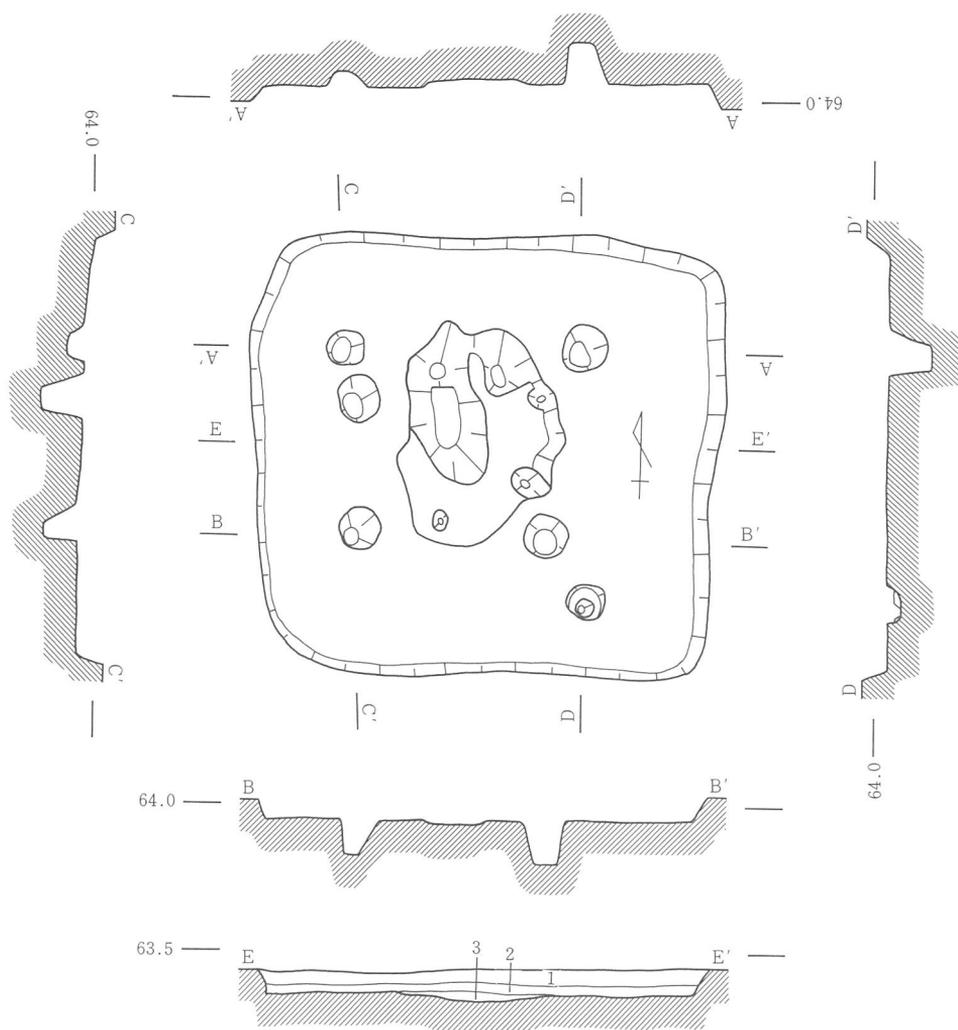
第6地区では、古墳時代前期に比定される竪穴住居が1棟検出された。

3-O D (第199図, 図版36, 37)

第6地区の中央部の、J 23O R・PRにまたがる地区で検出した竪穴住居である。ほぼ正形状の平面プランを呈し、方位はN-Sを示す。南北2.52m、東西2.61mの規模で、検出面はほぼ水平である。4ヶ所支柱穴がみられる。柱穴は径0.2m内外の円形状を呈し、深さ0.1m～0.2mを測った。平面プランのほぼ中央で長径1.1m、短径0.8m、深さ0.05m



第198图 第6地区平面图



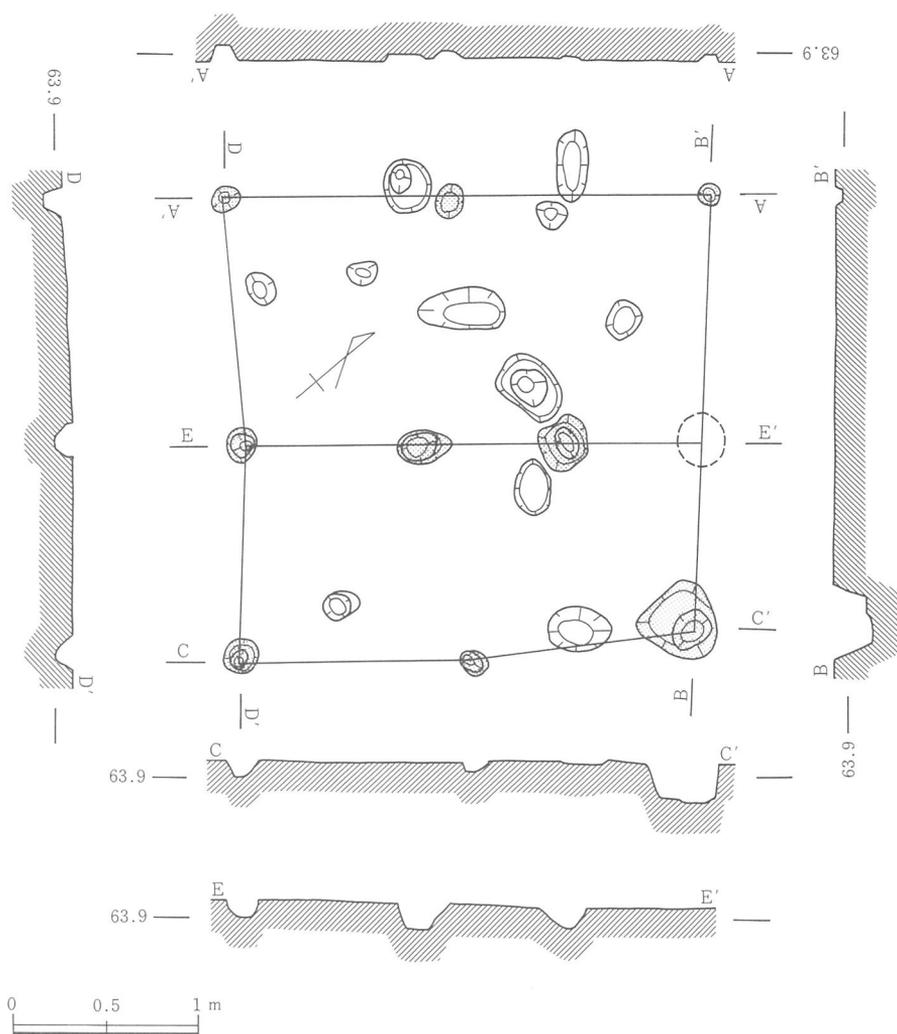
- 1. 暗青灰色土（やや砂混じり） 5 B4/1
- 2. 暗青灰色粘質土 5 B4/1
- 3. 暗灰黄色粘質土 2.5 Y4/2

第199図 3-O D平面図・断面図

の土坑を検出した。土坑内の埋土は2.5 Y4/2暗灰黄色粘質土で、炭・焼土などは含まれておらず、この土坑を炉とする決め手はない。平面プラン内の埋土は2層に分層でき、上より5 B4/1暗青灰色土（やや砂混じり）、5 B4/1暗青灰色粘質土となっている。内部から古式土師器の破片が少量出土したが、図示し得るものはなかった。

2. 掘立柱建物

第6地区では、古墳時代前期に比定される掘立柱建物が1棟検出された。



第200図 19-OB平面図・断面図

19-OB (第200図)

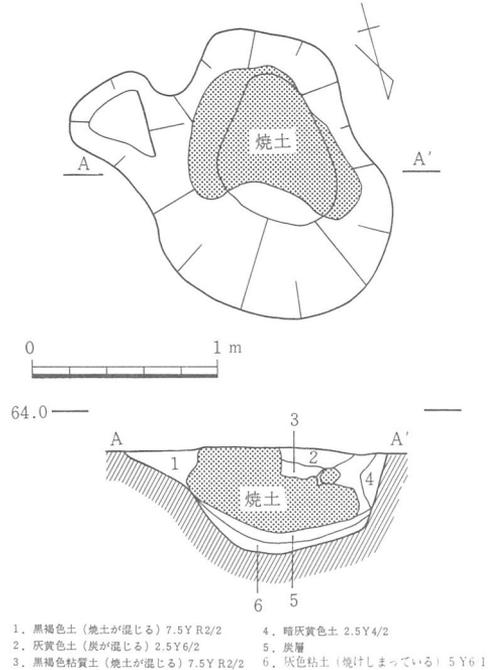
第6地区の中央部やや北寄りの、J23MR・MS・NR・NSにまたがる地区で検出した2間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-40°-Eを示す。桁行間2間×梁間2間で、実数値は西桁行間2.62m、東桁行間2.38m、北梁間2.38m、南梁間2.7mを測った。棟持柱のうち北梁部の中間の柱穴は確認できなかった。この建物は棟持柱の他に、平面プランの中央付近に2ヶ所の東柱を持つ、いわゆる総柱の掘立柱建物で倉庫と思われる。柱穴は径0.12m~0.4mの円形ないしは楕円形で、深さ0.1m~0.3mを測った。内部から古式土師器の破片がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

3. 炉穴

第6地区では、古墳時代前期に比定される炉穴と思われる土坑が1基検出された。

1-OH (第201図, 図版37)

第6地区の北半部東端の、J23JSで検出した。不整楕円形状を呈する土坑で、長径1.5m、短径1.2m、深さ0.6mを測った。床面にはかたく焼けしまった5Y6/1灰色粘土と炭の薄い層があり、その上に焼土のかたまりが広い範囲にみられる。埋土は上より7.5YR2/2黒褐色土、2.5Y6/2灰黄色土、7.5YR2/2黒褐色粘質土、2.5Y4/2暗灰黄色土で、どの層にも焼土ないしは炭が混入している。



第201図 1-OH平面図・断面図

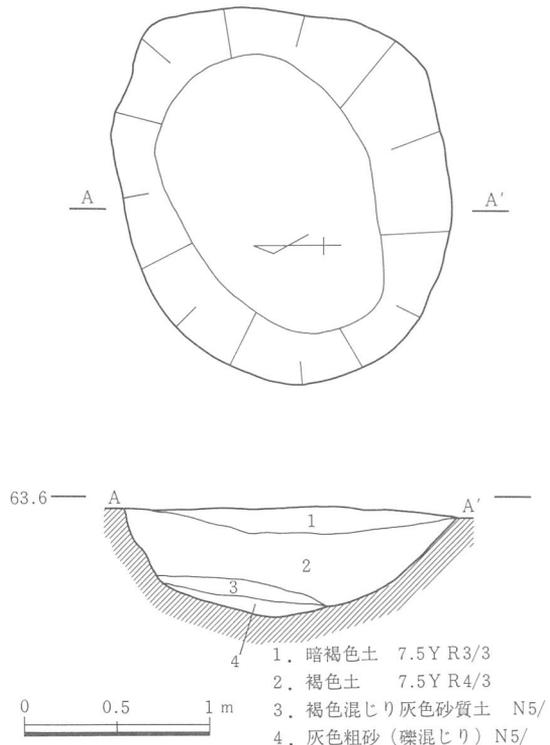
同時期の竪穴住居3-ODには室内に明確な炉が検出されておらず、3-ODの近辺で検出された1-OHは、いわゆる室外炉として使用されていたと考えられる。内部から古式土師器の破片がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

4. 土坑

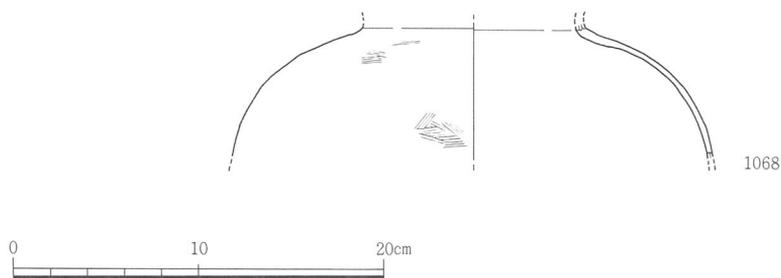
第6地区では、古墳時代前期に比定される土坑が4基検出された。

28-OO (第202図, 図版38)

第6地区の南半部東端の、J23RTで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径2m、短径1.8m、深さ0.53mを測った。埋土は4層に分層でき、上より7.5Y R3/3暗褐色土、



第202図 28-OO平面図・断面図



第203図 28-〇〇出土遺物

7.5Y R4/3褐色土，N5/褐色混じり灰色砂質土，N5/灰色粗砂（礫混じり）となっている。内部から古式土師器が少量出土した。

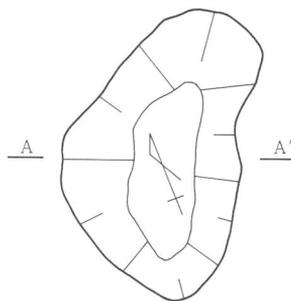
28-〇〇出土遺物（第203図1068）

28-〇〇からは古式土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1068は古式土師器の甕で，体部上半のみの破片である。口縁部は欠損しているが，端部が内厚して稜をなす口縁部が付くものと思われる。体部は胴張りで，縦長の楕円形状を呈するものと思われ，体部外面は細かいハケ目調整，内面はヘラケズリを施す。いわゆる布留式土器に属するものと思われる。

29-〇〇（第204図，図版39，40）

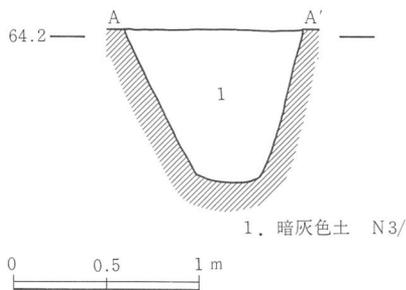
第6地区の南半部西端の，J 23 S Pで検出した土坑である。不整楕円形状を呈し，長径1.52m，短径0.96m，深さ0.82mを測った。埋土は1層で，N3/暗灰色土である。内部から古式土師器・鉄器などが比較的まとまった量出土した（第205図）。



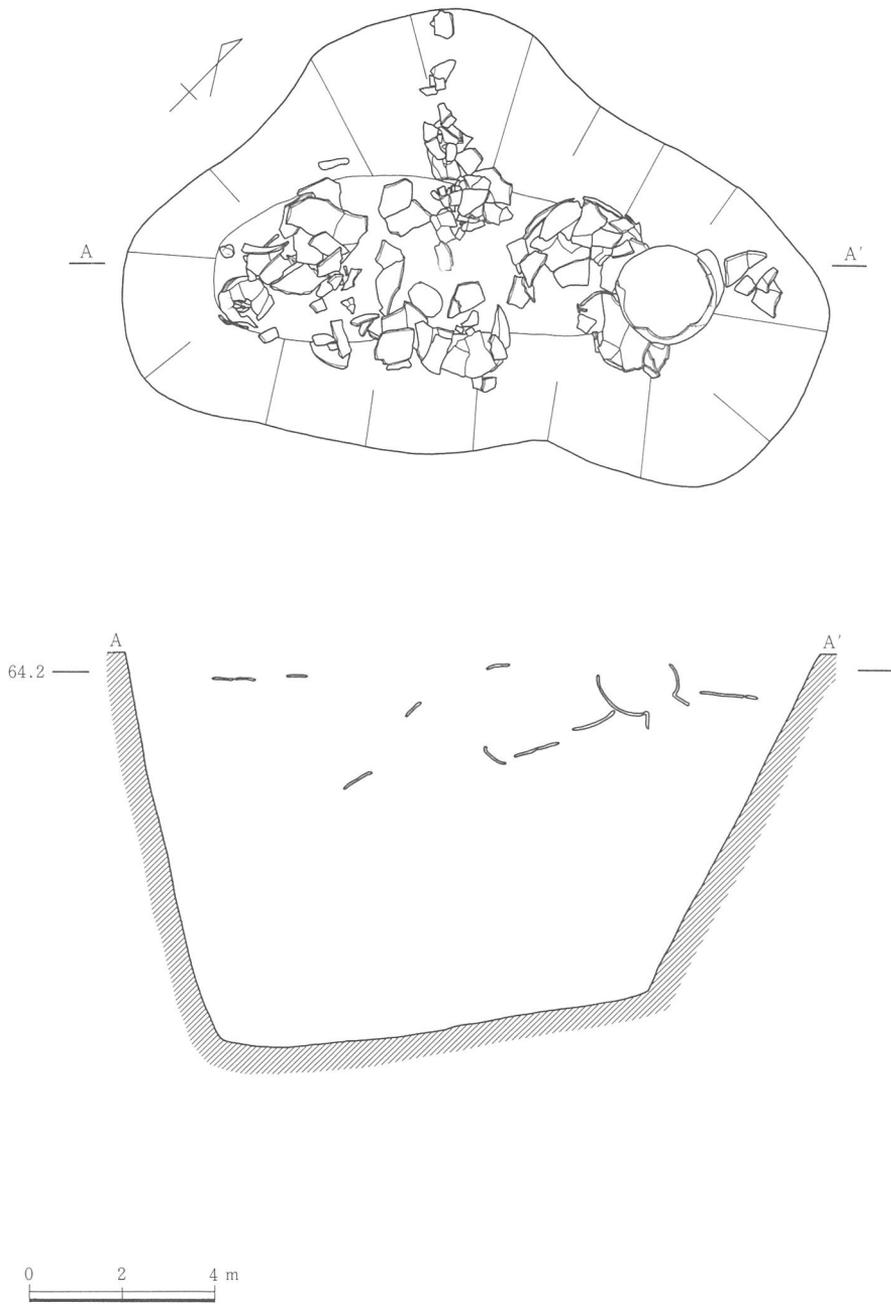
29-〇〇出土遺物（第206図1069～第209図1079）

29-〇〇からは古式土師器・鉄器などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは11点である。

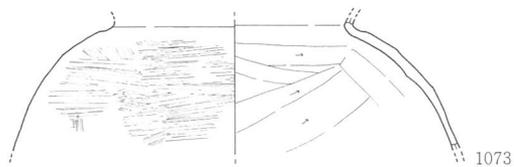
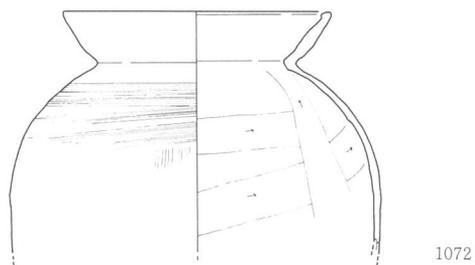
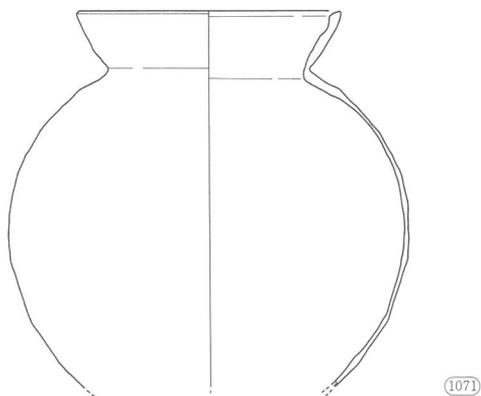
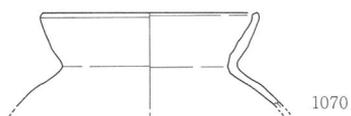
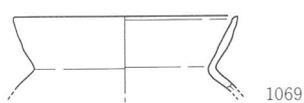
1069～1073は古式土師器の甕である。口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方にのびる。端部は丸く収めるもの（1069，1070）



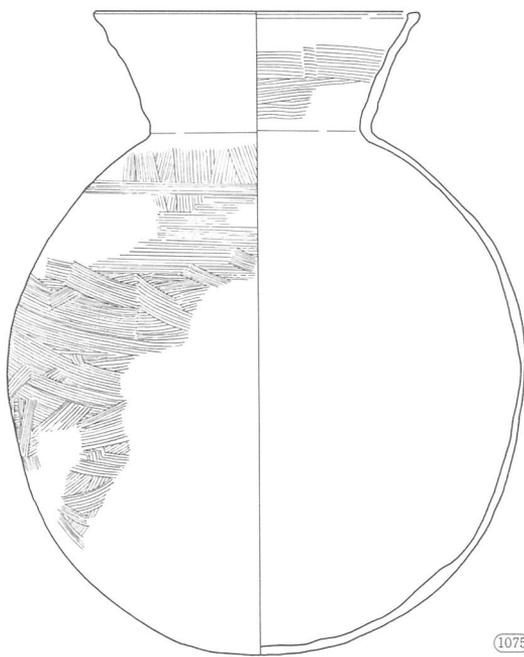
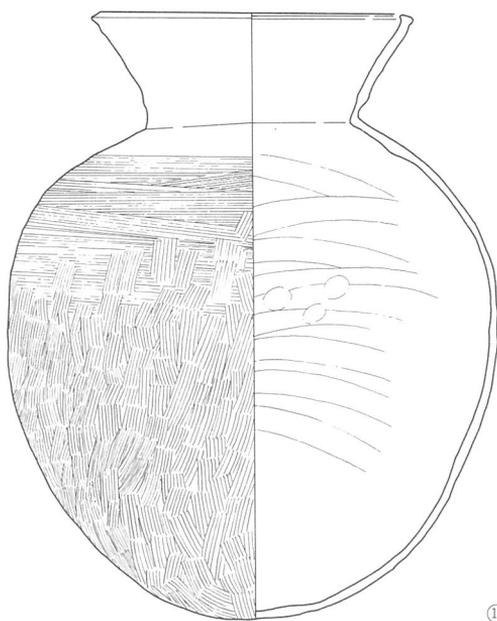
第204図 29-〇〇平面図・断面図



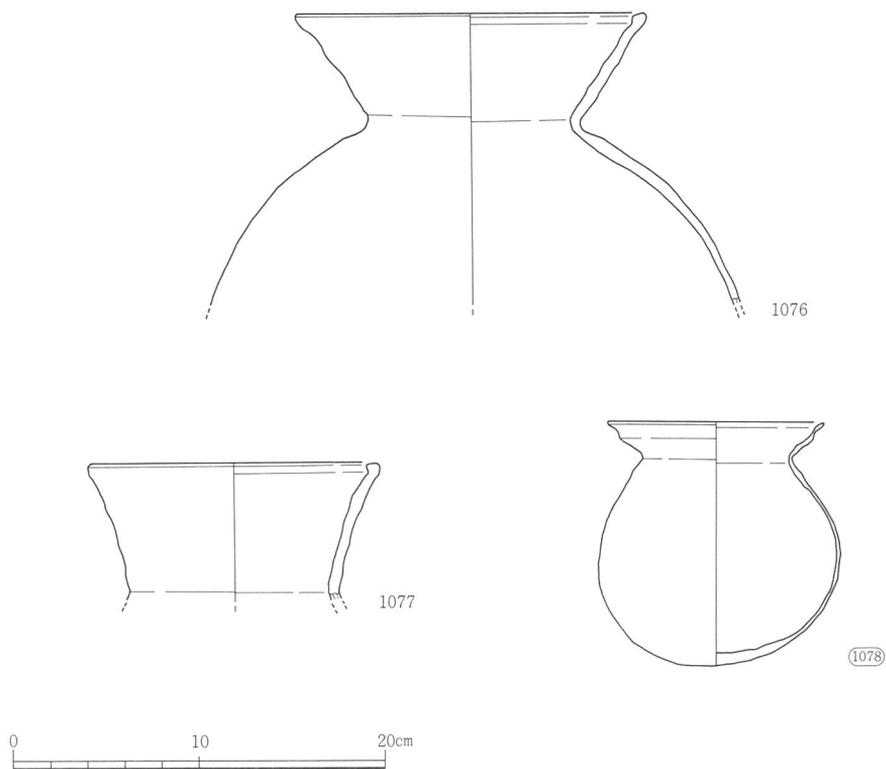
第205図 29-00遺物出土状況



第206図 29-〇〇出土遺物(1)



第207図 29-〇〇出土遺物(2)



第208図 29-〇〇出土遺物(3)

と内厚して稜をなすもの(1071, 1072)がある。体部は胴張りで、縦長の楕円形状を呈する。体部外面をハケ目調整、内面はヘラケズリ調整を施す。

1074~1078は古式土師器の壺である。そのうち1074~1077は口縁の立ち上りが高く、まっすぐ外上方にのびるもので、端部が内厚して稜をなす。体部は縦長の楕円形状を呈する。体部外面をていねいなハケ目調整、内面はヘラケズリ調整を施す。口縁部内面にハケ目を施すもの(1075)もある。

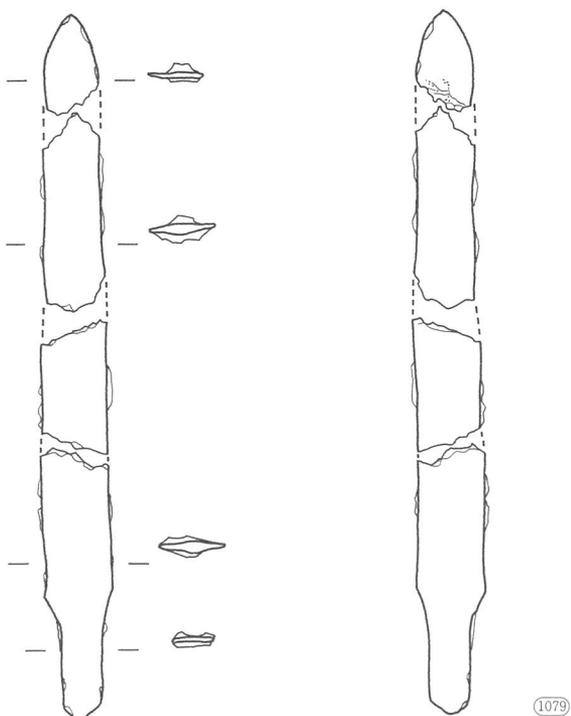
1078は小型の壺である。口縁部はいわゆる二重口縁で、二段目は短く外反して終る。体部下半は丸みを持つが、上半はまっすぐ内傾する。

これらの古式土師器は布留式土器に属するものと思われる。

1079は鉄器で、刀子である。4つの個体に分離しており、刃先は所々欠けている。全長は復元で19cm、幅1.8cmを測った。

30-〇〇(図版41)

第6地区の南半部の、J23TSで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径0.9m、



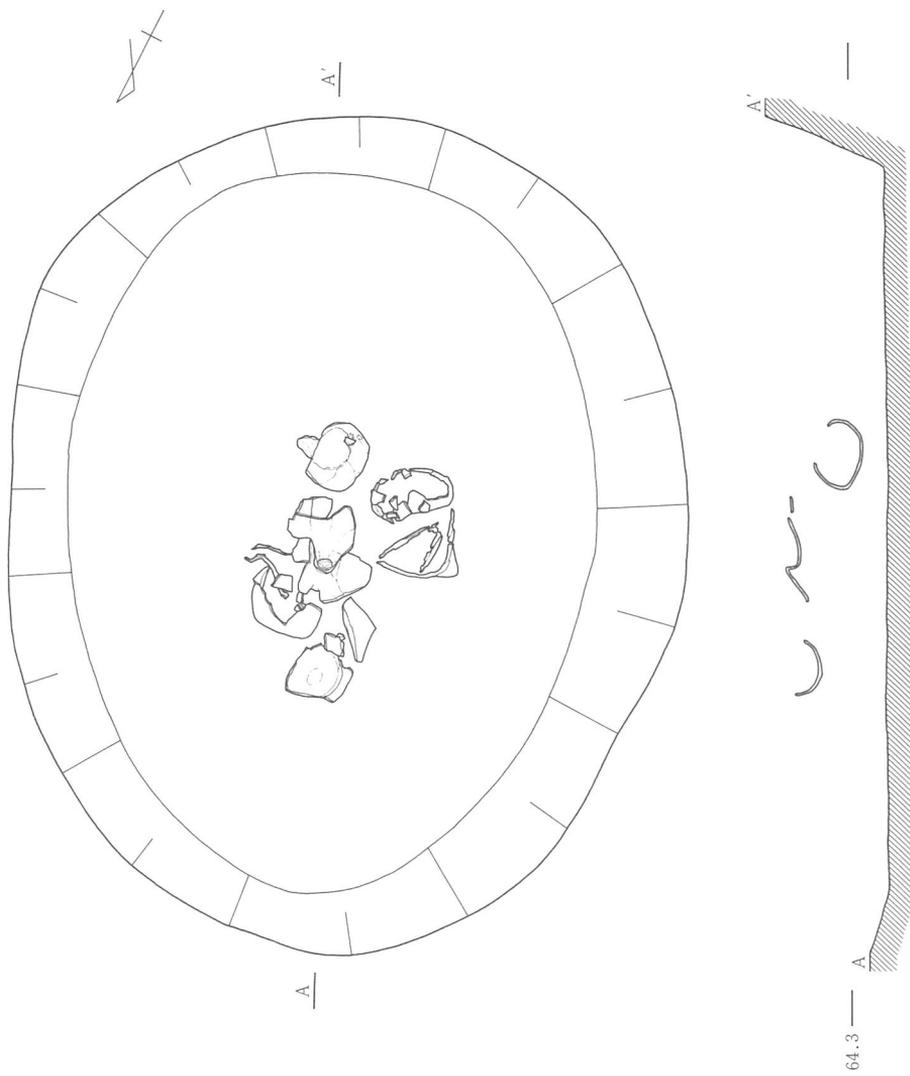
第209図 29-〇〇出土遺物(4)

短径0.75m，深さ0.1mを測った。埋土は1層で，7.5Y R3/3暗褐色土である。内部から古式土師器が比較的まとまった量出土した(第210図)。これらの出土遺物は小型丸底壺と小型器台に限られており，しかも，小型丸底壺はすべて口縁部が欠損していた。

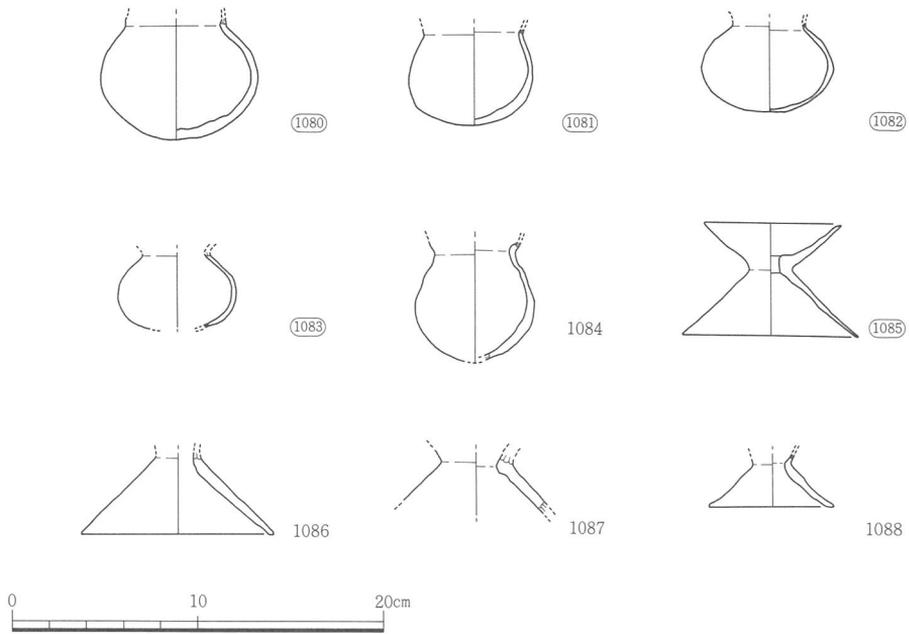
30-〇〇出土遺物(第211図1080~1088)

30-〇〇からは古式土師器が比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは9点である。

1080~1084は小型丸底壺である。すべて口縁部を欠損しているが，比較的短い口縁部と



第210図 30-O遺物出土状況



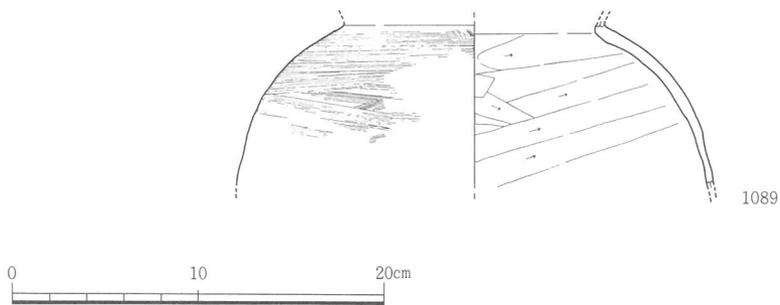
第211図 30-〇〇出土遺物

思われる。体部は扁球形状を呈する。

1085～1088は小型器台である。全体の形状が明確なのは1085のみであり、その他は脚部のみの破片である。

1085は受部がわずかに内湾しつつ外上方へ立ち上り、脚部は直線的に外下方へ開く。

1086～1088は直線的に外下方に開く脚部である。すべて受部と脚部が貫通する、いわゆる中空器台で、1080～1084の小型丸底壺とセット関係にあるものといえる。



第212図 31-〇〇出土遺物

31-00

第6地区の南半部東端の、J23TSで検出した土坑である。円形状を呈し、径0.3m、深さ0.25mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から古式土師器がごく少量出土した。

31-00出土遺物（第212図1089）

31-00からはごく少量の古式土師器が出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

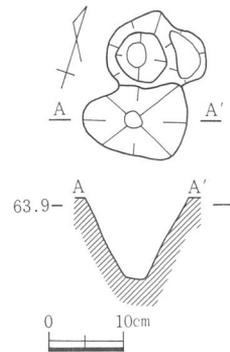
1089は古式土師器の甕で、体部上半のみの破片である。縦長の楕円形状を呈する体部で、外面を細いハケ目調整し、内面はヘラケズリ調整を施す。

5. ピット

第6地区では、50ヶ所を越すピットが検出されたが、そのほとんどは遺物が伴わず、時期不明のものであった。その中で、古墳時代前期に比定されるピットが1ヶ所検出された。

58-0P（第213図、図版42）

第6地区の中央部やや北寄りの、J23ORで検出したピットである。不整円形状を呈し、径0.55m、深さ0.44mを測った。埋土は1層で、2.5Y3/1黒褐色土である。内部には古式土師器の甕が1個体と、小型丸底壺が1個体納められていた（第214図、図版42）。



第213図 58-0P平面図・断面図

58-0P出土遺物（第215図1090、1091）

58-0Pからは、古式土師器が2個体出土した。

1090は古式土師器の甕である。底部を欠損している。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのび、端部は丸く収めている。体部は縦長の楕円形状を呈する。

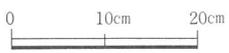
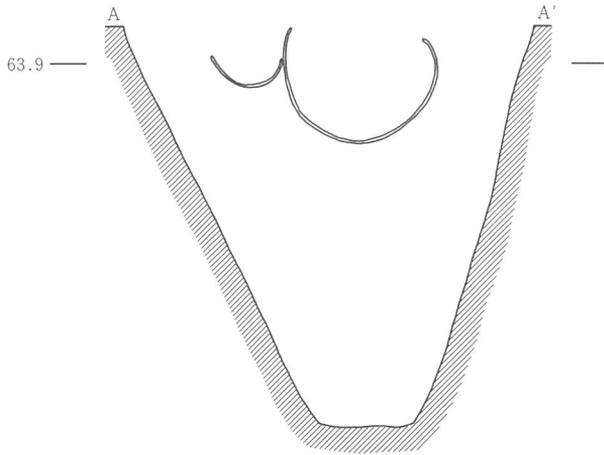
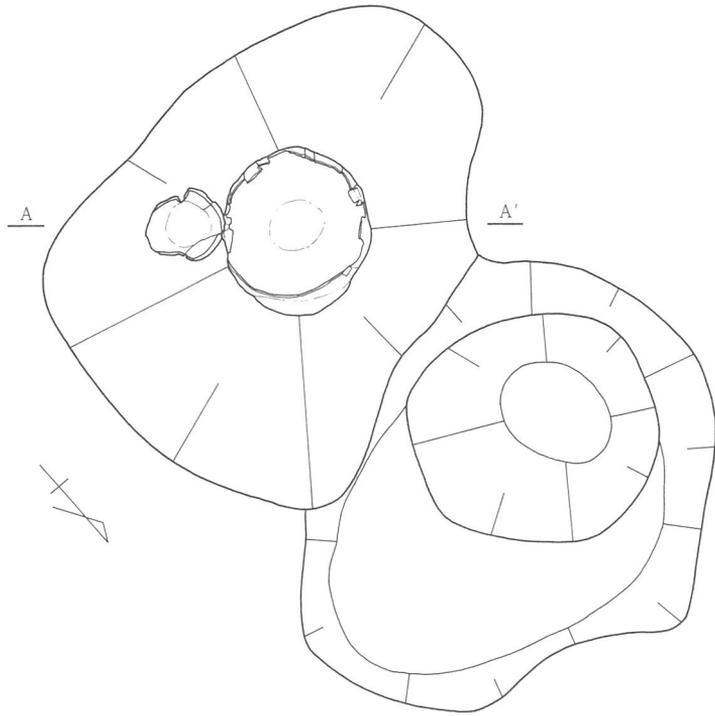
1091は小型丸底壺である。口縁部を欠損している。体部は扁球形状を呈する。

6. 自然河川

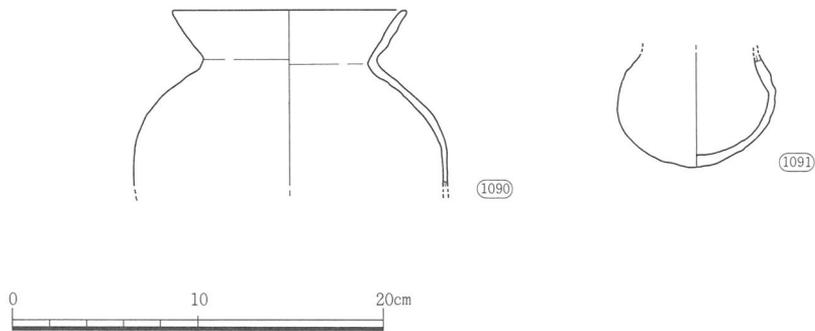
第6地区では、古墳時代前期に比定される自然河川が1条検出された。

1-OR（第216図、図版43）

第6地区の北半部の、J23ER～IR・GQ～IQ・IS・STにまたがる地区で検出した自然河川である。IT付近の調査区東壁から西へ約10m流れ、その後直角に北へ折れて約15m流れ、調査区北壁外へ出る。その後第5地区南端部で再び検出されている。検出長は約25mで、幅4m～8m、深さ約1.2mを測った。埋土は断面観察を行った場所が西から北へ屈折する地点であったため、東側では2.5Y7/2灰黄色ないしは2.5Y5/3黄褐色の

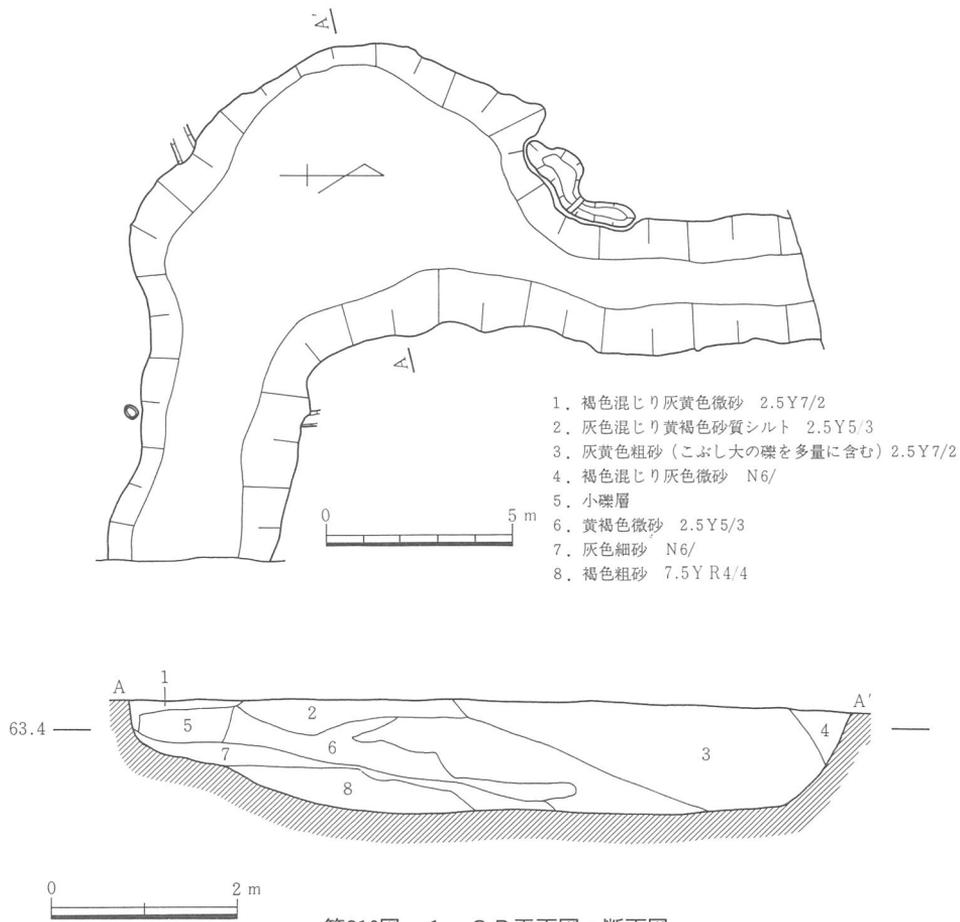


第214図 58-O P遺物出土状況



第215図 58-O P出土遺物

微砂からなる上層と、N6/灰色ないしは7.5Y R4/4褐色の砂からなる下層に分層でき、この部分は徐々に砂が堆積した様相を呈している。これに対して西側は2.5Y7/2灰黄色の粗



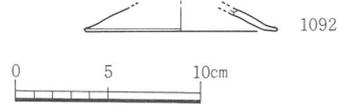
第216図 1-O R平面図・断面図

砂がいききに堆積している。これは蛇行する流れのコーナー部に土砂が堆積してゆく状況を示しているものといえる。内部から古式土師器が少量出土した。

1-OR出土遺物 (第217図1092)

1-ORからは古式土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1092は古式土師器の小型器台と思われる。脚部のみの破片で、直線的に外下方に大きく開く脚部である。



第217図 1-OR出土遺物

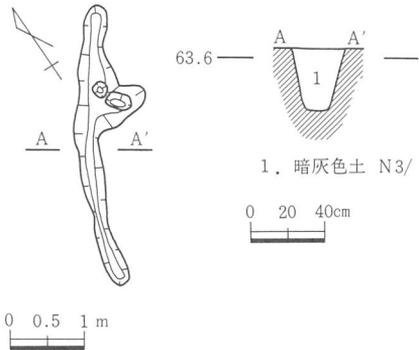
第2項 古墳時代後期

古墳時代後期に比定される遺構としては溝がある。

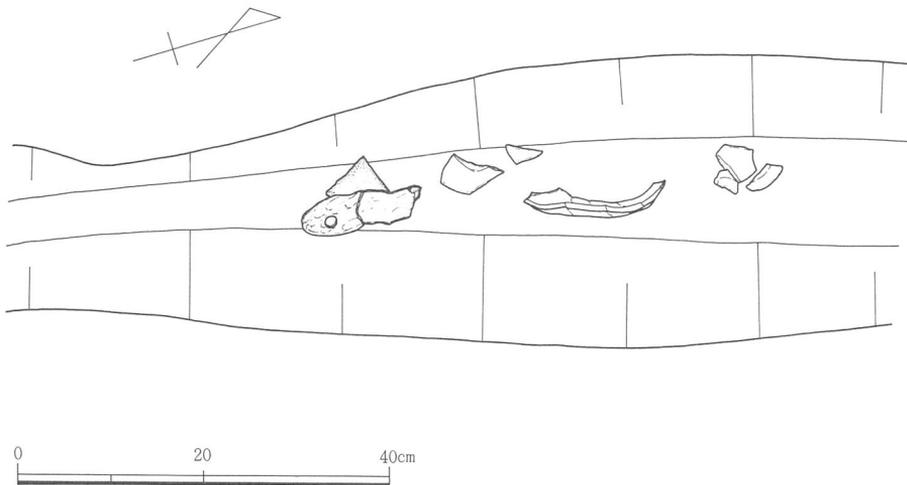
1. 溝

21-OS (第218図)

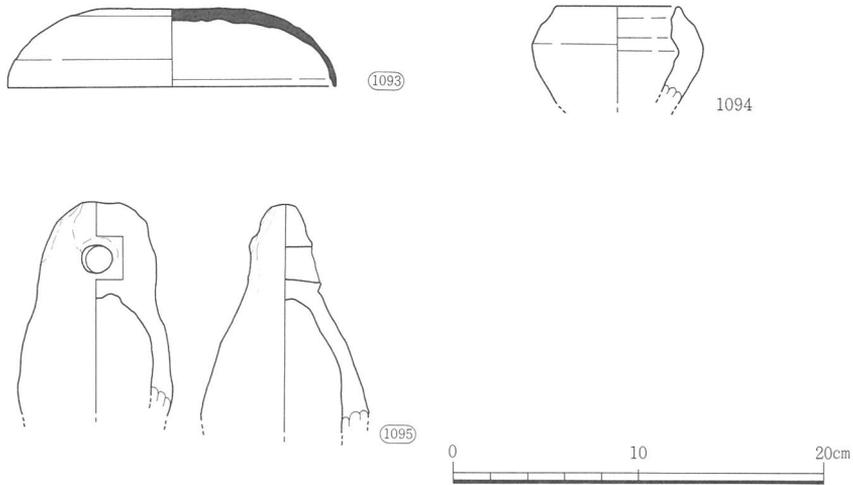
第6地区の北端部の、J 23F Q・G Qにまたがる地区で検出した、北東から南西方向に走る溝である。検出長3.8mで、幅0.15m~0.3m、深さ0.32mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から須恵器・土師器などが少量出土した (第219図, 図版43)。



第218図 21-OS平面図・断面図



第219図 21-OS遺物出土状況



第220図 21-O S 出土遺物

21-O S 出土遺物（第220図1093～1095）

21-O S からは須恵器・土師器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

1093は須恵器の杯蓋である。比較的平らな天井部で、口縁部は丸みを持つ。天井部と口縁部の境には稜・沈線のたぐいはみられない。口縁端部内面には内傾する段をわずかに残す。陶邑編年のII型式3段階に含まれるものと思われる。

1094は土師器で、壺の破片と思われる。体部下半以下を欠損している。体部は下半から外上方にのび、上端で短く内傾する。口縁の立ち上がりがほとんど無く、先端を上方につまみ出す程度のものである。

1095は土師質の蛸壺である。釣鐘形の飯蛸壺である。

第3項 鎌倉時代

鎌倉時代に比定される遺構としては土坑・溝などがある。

1. 土坑

第6地区では、鎌倉時代に比定される土坑が2基検出された。

32-O O（第221図）

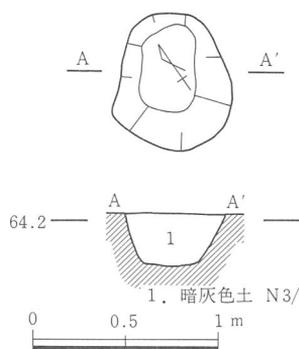
第6地区の南半部東端付近の、J 23 T Tで検出した土坑である。不整楕円形状を呈し、

長径0.75m，短径0.5m，深さ0.28mを測った。埋土は1層で，N3/暗灰色土である。内部から土師器・瓦器などの破片がごく少量出土した。

32-〇〇出土遺物（第222図1096）

32-〇〇からは土師器・瓦器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1096は瓦器で，碗の破片と思われる。底部のみの破片で，全体の形状などは不明である。底部外面に断面台形状の貼付高台を付す。

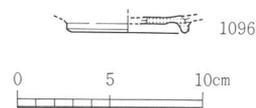


第221図 32-〇〇平面図・断面図

33-〇〇（第223図）

第6地区の南半部東端付近の，J23STで検出した土坑である。不整四角形状を呈し，長辺1m，短辺0.72m，深さ0.41m

を測った。埋土は1層で，10YR3/2黒褐色土である。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土した。



33-〇〇出土遺物（第224図1097）

33-〇〇からは土師器・瓦器などがごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

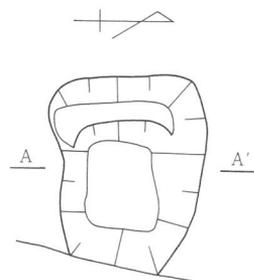
1097は土師器の小皿である。平らな底部で，口縁の立ち上りがごく低く，短く外方へ開く。

2. 溝

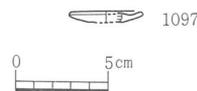
第6地区では，鎌倉時代に比定される溝が1条検出された。

22-〇S（第225図）

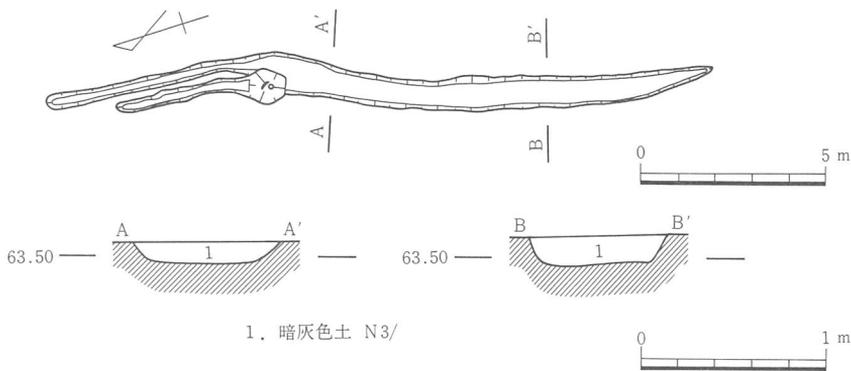
第6地区の北半部西端付近の，J23FP～JP・IO・JOにまたがる地区で検出した溝である。南北方向からわずかに東に振る角度で走る。北端部は調査区内で途切れているが，南側は調査区西壁外へのびている。検出長18mで，幅0.9m，深さ0.1mを測った。埋土は1層で，N3/暗灰色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。



第223図 33-〇〇平面図・断面図



第224図 33-〇〇出土遺物

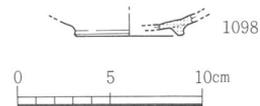


第225図 22-O S 平面図・断面図

22-O S 出土遺物 (第226図1098)

22-O Sからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1098は瓦器で、椀と思われる。底部のみの破片で、全体の形状などは不明である。底部外面に断面台形状の貼付高台を付す。



第8節 第7地区

第226図 22-O S 出土遺物

第1項 平安時代

平安時代に比定される遺構としてはピットがある。

1. ピット

第7地区では、平安時代に比定されるピットが1ヶ所検出された。

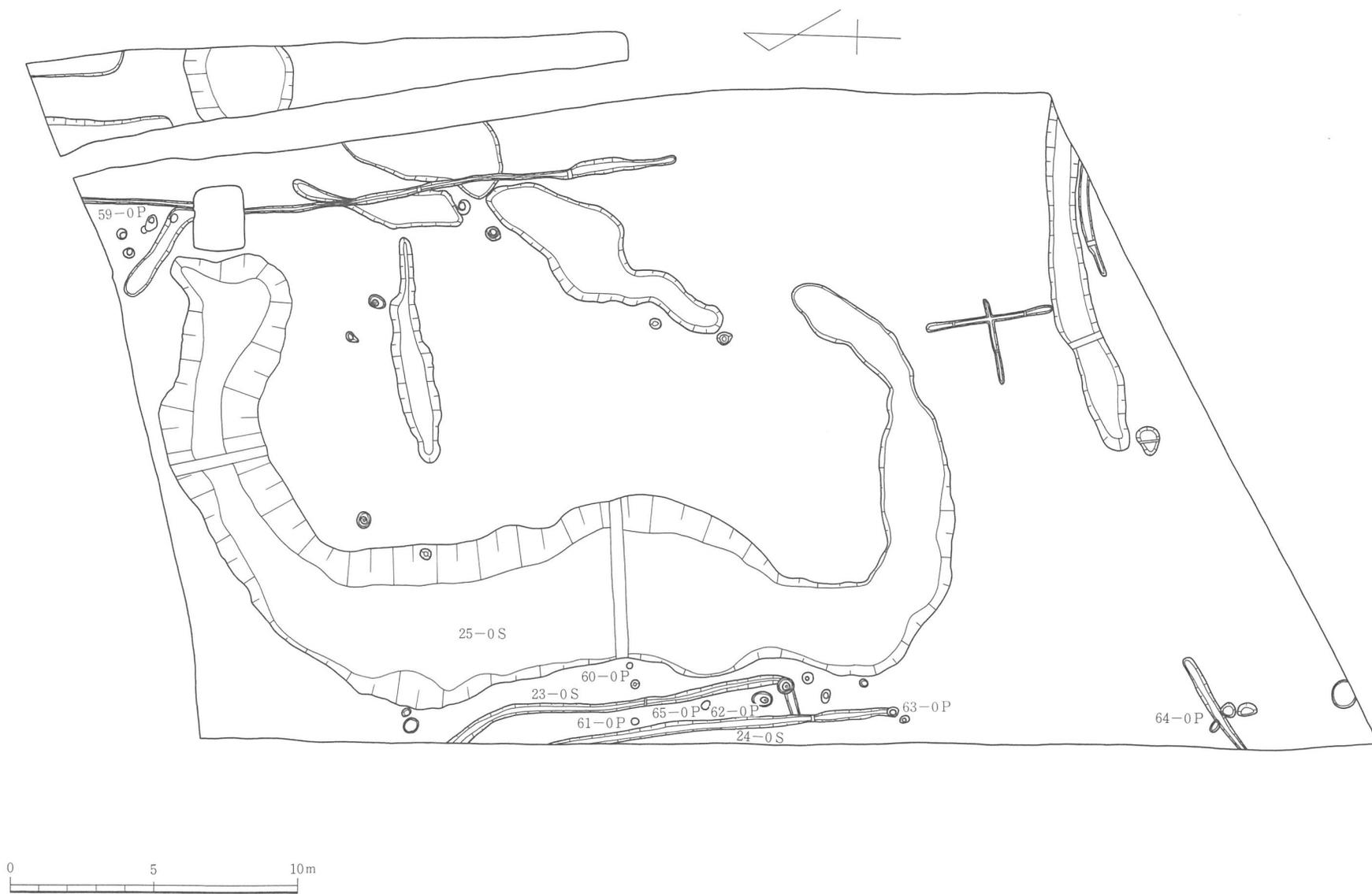
59-O P (第228図, 図版46)

第7地区の北端部付近の、J 23V Tで検出したピットである。不整楕円形状を呈し、長径0.4m, 短径0.3m, 深さ0.1mを測った。柱痕は円形で、径0.1mを測った。内部から土師器が少量出土した(図版46)。

59-O P 出土遺物 (第229図1099~1107)

59-O Pからは土師器が少量出土した。そのうち図示し得たのは9点である。

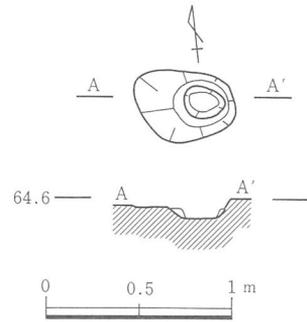
1099は土師器の杯である。底部を欠損しているが、比較的丸みを持つ底部と思われる。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのび、端部付近は短く直立する。



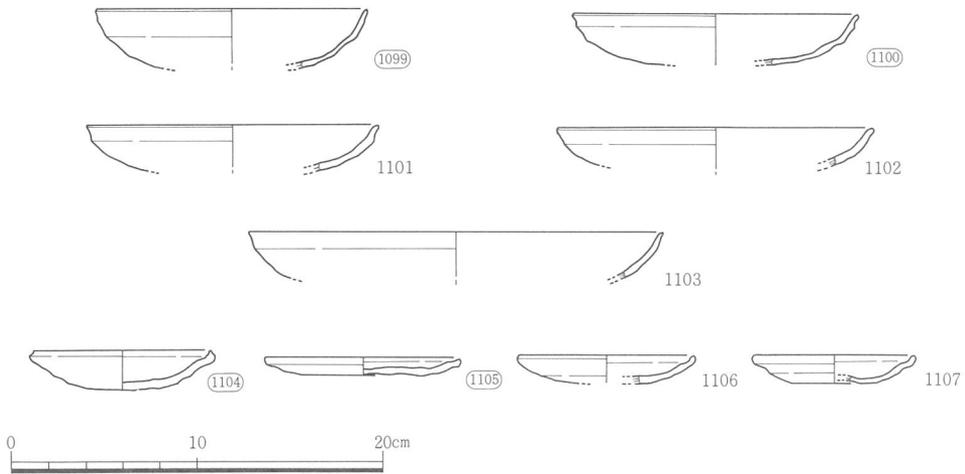
第227图 第7地区平面图

1100～1103は土師器の皿である。比較的平らな底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へ低くのびる。

1104～1107は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが一度短く内弯して外上方へのび、その後わずかに外反して終る。端部は一度先端をつまみ出した後内側に曲げ込んでいる。



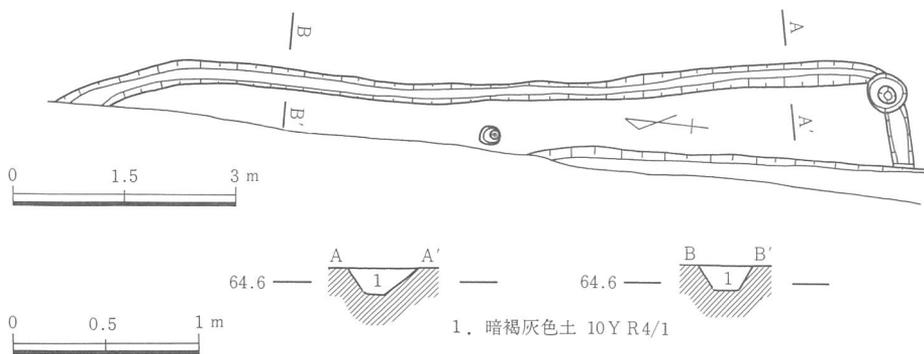
第228図 59-O P 平面図・断面図



第229図 59-O P 出土遺物

第2項 鎌倉時代

鎌倉時代に比定される遺構としては溝・ピットなどがある。



第230図 23-O S 平面図・断面図

1. 溝

23-O S (第230図)

第7地区の中央部西端付近のJ 23Y P・C 4-15-B03A P～C Pにまたがる地区で検出した南北方向に走る溝である。南端部は西に直角に折れて調査区西壁外にのびており、北側も調査区外にのびる。検出長11mで、幅0.25m、深さ0.13mを測った。埋土は1層で、10Y R4/1暗褐灰色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

23-O S 出土遺物 (第231図1108～1111)

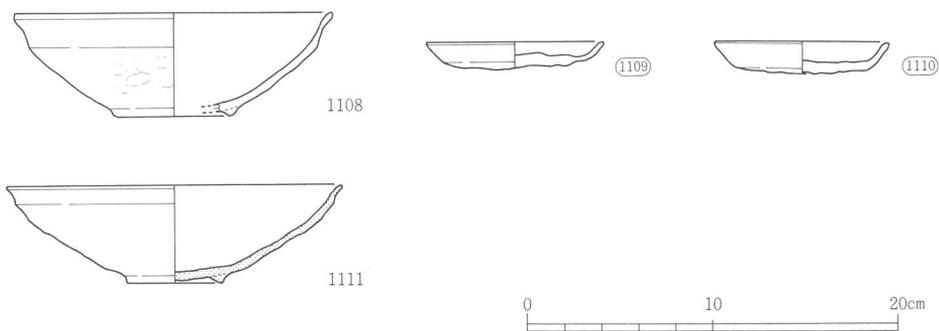
23-O Sからは土師器、瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは4点である。

1108は土師器の椀である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが比較的まっすぐ外上方へのび、その後わずかに上方に屈曲して終る。端部外面に横ナデによる凹みが生じている。底部外面周縁付近に断面三角形状の貼付高台を付す。

1109, 1110は土師器の小皿である。そのうち1109は平らな肉厚の底部で、底部周縁付近は厚みが半減する。口縁の立ち上りが低く短く外上方へのびる。

1110は平らな底部で、口縁の立ち上りが短く外上方へのびる。

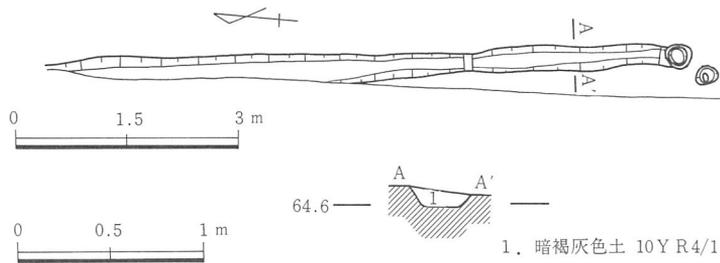
1111は瓦器の椀である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのび、その後わずかに上方に屈曲して終る。端部外面に横ナデによる凹みが生じる。



第231図 23-O S 出土遺物

24-O S (第232図)

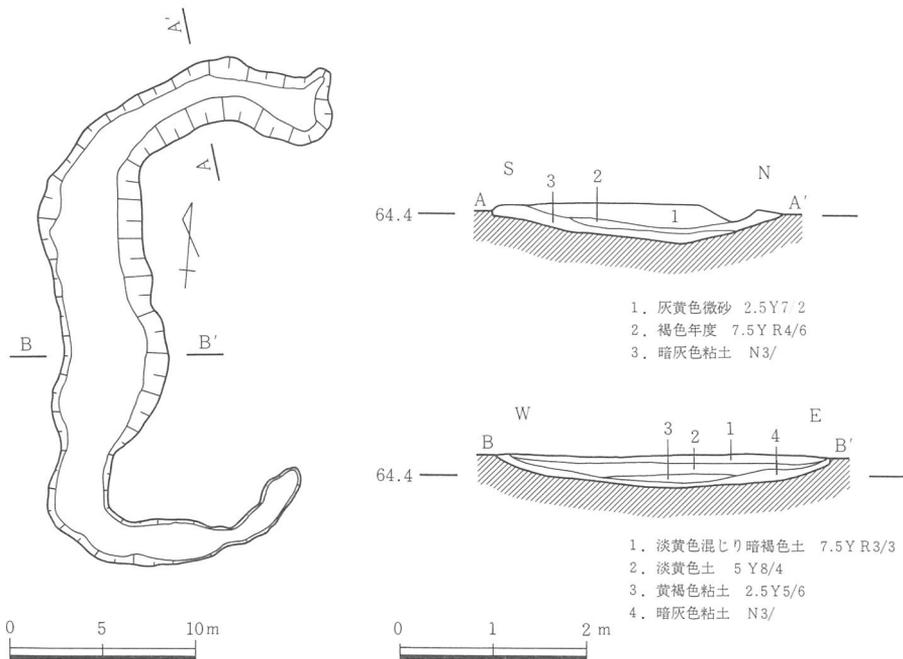
第7地区の中央部西端の、B03A P～C Pにまたがる地区で検出した南北方向に走る溝である。23-O S とほぼ平行に走る。南端は調査区内で途切れるが、北側は調査区西壁外へのびている。検出長7.5mで、幅0.3m、深さ0.03mを測った。埋土は1層で、10Y R4/1暗褐灰色土である。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第232図 24-OS平面図・断面図

25-OS (第233図, 図版45)

第7地区の中央部から北半部にかけての、J 23WQ~WS・XP・XQ・YR・YQ・B03AQ~DQ・CR・CS・DR・DSにまたがる地区で検出した溝である。「コの字」状に走る。検出長41mで、幅1m~5m、深さ0.4mを測った。浅いU字状の断面を呈する。埋土は3層ないしは4層で、北端部付近では上より2.5Y7/2灰黄色微砂、7.5Y R4/6褐色粘土、N3/暗灰色粘土、中央部では上より7.5Y R淡黄色混じり暗褐色土、5 Y8/4淡黄色土、2.5Y5/6黄褐色粘土、N3/暗灰色粘土となっている。内部から土師器・瓦器などが少量出土したが、図示し得るものはなかった。



第233図 25-OS平面図・断面図

2. ピット

第7地区では、10ヶ所を超えるピットが検出されたが、その中で鎌倉時代に比定されるものが6ヶ所確認できた。

60-O P (第234図)

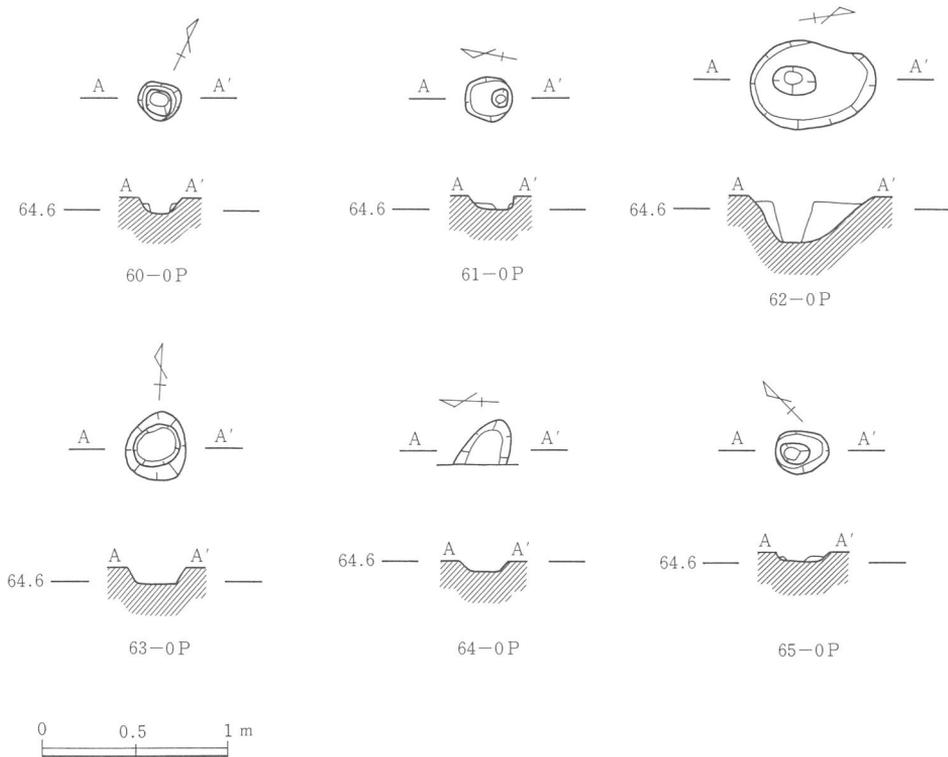
第7地区の中央部西端の、B03A Pで検出したピットである。不整円形状を呈し、径0.24m、深さ0.08mを測った。柱痕は円形で、径0.14mを測った。内部から瓦器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

61-O P (第234図)

第7地区の中央部西端の、B03A Pで検出したピットである。円形状を呈し、径0.24m、深さ0.07mを測った。柱痕は円形で、径0.08mを測った。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

62-O P (第234図)

第7地区の中央部西端の、B03B Pで検出したピットである。楕円形状を呈し、長径



第234図 第7地区鎌倉時代ピット平面図・断面図



第235图 第8地区第2面平面图

0.67m, 短径0.47m, 深さ0.25mを測った。柱痕は円形で, 径0.12mを測った。内部から瓦器がごく少量出土したが, 図示し得るものはなかった。

63-OP (第234図)

第7地区の南半部西端の, B03DPで検出したピットである。不整形形状を呈し, 径0.32m, 深さ0.09mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土したが, 図示し得るものはなかった。

64-OP (第234図)

第7地区の南半部西端の, B03FPで検出したピットである。不整形形状を呈し, 径0.26m, 深さ0.05mを測った。柱痕は確認できなかった。内部から瓦器がごく少量出土したが, 図示し得るものはなかった。

65-OP (第234図)

第7地区の中央部西端の, B03BPで検出したピットである。楕円形状を呈し, 長径0.29m, 短径0.23m, 深さ0.07mを測った。柱痕は円形で, 径0.12mを測った。内部から瓦器がごく少量出土したが, 図示し得るものはなかった。

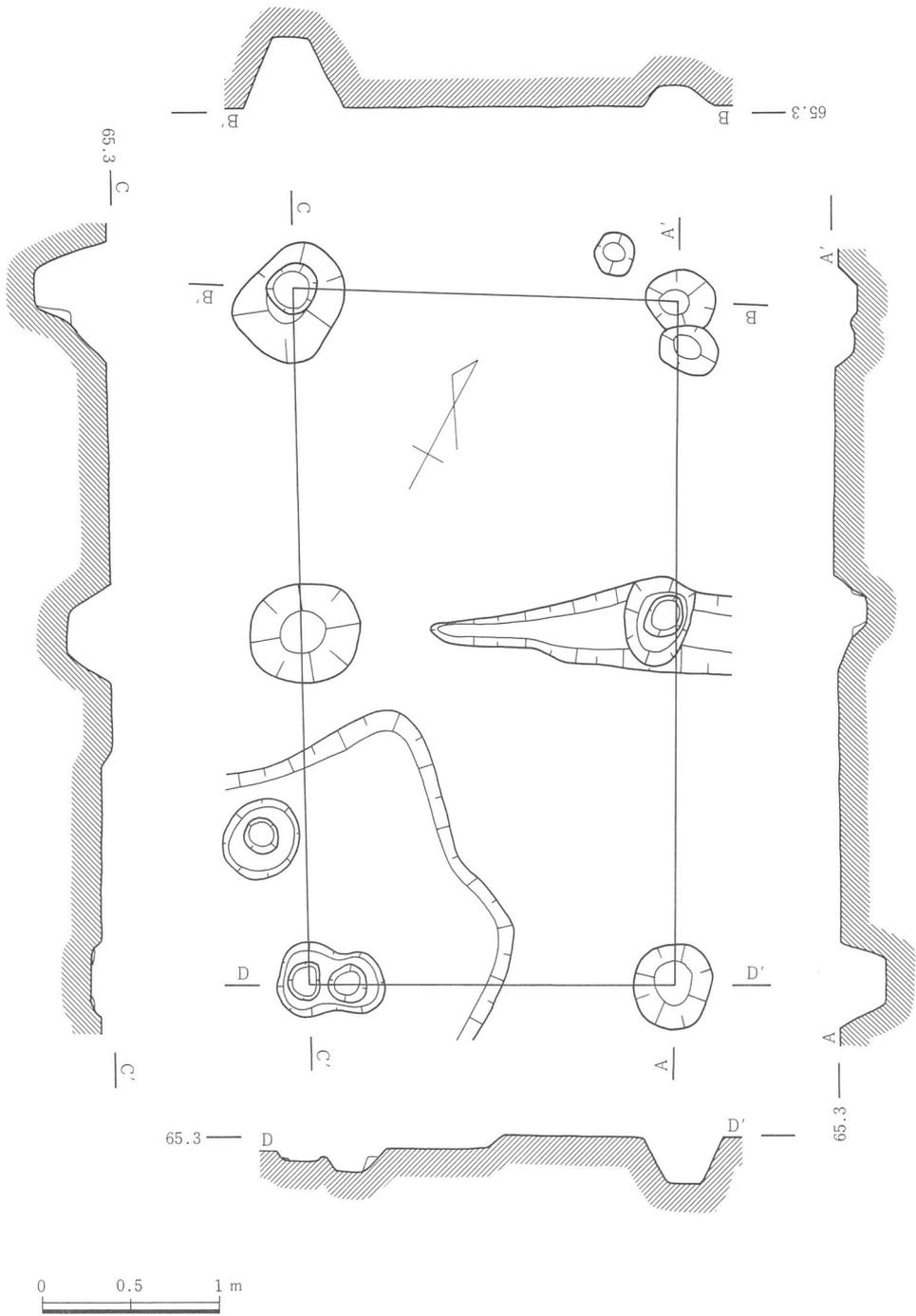
第9節 第8地区

第8地区では, 調査区の中央部より北側においては, 平安時代末～鎌倉時代初頭(12世紀後半～13世紀初頭)に比定される遺構面と鎌倉時代(13世紀前半)に比定される遺構面の, 計2面の遺構面が存在し, 南半部では両時期の遺構面が同一の遺構面で検出された。このような状況は下の遺構面が傾斜を持つためにみられるもので, 古い時期の遺構面が埋没した後に低い地域に土砂が堆積し, 面が平坦になった時点で新しい時期の遺構が形成された事により生じている。

第1項 平安時代末～鎌倉時代初頭

平安時代末～鎌倉時代初頭に比定される遺構としては掘立柱建物・土坑・溝・ピット・自然河川・池などがある。

なお, 井戸2-OWは第2面で検出された遺構であるが, 出土遺物から判断すると13世紀前半頃に比定され, 第1面で検出された後述の土坑39-OO・40-OOと同時期ないし



第236图 20-O B 平面图·断面图

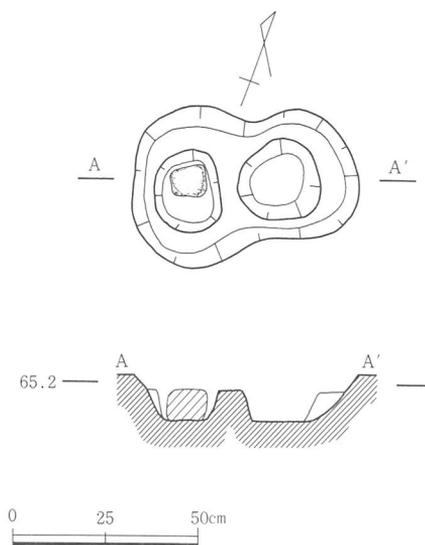
はやや後出と考えられる。したがって2-O Wは第1面の遺構と思われるが、第2面精査の段階でしか検出できなかったため、遺構・遺物の説明の部分では第2面の遺構に含めている。

1. 掘立柱建物

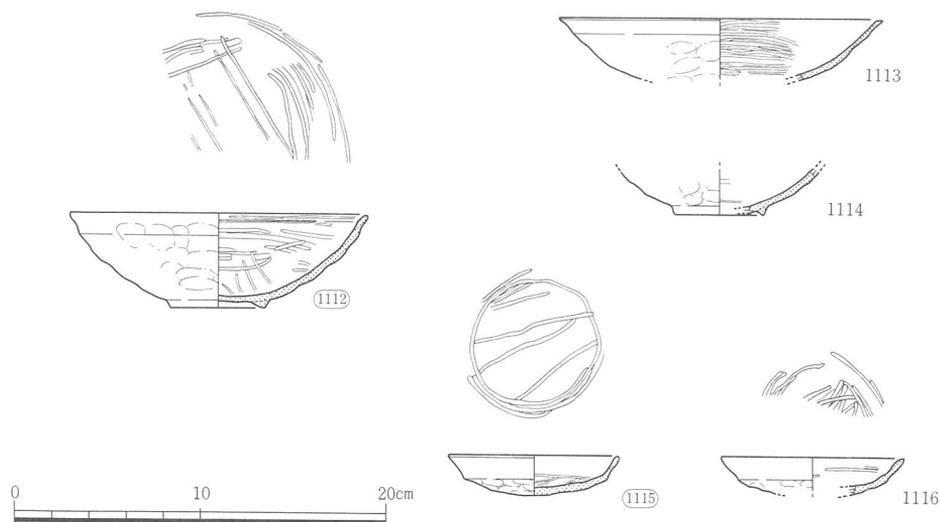
第8地区では、平安時代末から鎌倉時代初頭に比定される掘立柱建物が1棟検出された。

20-O B (第236図, 図版48, 49)

第8地区の北半部東寄りの、B03 I S・I T・J S・J Tにまたがる地区で検出した1間×2間の掘立柱建物である。主軸はN-60°-Eを示す。桁行間2間×梁間1間で、実数値は西桁行間3.94m, 東桁行間3.9m, 北梁間2.18m, 南梁間2.09mを測った。柱穴は円形ないし楕円形状を呈し、径0.3m~0.6mを測った。深さは0.1m~0.4mである。西南コーナーの棟持柱の柱穴に

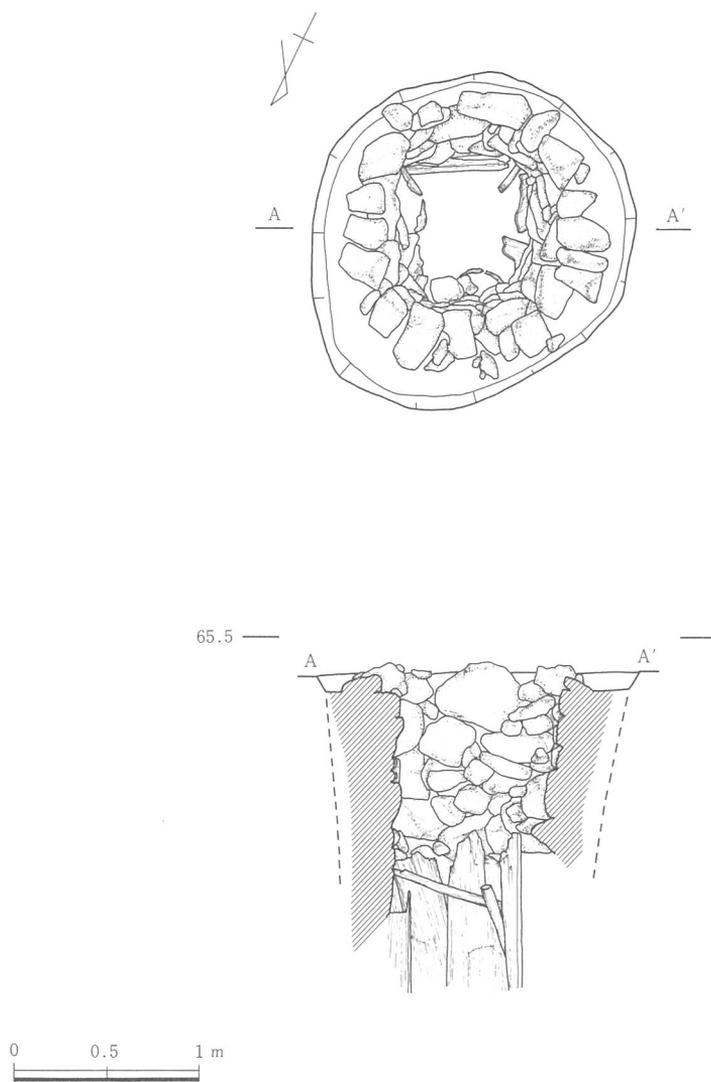


第237図 20-O B 柱穴根石検出状況



第238図 20-O B 出土遺物

は0.14m×0.2mの四角形の平らな石を置いて礎石としている（第237図）。柱穴内から土師器・瓦器などが少量出土した。



第239図 2-OW平面図・断面図

20-O B 出土遺物（第238図1112～1116）

掘立柱建物20-O Bを構成する柱穴からは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは5点である。

1112～1114は瓦器の椀である。浅い椀形の器形で、底部外面に断面V字形の貼付高台を付す。内面は比較的荒いヘラミガキ、外面は上半部にのみ荒いヘラミガキを施す。見込みに平行線状の暗文を施す。

1115, 1116は瓦器の小皿である。やや丸みをおびた平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じる。口縁部内面に円周状に荒いヘラミガキを施す。見込には平行線状の暗文がみられる。

2. 井戸

第8地区では、鎌倉時代に比定される井戸が1基検出された。

2-O W（第239図、図版50）

第8地区の中央部東寄りの、B03LTで検出した井戸である。掘方の内部に、礫を積み上げた井戸枠を持つ石組井戸である。掘方は円形状で、径1.78mを測った。掘方は、内側に石組の存在が確認されたため、石組の保護のために約0.1m掘り下げるにとどめた。したがって掘方の断面観察は実施していない。石組は、内面が四角形になるように意識して組まれており、内面は一辺約0.6mを測った。井戸底までの深さは約1.7mである。石組は井戸底まで組まれており、下に行くにしたがって途々に狭くなっている。底面から0.9m上部までの範囲には、板材を各辺2枚ずつ立てかけて、その内側に横木及び杭を打って補強した木枠を作っている。井戸底は径0.21mの円形状を呈する曲物が、中央やや南寄りの位置で検出された。

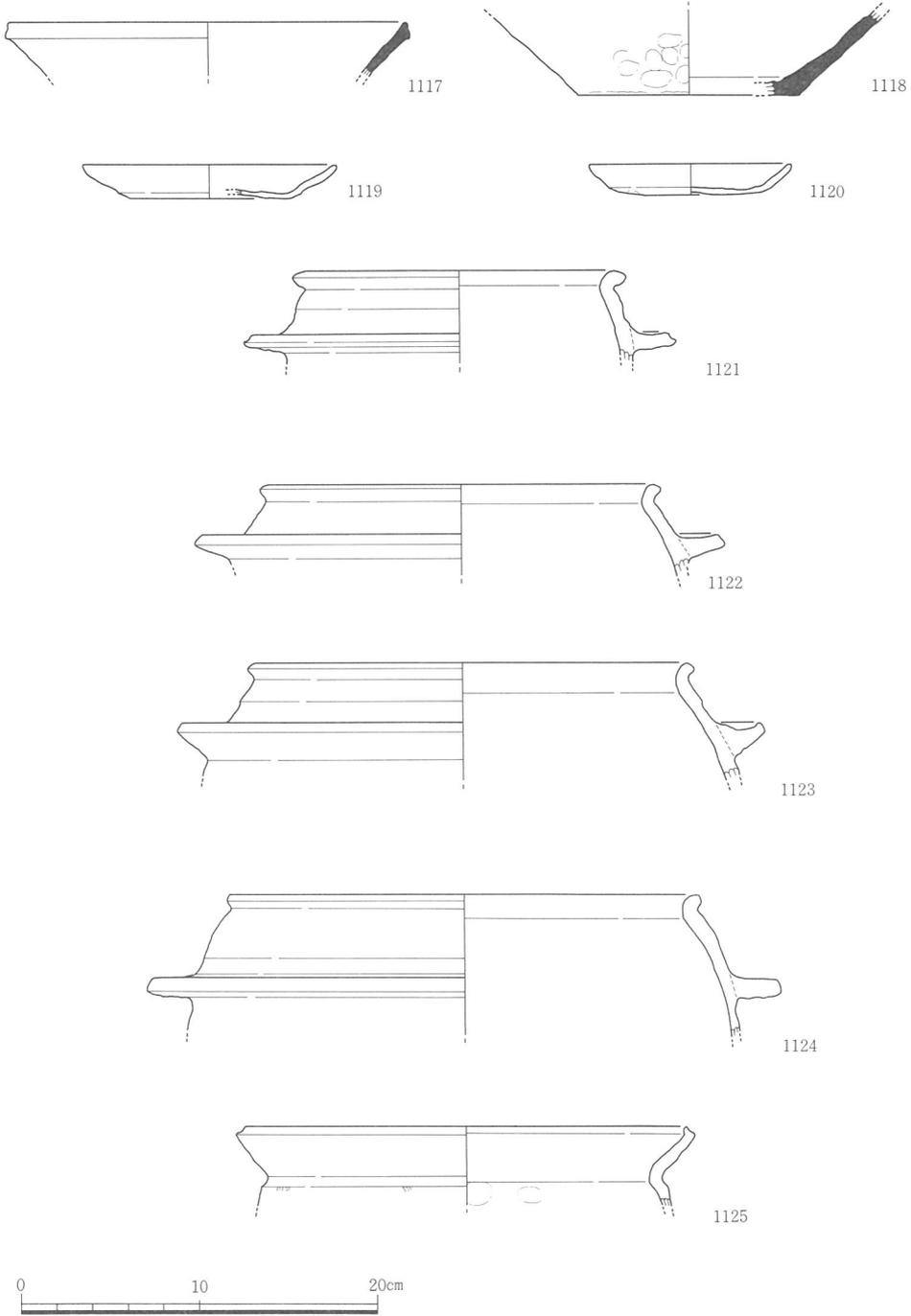
内部からは須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・石製品などが比較的まとまった量出土した。

2-O W出土遺物（第240図1117～第243図1133）

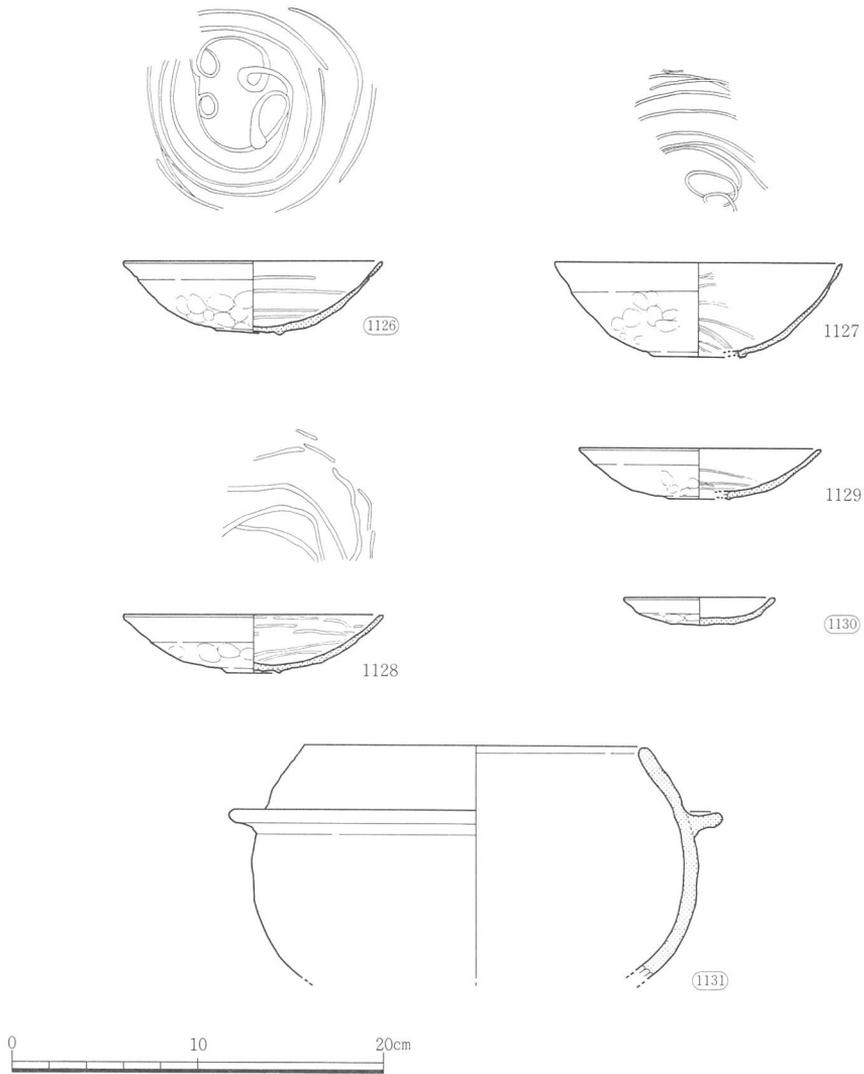
2-O Wからは須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・石製品などが比較的まとまった量出土した。そのうち図示し得たのは17点である。

1117, 1118は須恵器の鉢である。1117は口縁部だけの破片で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。端部外面に面をなす。

1118は底部周縁及び体部下半のみの破片である。平らな底部で、体部はまっすぐ外上方へのびる。



第240图 2 - OW出土遺物(1)



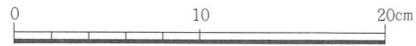
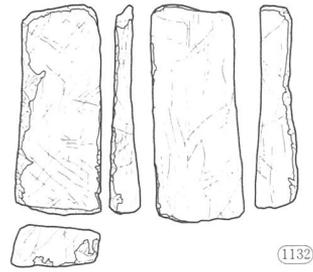
第241図 2-OW出土遺物(2)

1119, 1120は土師器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが比較的低く、外上方へまっすぐのびる。

1121～1125は土師器の羽釜である。いずれも体部上半以上のみの破片である。1121～1124は体部上半が内傾するもので、口縁部はごく短く外反する。鏝は肉厚で短く、端部は外側に面をなす。

1125は口縁のみの破片である。口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのび、端部は内側を上方に軽くつまみ出す。端部外面に面をなす。

1126～1129は瓦器の椀である。1126, 1128, 1129は小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へ低くのびる。比較的浅い器形を呈する。底部外面周縁付近に、断面三角形の貼付高台を付す。内面を荒いヘラミガキ調整し、見込みには連結輪状暗文が施されている。



第242図 2-OW出土遺物(3)

1127は他に比べて深い器形を呈し、断面台形状の貼付高台を付す。内面を荒いヘラミガキし、見込みには連結輪状暗文を施す。他よりもやや古い時期にあてはめられるものである。

1130は瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ平底で、口縁の立ち上りが短く外上方へのびる。

1131は瓦質土器の羽釜である。底部は欠損しているが丸底と思われる。体部は内弯し、口縁部はやや丸みを持って内傾する。体部上端付近にやや上反りにのびる肉厚の鏝を付す。

1132は砥石である。材質は和泉砂岩で、かなり使い込んでおり磨耗が激しい。

1133は曲物の桶である。径46cm、高さ16cmで、6mm～7mmの薄板を2枚重ねにしており、各々綴皮で綴じている。底部は木釘で7ヶ所留めており、木釘は1本残存していた。

3. 土坑

第8地区では、平安時代末から鎌倉時代初頭に比定される土坑が5基検出された。

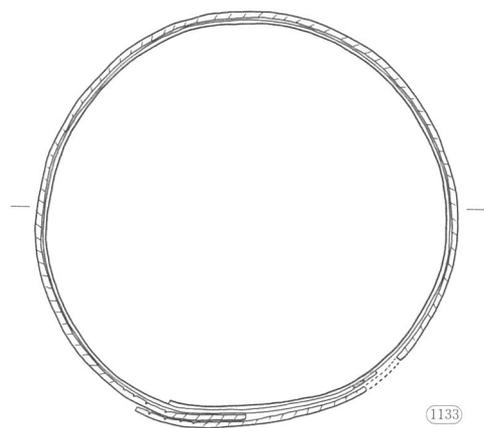
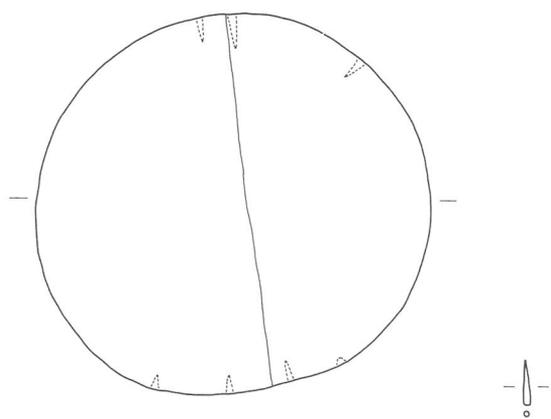
34-〇〇 (第244図)

第8地区の北半部の、B03IR・JR・IS・JSにまたがる地区で検出した土坑である。不定形状を呈し、長径1.88m、短径1.55m、深さ0.12mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した(図版51)。

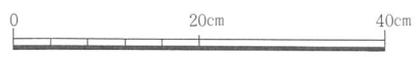
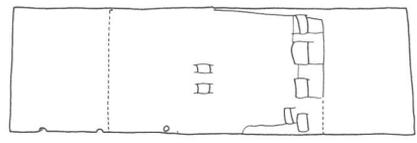
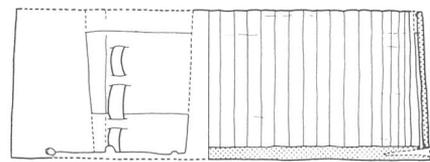
34-〇〇出土遺物(第245図1134～第246図1142)

34-〇〇からは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは9点である。

1134～1139は土師器の羽釜である。すべて底部を欠損しているが、丸底の底部と思われる。体部下半は内弯しつつ外上方へ立ち上り、上半は内傾する。体部上半の外面に段を持つものが多い。口縁部は短く外反する。体部上半に水平ないしは上向きの肉厚の鏝を付す。



1133



第243図 2 - OW出土遺物(4)

体部外面にヘラケズリが顕著に施されている。

1140～1142は瓦器の椀である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのびる。底部外面に、断面三角形の比較的高い貼付高台を付す。内面は荒いヘラミガキで、外面は指押さえとナデによる調整を施す。見込みに平行線状暗文を施すもの(1140)と、斜格子状暗文を施すもの(1141)がある。

35-〇〇 (第247図)

第8地区の中央部東寄りの、B03L

T・L・U・KUにまたがる地区で検出した土坑である。不定形状を呈し、長径6m、短径3.3m、深さ0.3mを測った。埋土は1層でN3/暗灰色土である。内部から須恵器・土師器・瓦器などが少量出土した。

35-〇〇出土遺物 (第247図1143～1145)

35-〇〇からは須恵器・土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

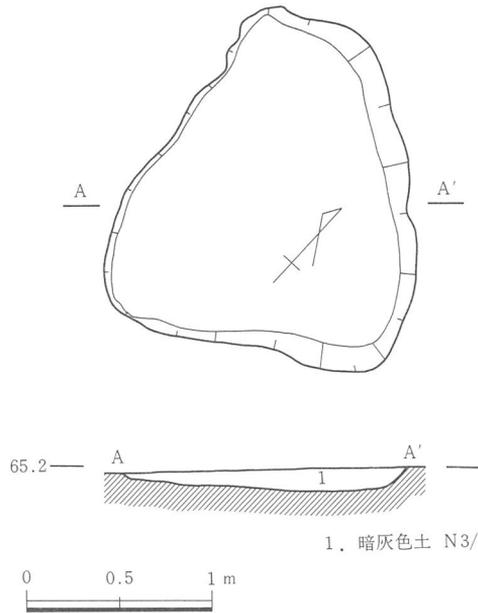
1143は須恵器の鉢である。口縁部のみの破片で、端部がわずかに肥厚する。

1144は瓦器で、椀の破片と思われる。口縁部のみの小片のため、全体の形状などは不明である。

1145は瓦器の小皿である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。内面に荒いヘラミガキを施す。

36-〇〇 (第249図)

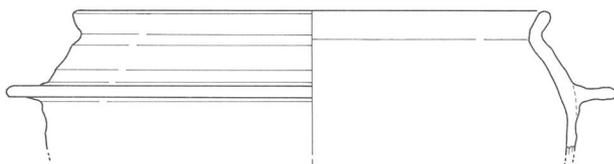
第8地区の中央部東端の、B03J S・J T・K S・K T・L Tにまたがる地区で検出した土坑である。遺構の東側は調査区東壁外へのびている。不定形状を呈し、長径7.2m(検出長)、短径2.7m、深さ0.3mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。



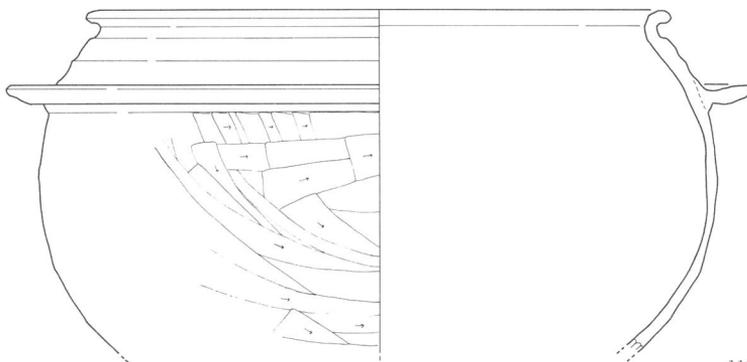
第244図 34-〇〇平面図・断面図



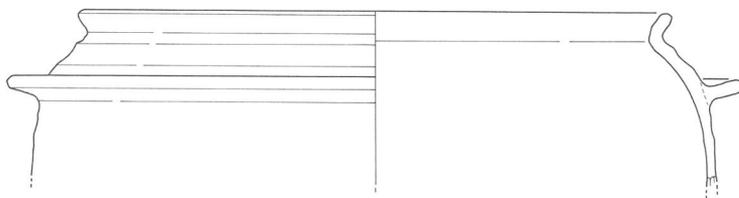
1134



1135



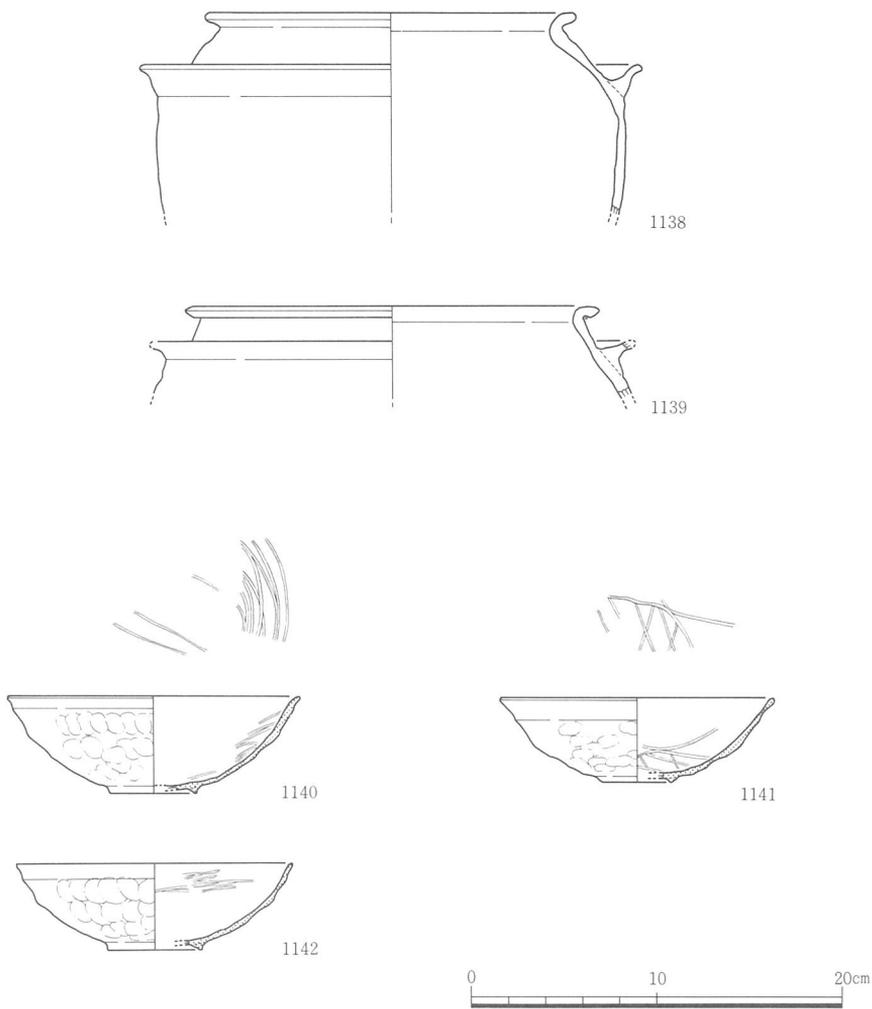
1136



1137



第245図 34-〇〇出土遺物(1)



第246図 34-〇〇出土遺物(2)

36-〇〇出土遺物 (第250図1146, 1147)

36-〇〇からは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは2点である。1146は瓦器の椀である。底部を欠損している。口縁の立ち上りが比較的まっすぐ外上方へのびる。内面に荒いヘラミガキを施す。

1147は瓦器の小皿である。比較的丸みを持った平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。遺存状態が悪く、調整などは不明である。

37-〇〇

第8地区の中央付近の、B03K Sで検出した土坑である。不定形状を呈し、長径1.9m、

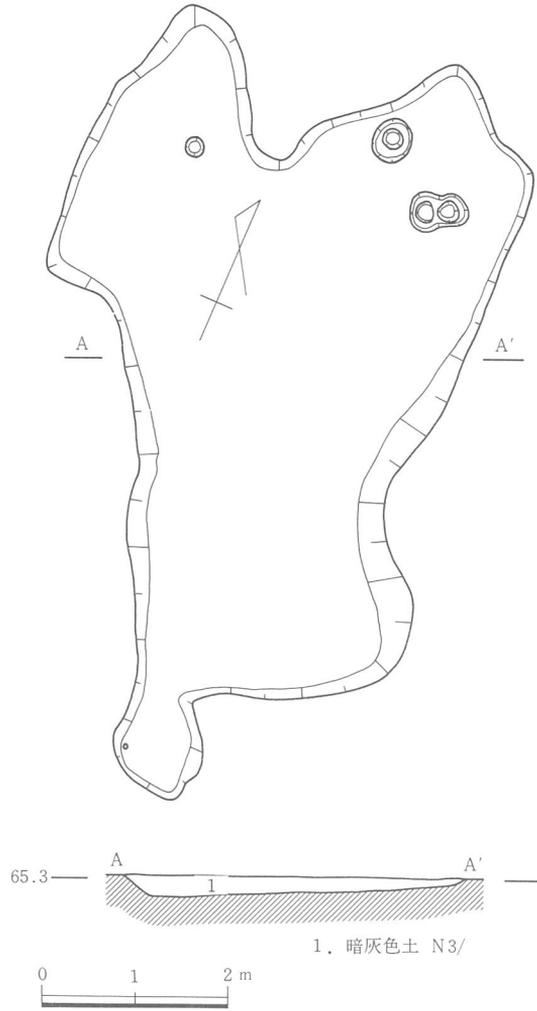
短径0.9m，深さ0.07mを測った。埋土は1層で，N3/暗灰色土である。内部から瓦器が少量出土した。

37-〇〇出土遺物（第251図1148～1153）

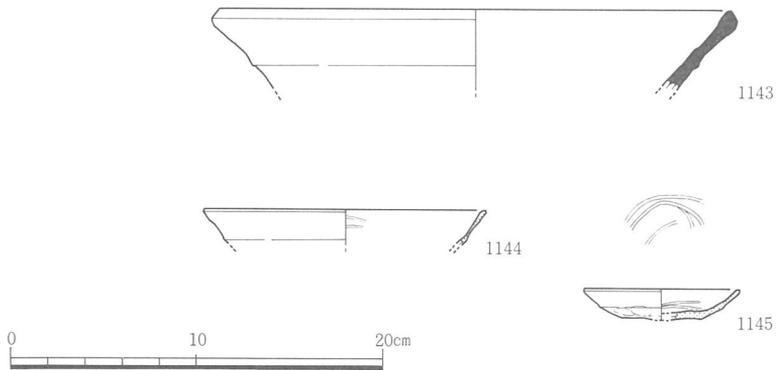
37-〇〇からは瓦器が少量出土した。そのうち図示し得たのは6点である。

1148は瓦器の碗である。底部を欠損している。口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。内面に荒いヘラミガキを施す。

1149～1153は瓦器の小皿である。そのうち1149は小さな平底の底部で，口縁の立ち上りがごく低く，外方へまっすぐのびる。見込みに平行線状の暗文を施す。



第247図 35-〇〇平面図・断面図



第248図 35-〇〇出土遺物

1150～1152は比較的丸みを持った平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。見込みに連結輪状暗文を施すもの（1150）がある。

1153は平底の底部で、口縁の立ち上りが低く外上方へのびる。

38-〇〇（第252図）

第8地区の南半部の、B03〇Sで検出した土坑である。楕円形状を呈し、長径3.8m、短径2.3m、深さ0.2mを測った。埋土は2層に分層でき、上より5Y6/1灰色砂質土、2.5Y6/1褐色混じり黄灰色土

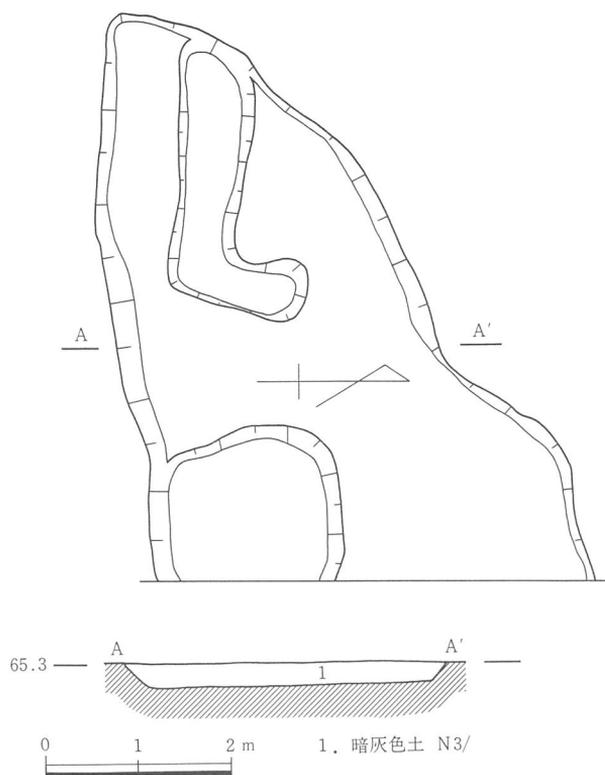
である。この土坑内に、一部礫が集中して検出された部分があり、その範囲は長径1.8m、短径0.8m、深さ0.1mの長形状を呈するものになった。礫はこぶし大から40cmくらいのものであり、意図的に配置されているようである。いわゆる配石土坑と思われる。埋土内からは瓦器が少量出土した。

38-〇〇出土遺物（第253図1154～1156）

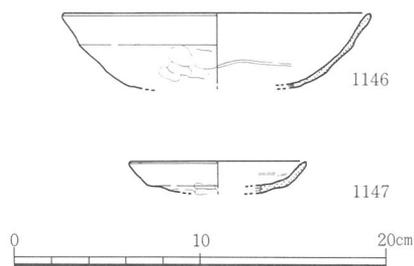
38-〇〇からは瓦器が少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。

1154, 1155は瓦器の碗である。ともに底部を欠損している。口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。1154には内面に荒いヘラミガキがみられる。

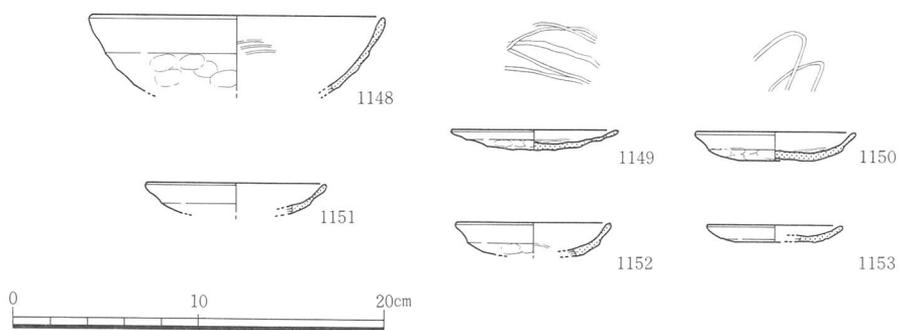
1156は瓦器の小皿である。やや丸みを持った平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じている。口縁部内面の下端付近を



第249図 36-〇〇平面図・断面図



第250図 36-〇〇出土遺物



第251図 37-〇〇出土遺物

円周状に数回ヘラミガキを施している。見込みには規格性のない暗文がみられる。

4. 溝

第8地区では、平安時代末～鎌倉時代初頭に比定される溝が6条検出された。

26-〇S (第254図)

第8地区の北端部の、B03GR・HQ・HRにまたがる地区で検出した、南西から北東方向に走る溝である。南西端部付近は1-〇Lによって切られている。北側は現代の水路によって削平され、その先は隣接する第7地区では検出されていないので、水路と同じ東方に向かって走っていたものと思われる。検出長7m、幅3m、深さ0.2mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器などが多量に出土した(図版52, 53)。

26-〇S 出土遺物 (第255図1157～第278図1461)

26-〇Sからは須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器などが多量に出土した。そのうち図示し得たのは305点である。

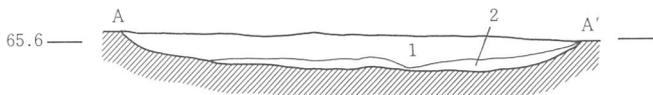
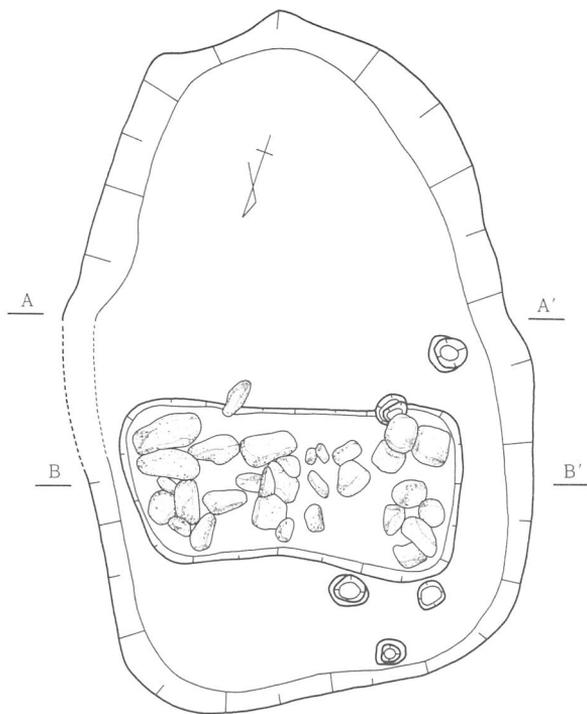
1157～1167は土師器の小皿である。

1157～1159, 1161, 1162は小さな平底ないしは丸底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるものである。

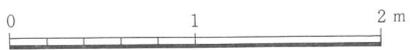
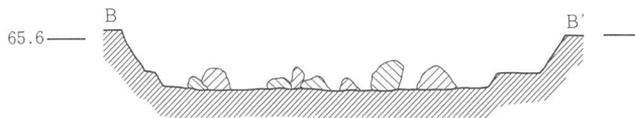
1163は平底の底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。底部周縁に稜が生じている。底部外面にヘラ切り痕が顕著に残っている。

1164はわずかに丸みを持つ平底の底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのびる。口縁部外面に横ナデによる凹みが生じている。

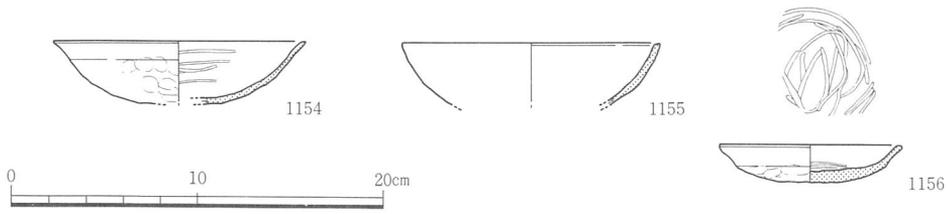
1160, 1165～1167は平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるもので



- 1. 灰色砂質土 5Y6/1
- 2. 褐色混じり黄灰色土 2.5Y6/1



第252図 38-00平面図・断面図



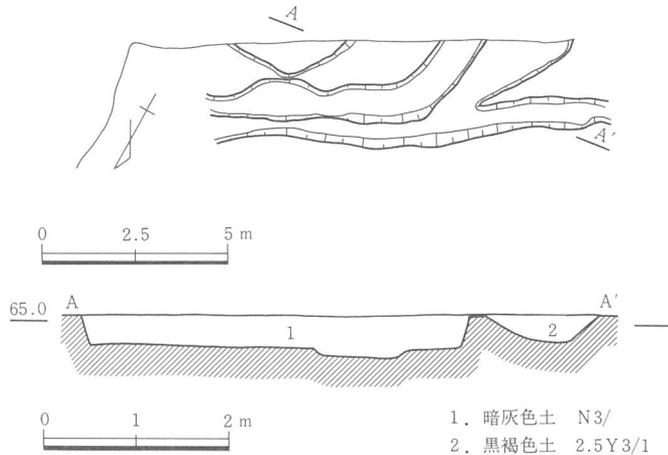
第253図 38-〇〇出土遺物

ある。

1168～1171は土師器の皿である。

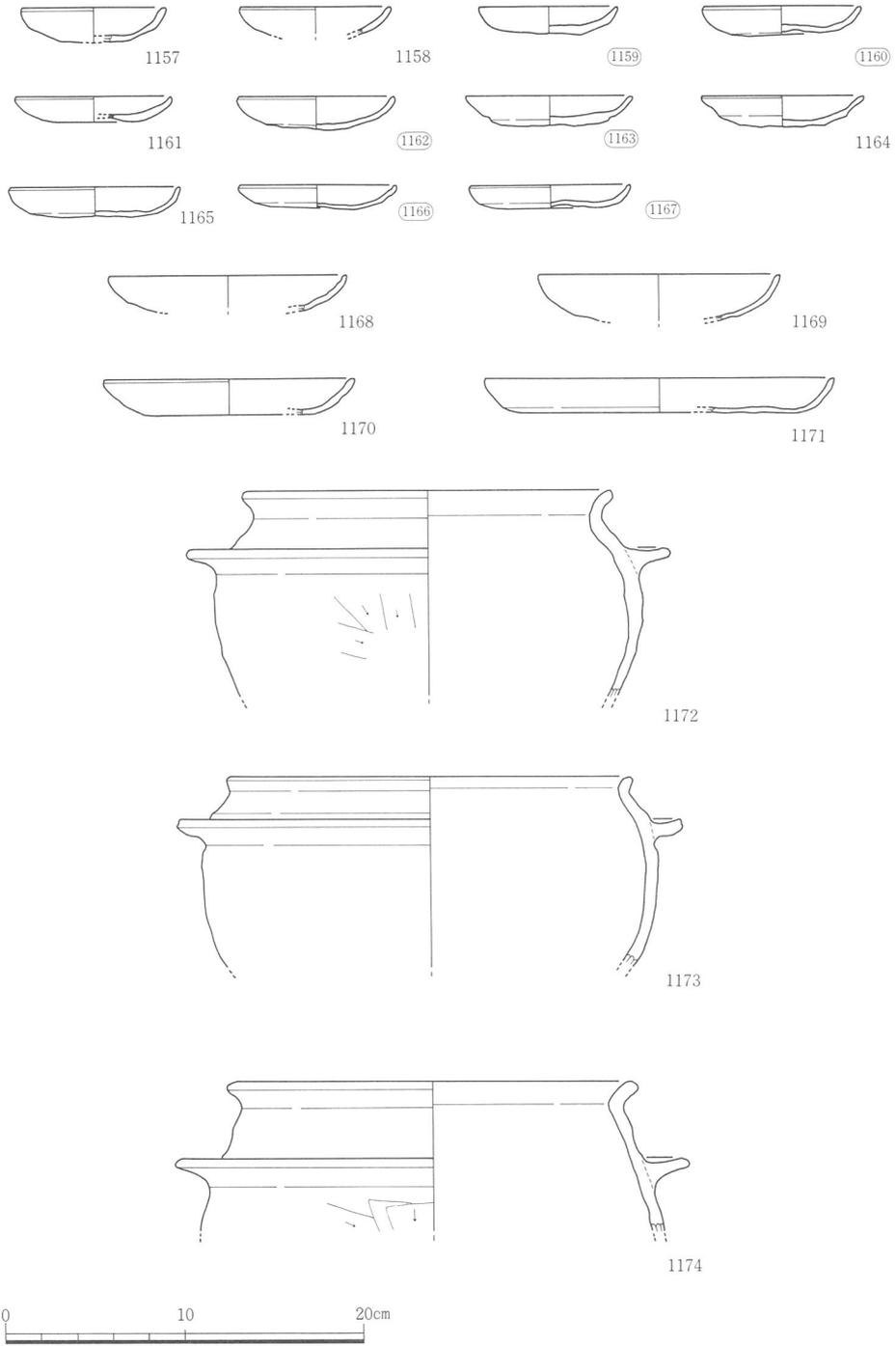
1168, 1169は底部を欠損しているが、小さな平底ないしは丸底の底部と思われ、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるものである。

1170, 1171は平底の底部で、口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびるものである。

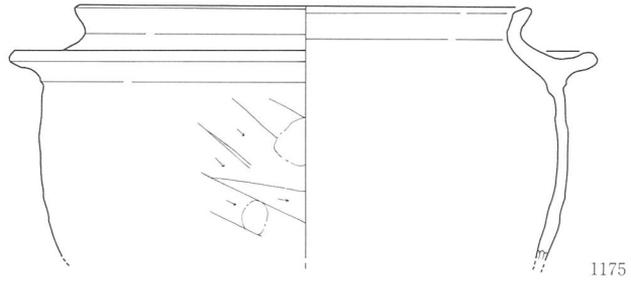


第254図 26-〇S平面図・断面図

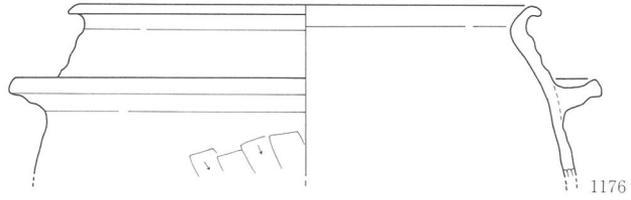
1172～1219は土師質の羽釜である。図示した個体数は48点とかなりの数量にのぼり、体部の形状、口縁部の形状などによっていくつかに分類できた。すなわち、球形の体部で、体部上端は内弯気味に内傾し、口縁の立ち上りが短く外反するもの（1172, 1173, 1179～1181, 1185～1191, 1193, 1195～1198, 1201, 1204, 1205, 1210）、体部下半は球形であるが、体部上端は直線的に内傾し、口縁の立ち上りが短く外反するもの（1174, 1176～1178, 1192, 1194, 1203, 1208, 1212）、球形の体部で、体部上端は内弯気味に内傾し、口縁の立ち上りが短く直立するもの（1182, 1183, 1199, 1200, 1207）、体部下半は球形で、体部上端が直線的に内傾し、口縁の立ち上りが短く直立するもの（1184, 1209）、体部は上半で肩が張る形状で、上端が大きく内傾し、口縁の立ち上りが短く外反するもの（1175, 1202, 1206）、口縁の立ち上りがごく短く、外側に肥厚して終り、体部上端が直立に近いもの（1213, 1217）、口縁の立ち上りがごく短く、外側に肥厚して終り、体部上端が内傾するもの（1214～1216, 1218, 1219）などである。又、法量からは、口径（復元



第255图 26-O S出土遺物(1)



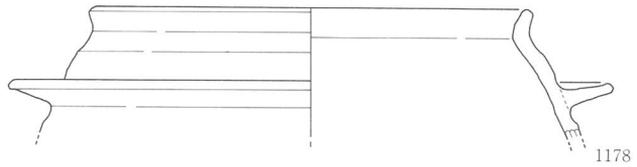
1175



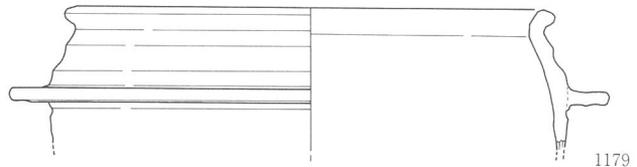
1176



1177



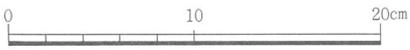
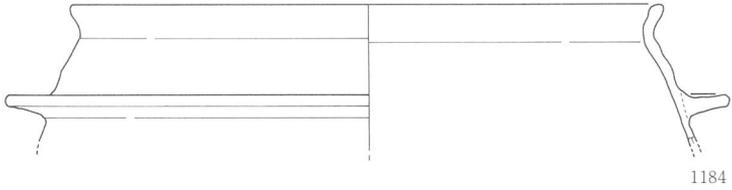
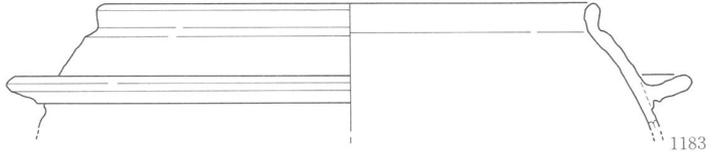
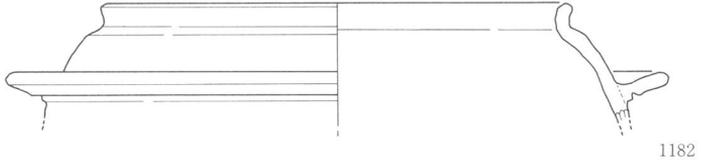
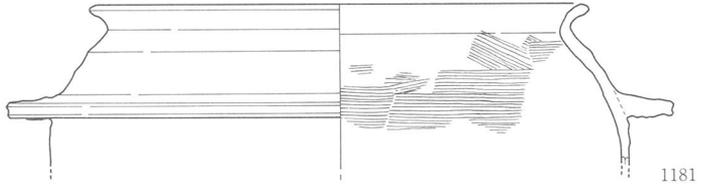
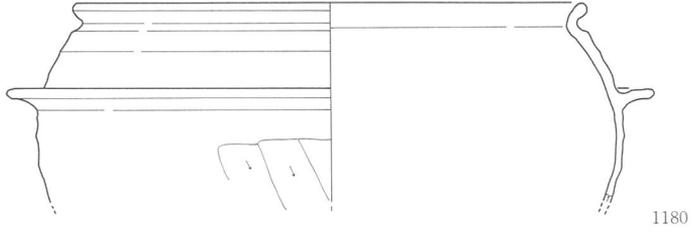
1178



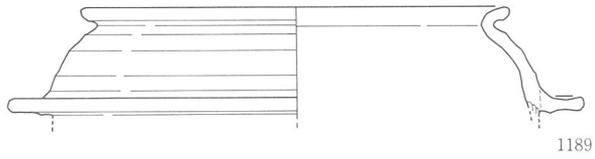
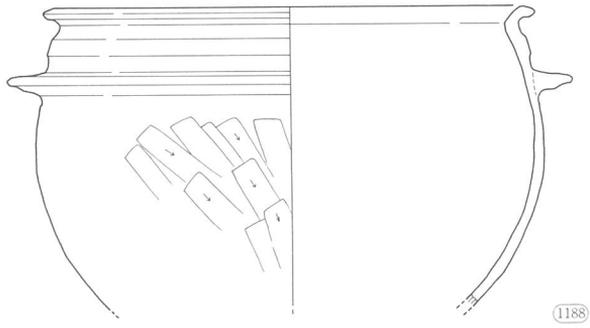
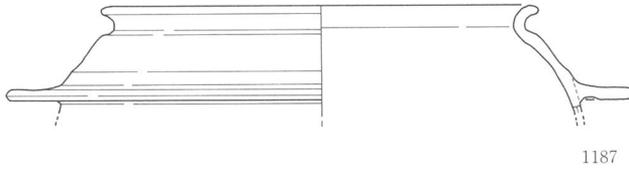
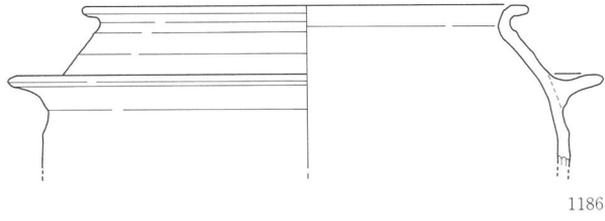
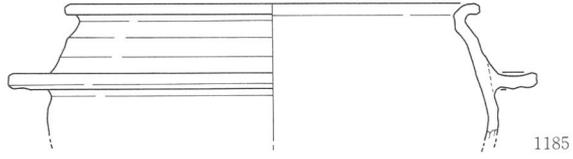
1179



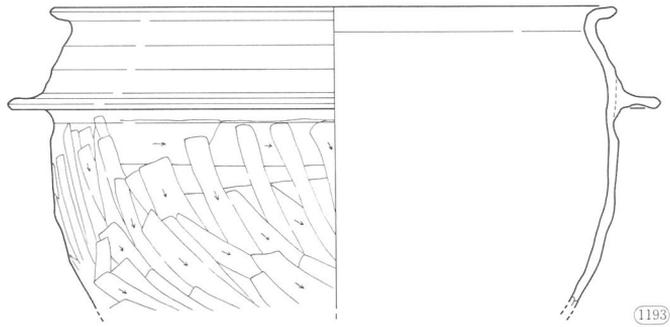
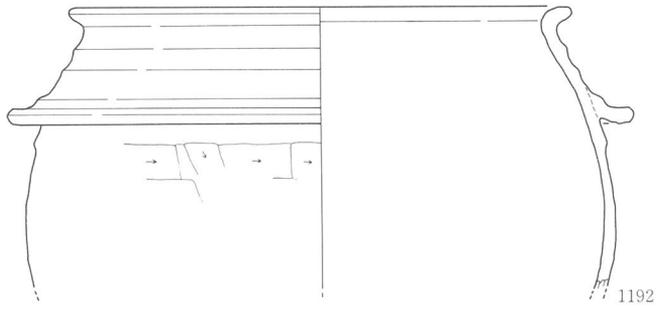
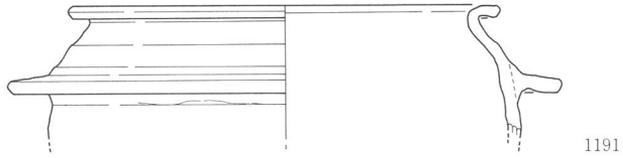
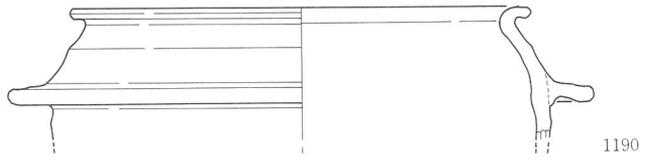
第256图 26-O S出土遺物(2)



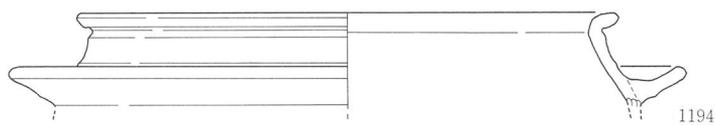
第257図 26-O S 出土遺物(3)



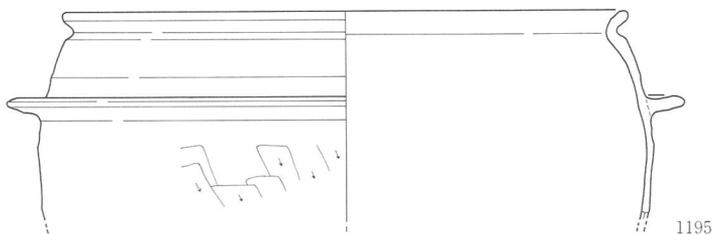
第258図 26-O S 出土遺物(4)



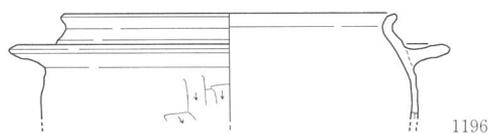
第259図 26-O S 出土遺物(5)



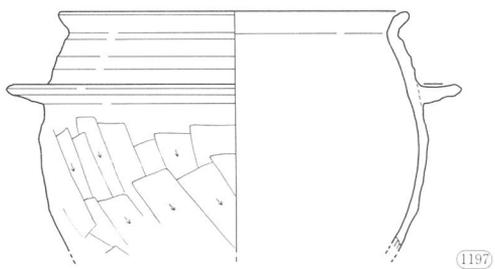
1194



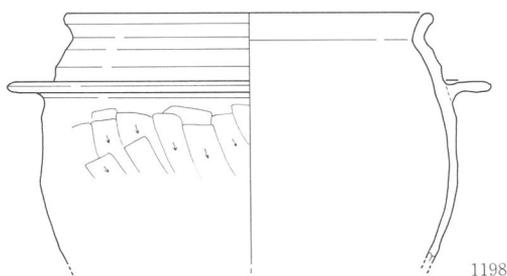
1195



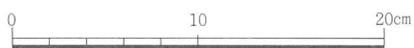
1196



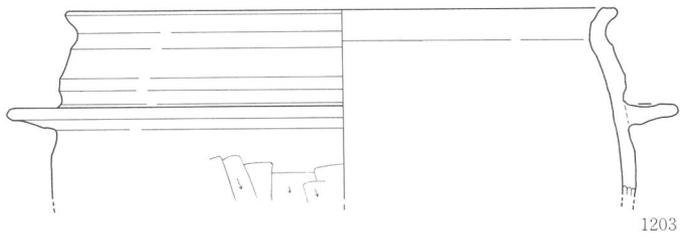
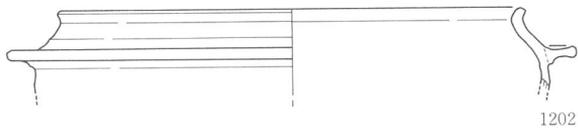
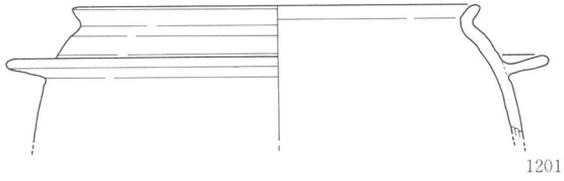
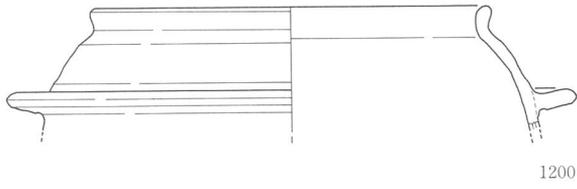
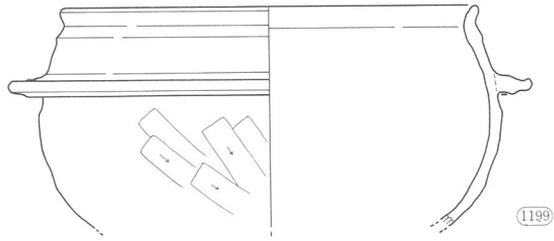
1197



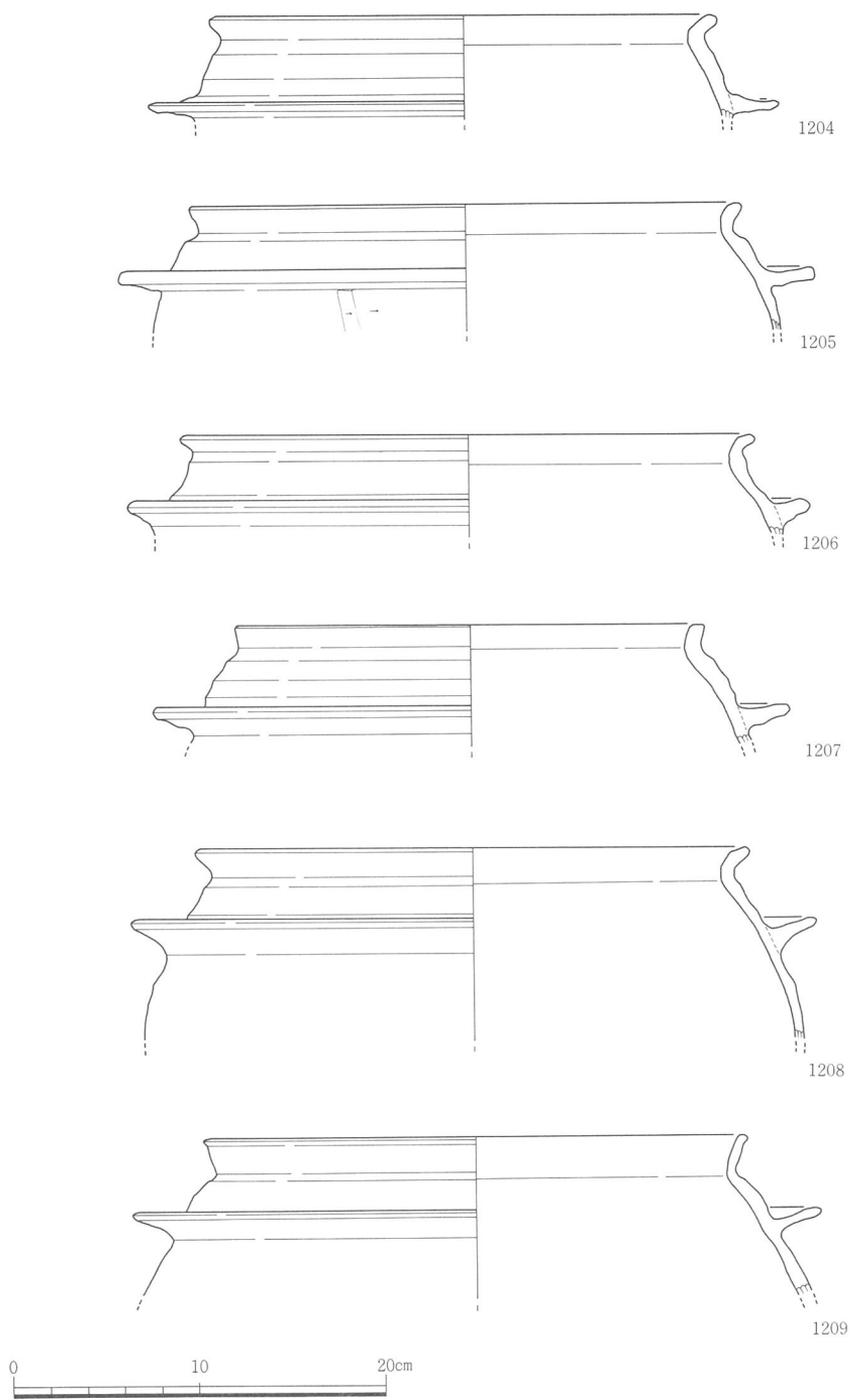
1198



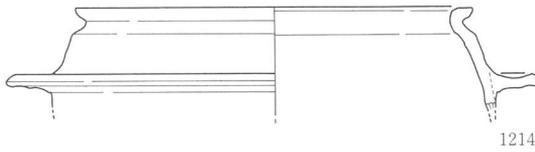
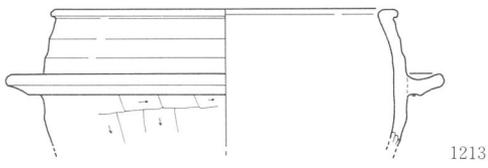
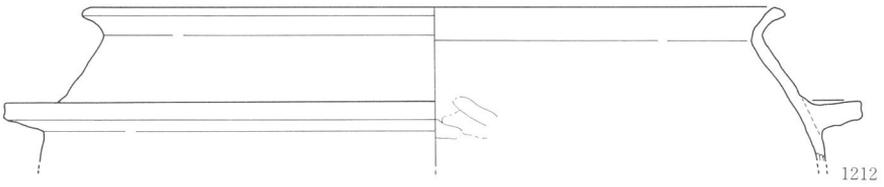
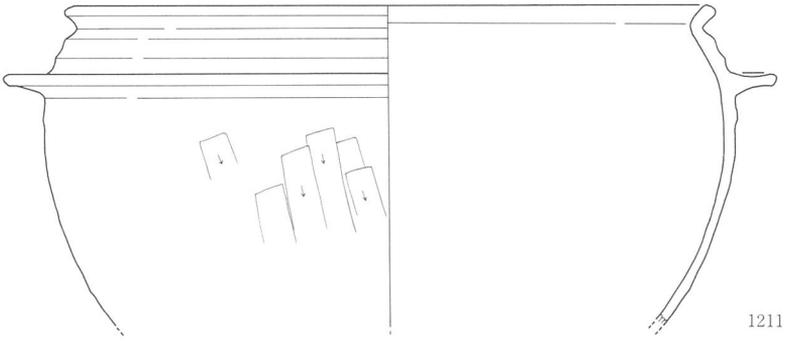
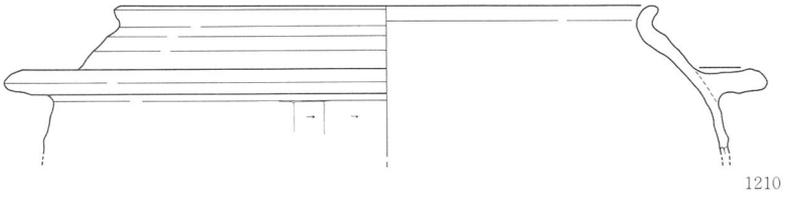
第260図 26-O S 出土遺物(6)



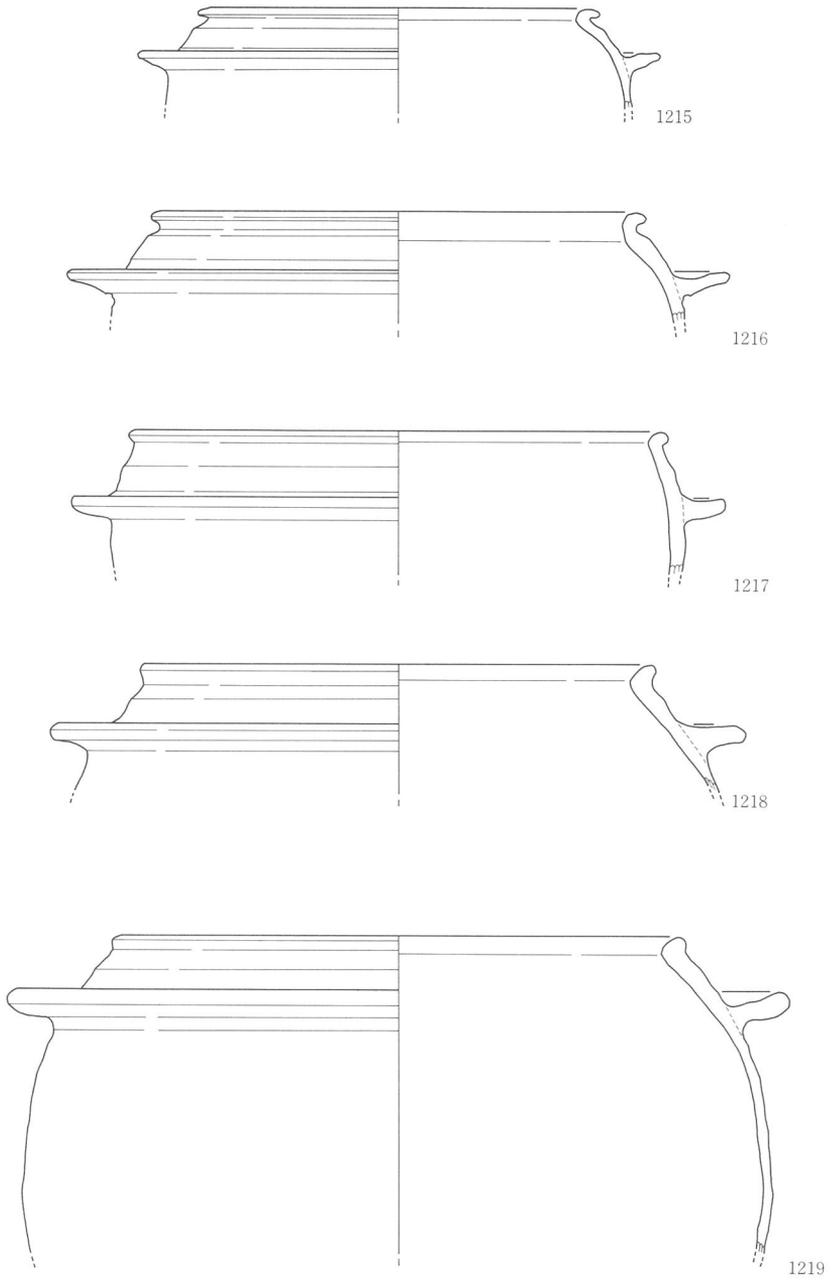
第261図 26-O S 出土遺物(7)



第262図 26-O S 出土遺物(8)



第263図 26-O S 出土遺物(9)



第264図 26-O S 出土遺物(10)

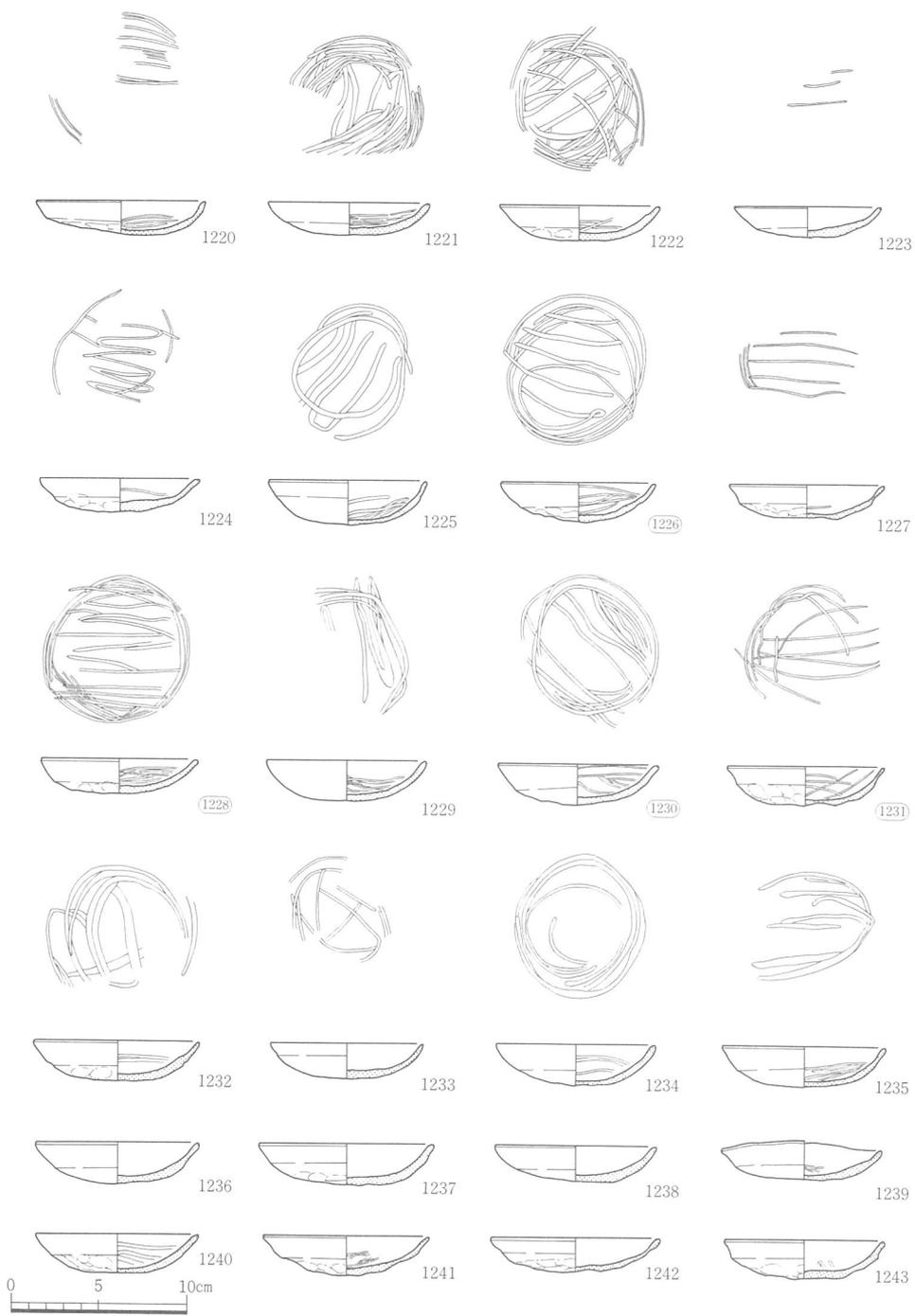
口径を含む) 20cm以下の小型のもの, 22cm~30cmの中型, 40cm近い大型のものがみられ, 数量的には中型が大多数を占める。器面の調整では, 体部外面をヘラケズリし, 内面は指ナデによるものが多いが, ハケ目調整を施すものもわずかにみられる。

これらの羽釜は, 口縁の立ち上りが外反ないしは直立する形式と, 口縁の立ち上りがほとんどなく, 端部が外側に肥厚する形式のものに大別されるが, 数量的には前者が大多数を占める。現段階における和泉型の羽釜編年では, 前者が後者に比べて一段階古手とされており, 両者にはいくらかの年代の開きがあるが, ここでは出土量からみて前者が26-O Sの年代にあう遺物と考える。

1220~1384は瓦器の小皿である。ここではおもだったもの165点をあげたが, この他に小片がかなりあり, 総数は200を大きく超すものと思われる。これらの瓦器小皿は形状によって, 丸底ないしは小さな平底の底部で, 口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのび, 全体的に丸みを持つもの(1220~1243, 1286~1312, 1341~1343), 平底の底部で, 口縁の立ち上りが低くまっすぐ外上方へのび, 口縁部外面に横ナデによる凹みが顕著に残るもの(1244~1255, 1313~1325, 1347~1384), やや丸みをおびた平底の底部で, 口縁の立ち上りがまっすぐ外上方へのび, 口縁部外面に横ナデによる凹みが残るもの(1256~1285, 1326~1340, 1344~1346)などにわけられる。又, これらの瓦器小皿には見込みおよび口縁部内面に暗文が施されているものが多数みられ, それらの組み合わせによっていくつかに分類できる。すなわち, 見込みに細く深い平行線状暗文を施し, 口縁部内面に円周にそって数回荒い暗文を施すもの(1227, 1231, 1244, 1348, 1353, 1354など), 見込みに太い平行線状暗文を施し, 口縁部内面に円周にそって数回荒い暗文を施すもの(1220, 1225, 1226, 1228, 1230, 1248など), 見込みに細い平行線状暗文を施し, 口縁部内面には暗文がみられないもの(1270), 見込みに細い格子状暗文を施すもの(1356), 見込みから口縁部内面にかけて円周状に荒い暗文を施すもの(1221, 1232, 1255, 1256など), 見込みに細い連続圏線状暗文を施すもの(1351), 見込みにジグザグ状に暗文を施し, 口縁部内面には周縁にそって暗文をめぐるもの(1224), 見込みには暗文はみられず, 口縁部内面にのみ荒い暗文を施すもの(1349)などがある。

1385~1455は瓦器の椀である。26-O Sからは100個体を超す瓦器椀が出土したが, ここでは器形が完全に復元できるもの71個体を示した。

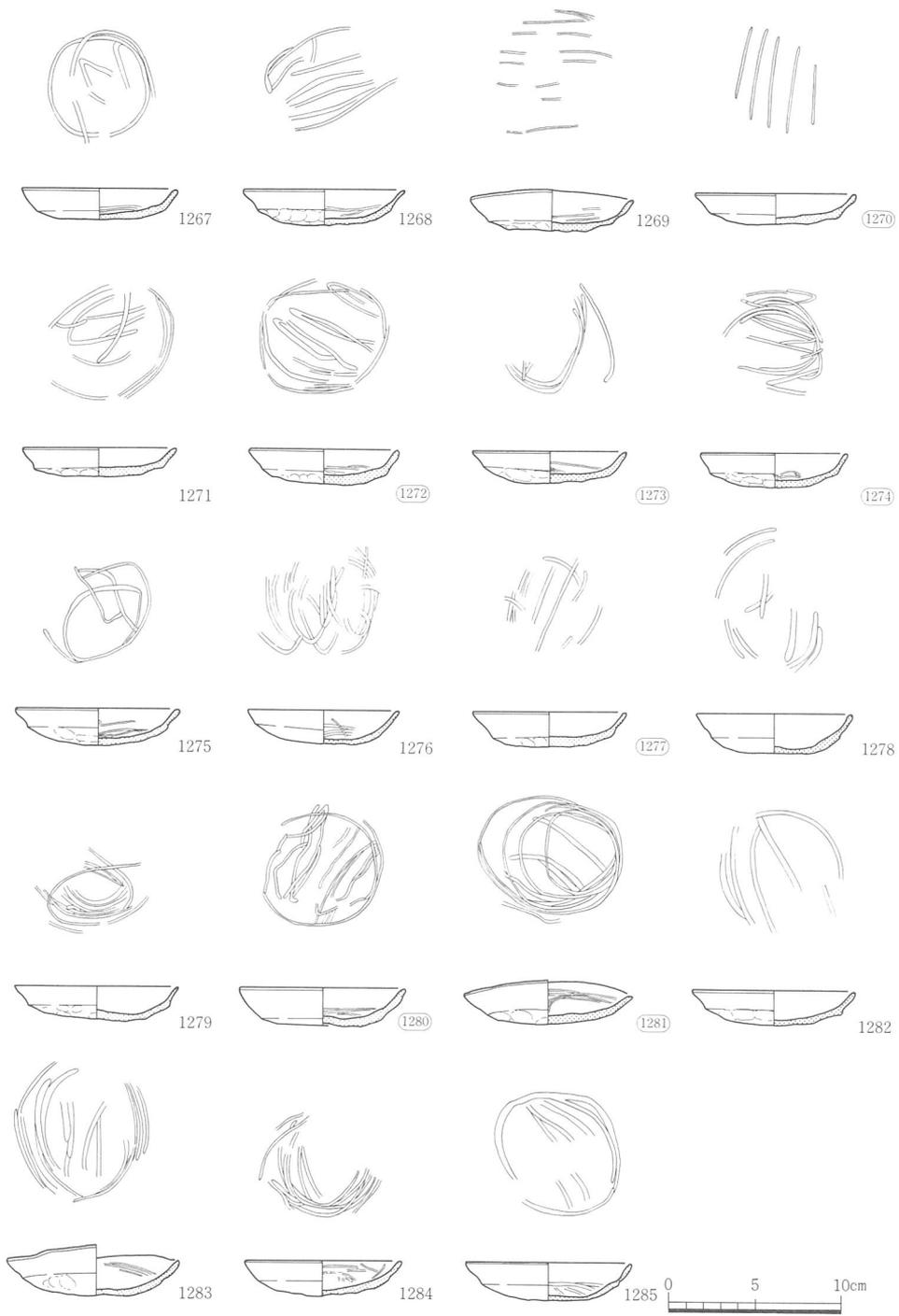
これらの椀は, 分量からみると多少の大小はみられるが, ほぼ同じ形態のものである。平底の底部で, 口縁の立ち上りが内弯しつつ外上方へのびる。比較的深い形状を呈する。



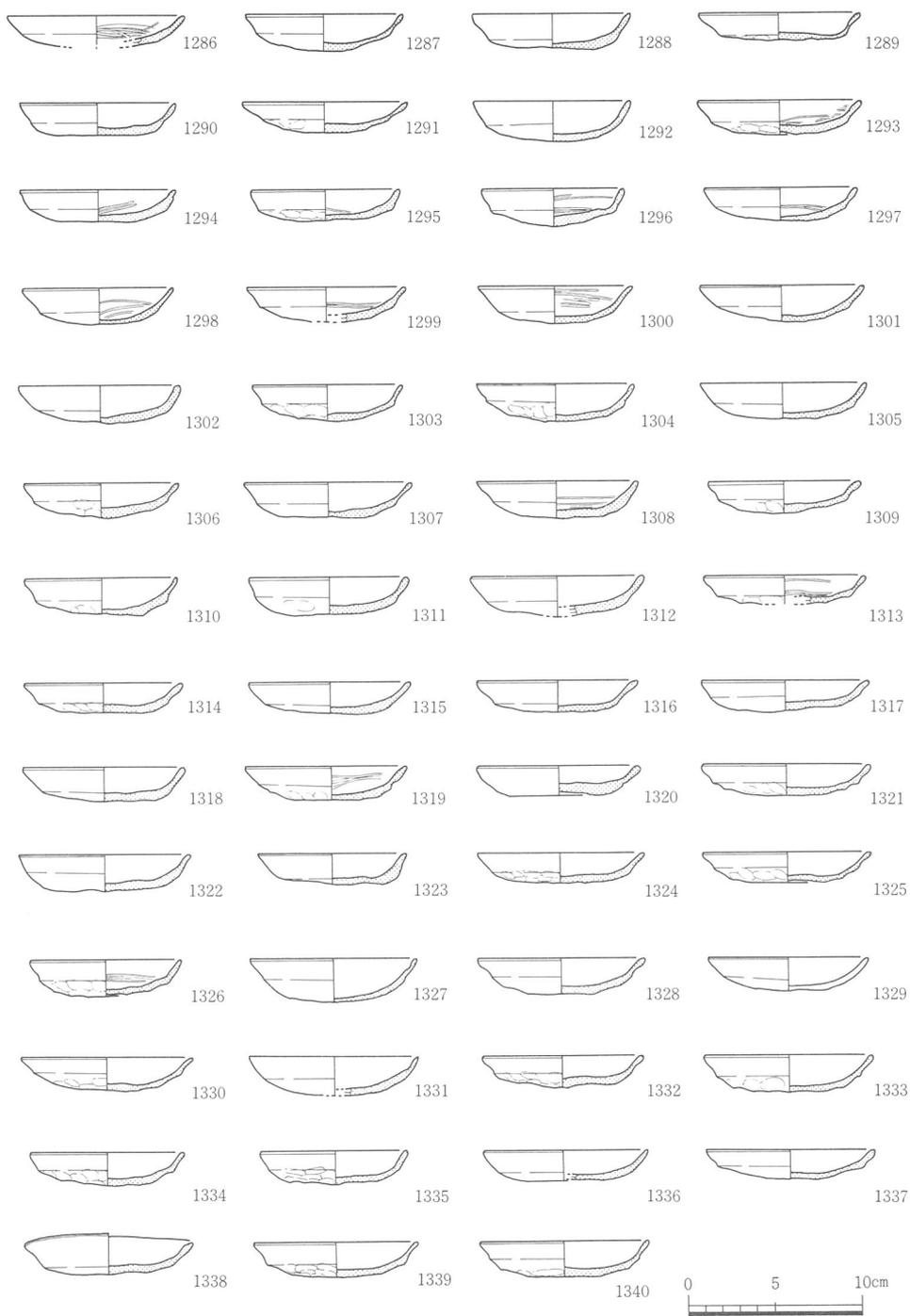
第265图 26-O S 出土遺物(11)



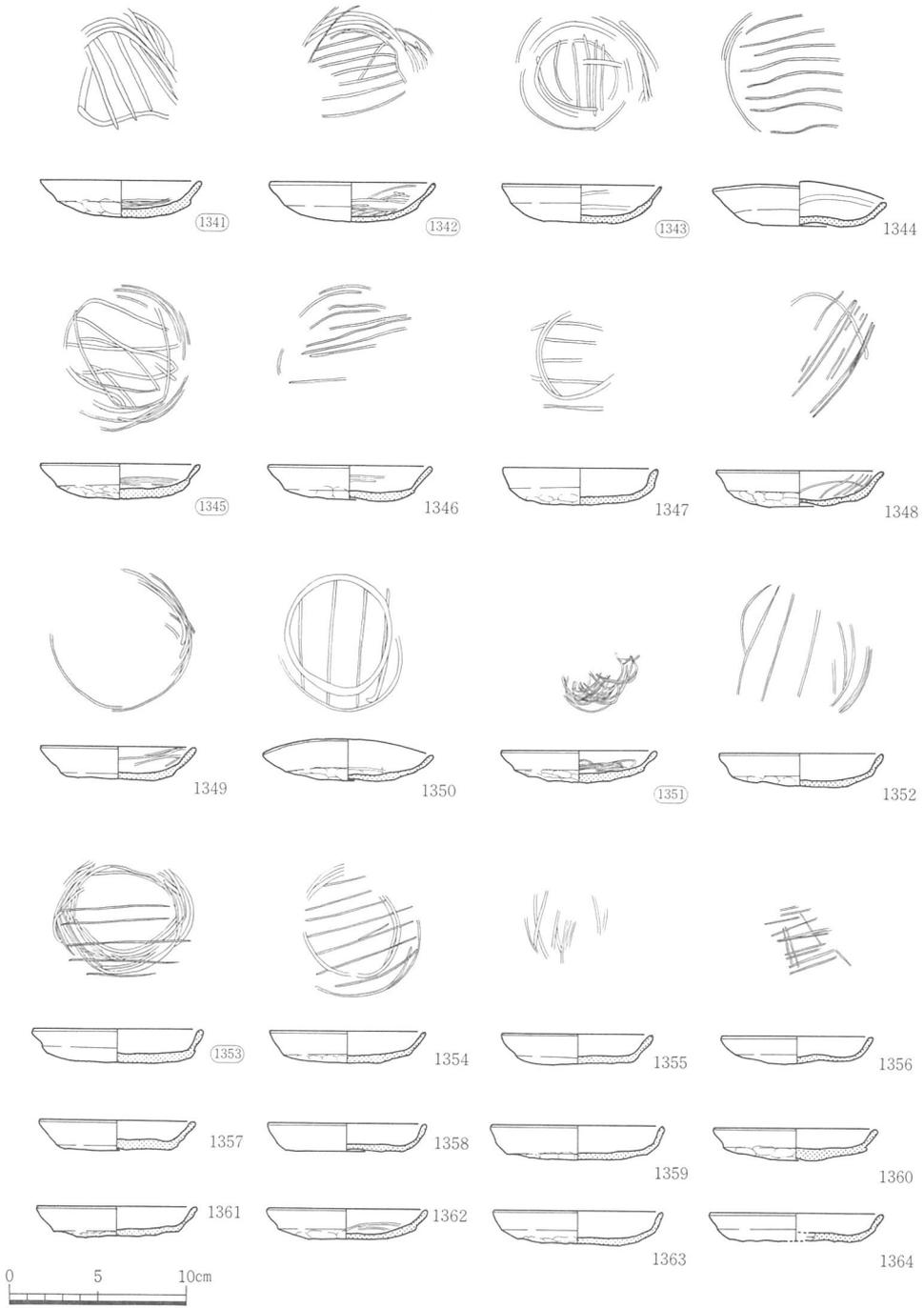
第266図 26-O S 出土遺物(12)



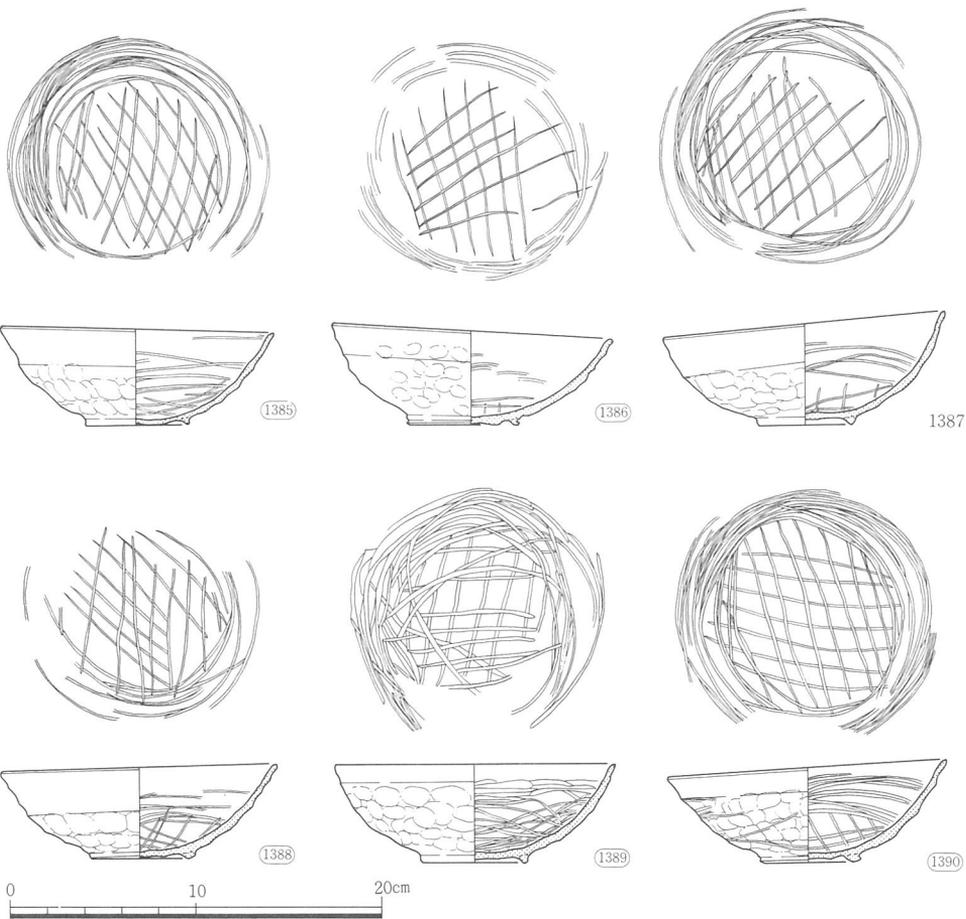
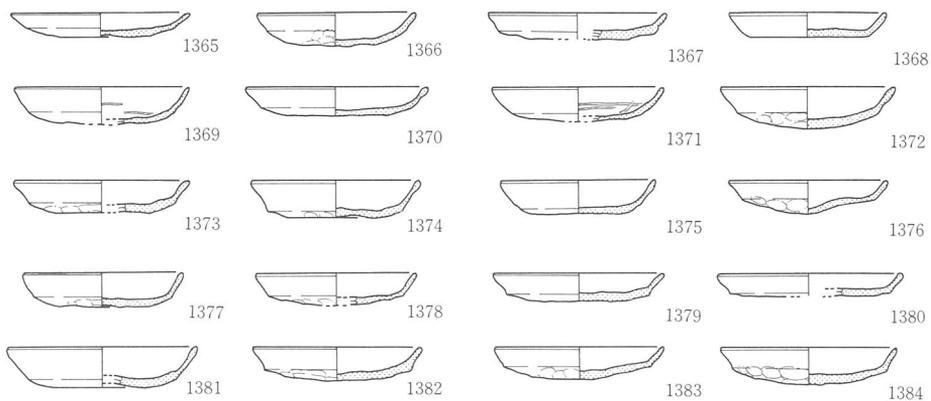
第267图 26-O S 出土遺物(13)



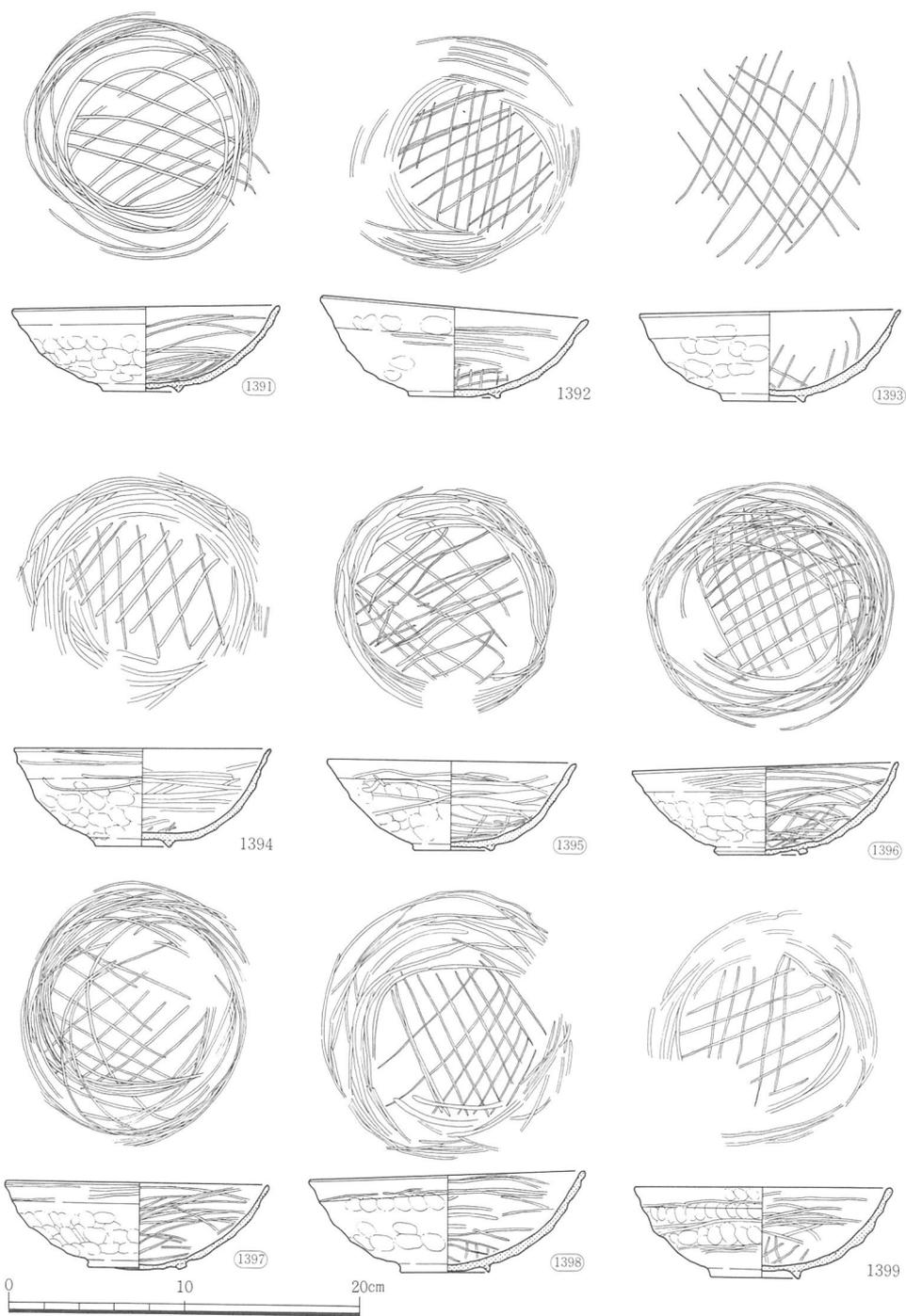
第268図 26-O S 出土遺物(14)



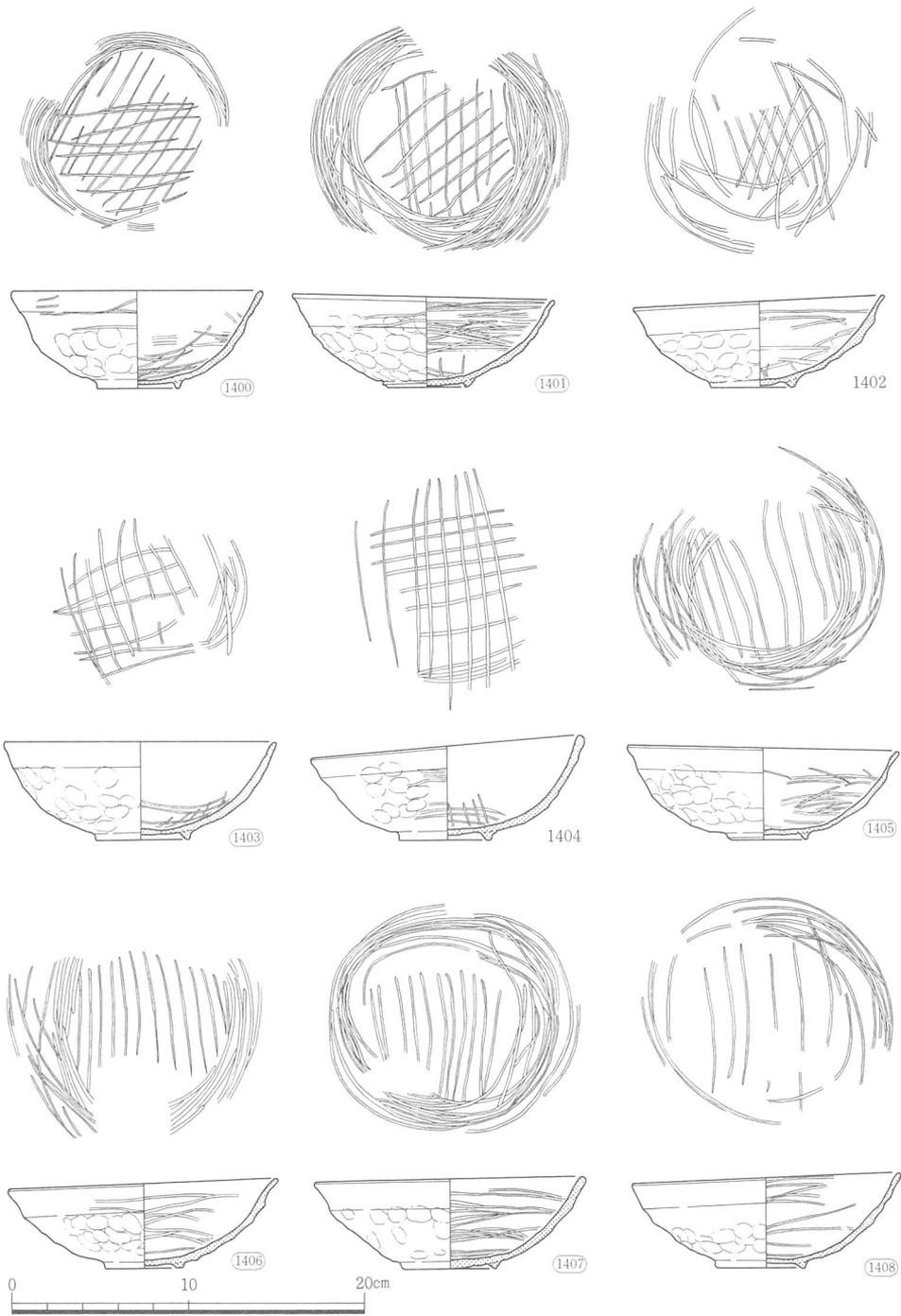
第269图 26-O S 出土遺物(15)



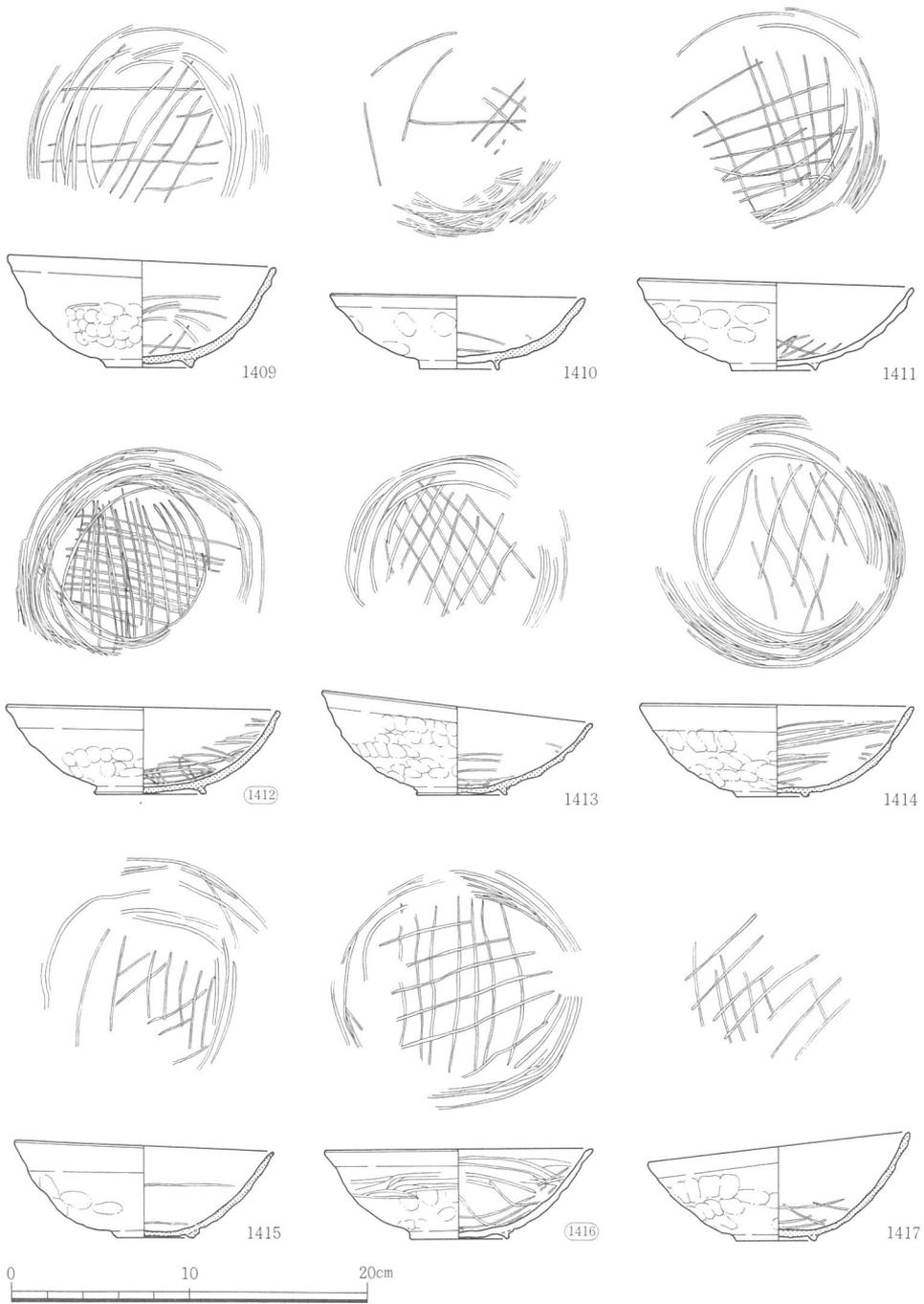
第270図 26-O S 出土遺物(16)



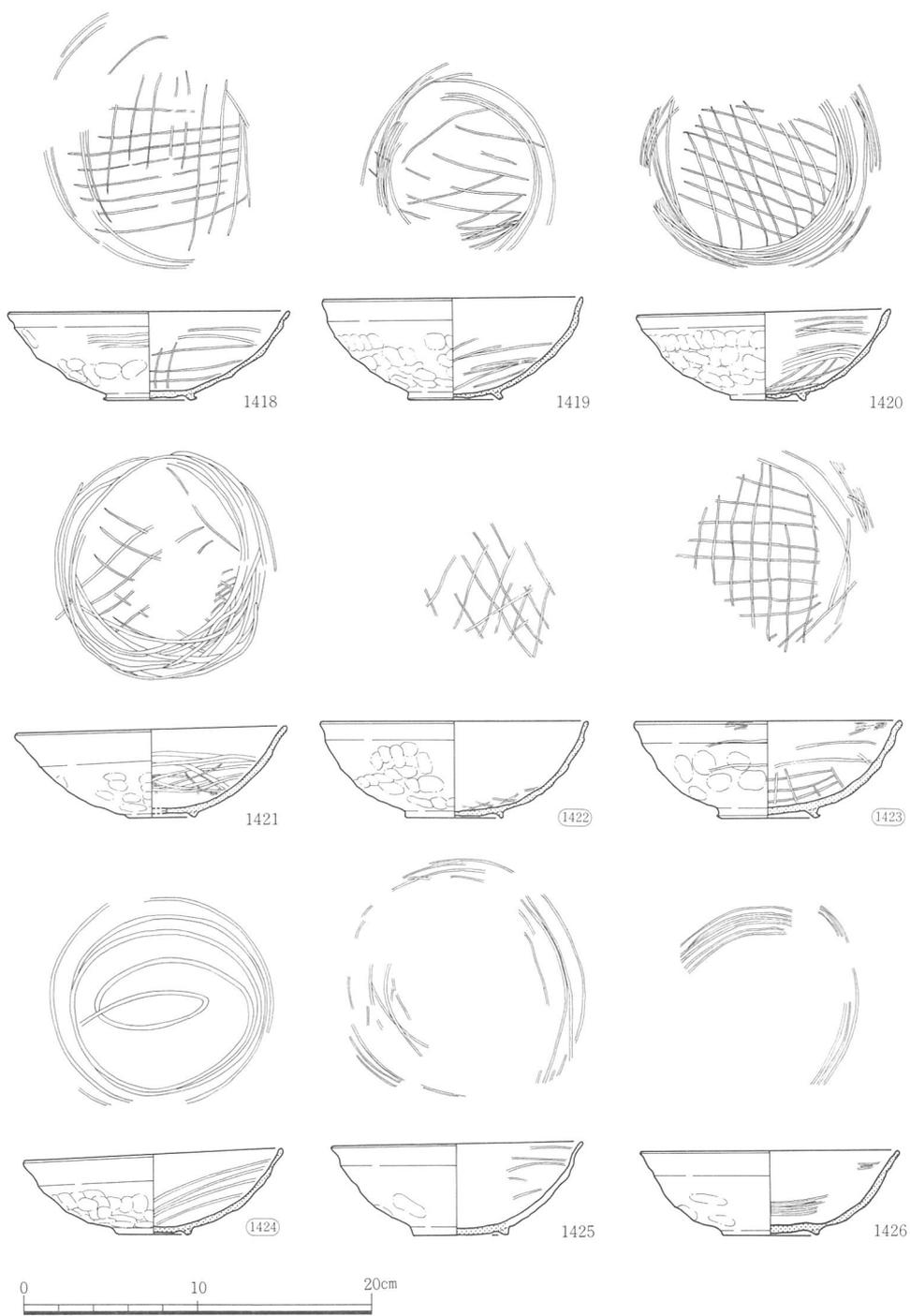
第271图 26-O S 出土遺物(17)



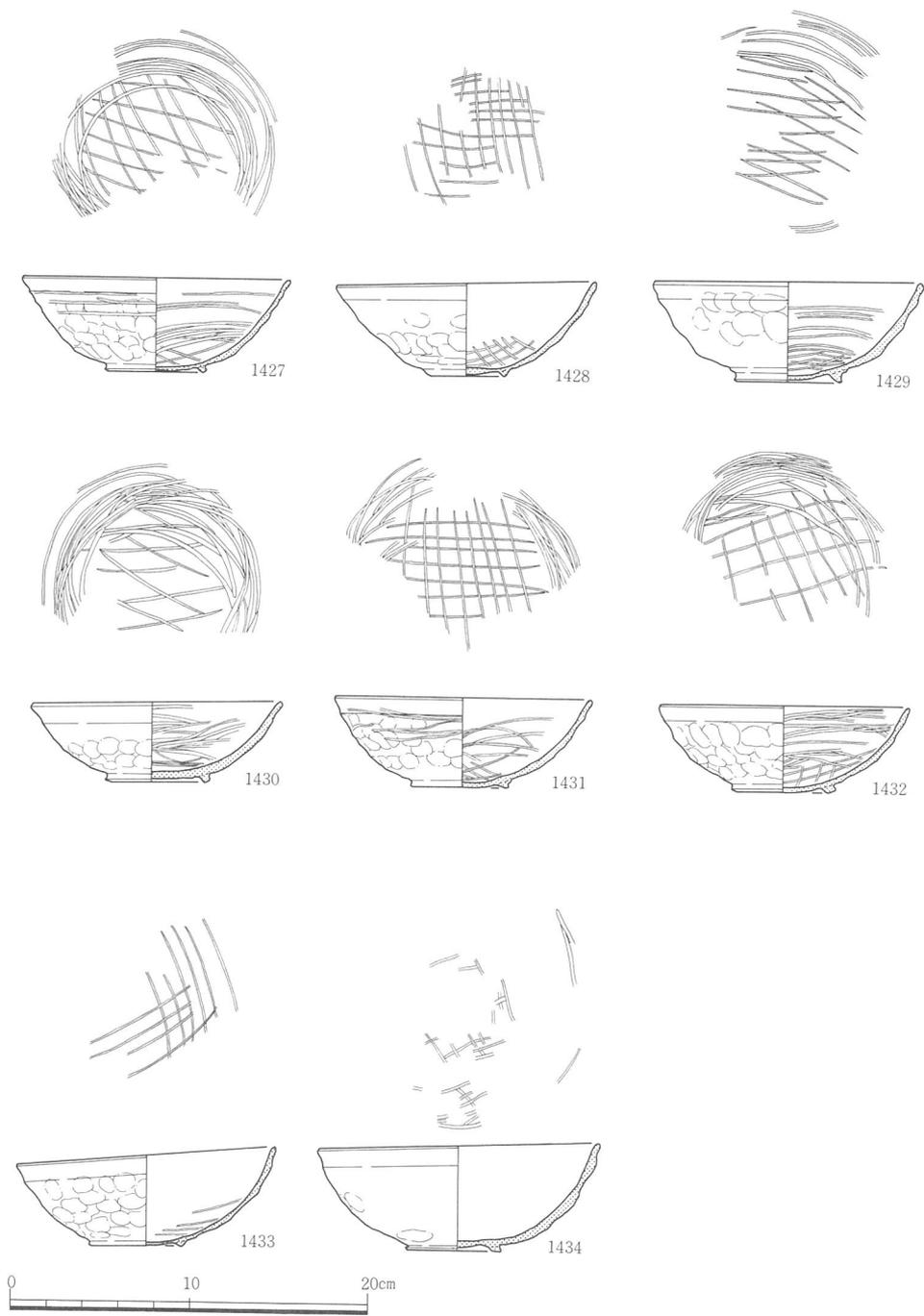
第272図 26-O S 出土遺物(18)



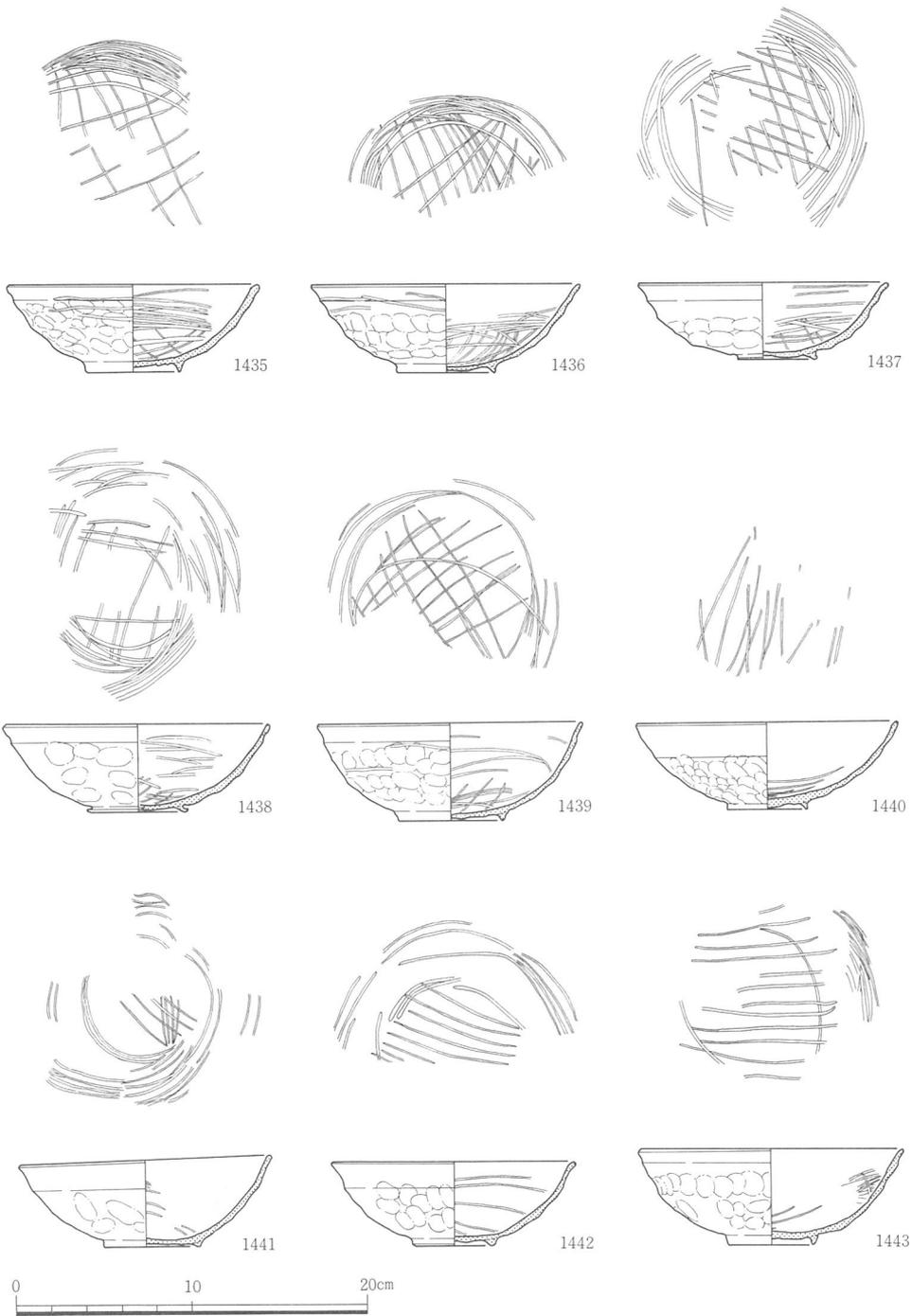
第273図 26-O S 出土遺物(19)



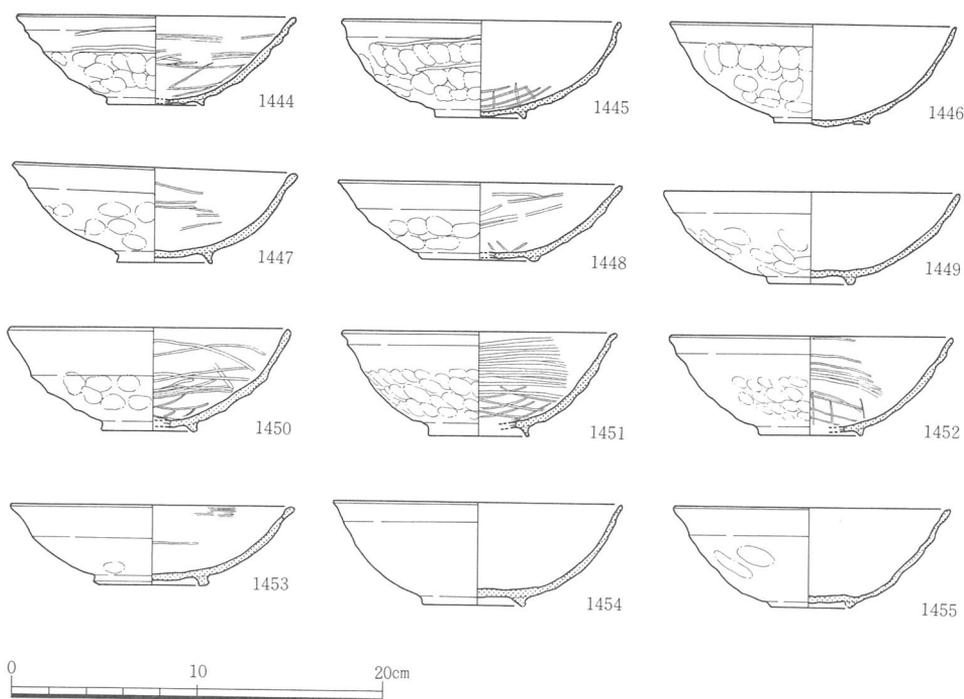
第274図 26-O S 出土遺物(20)



第275図 26-O S 出土遺物(21)



第276図 26-O S出土遺物(22)



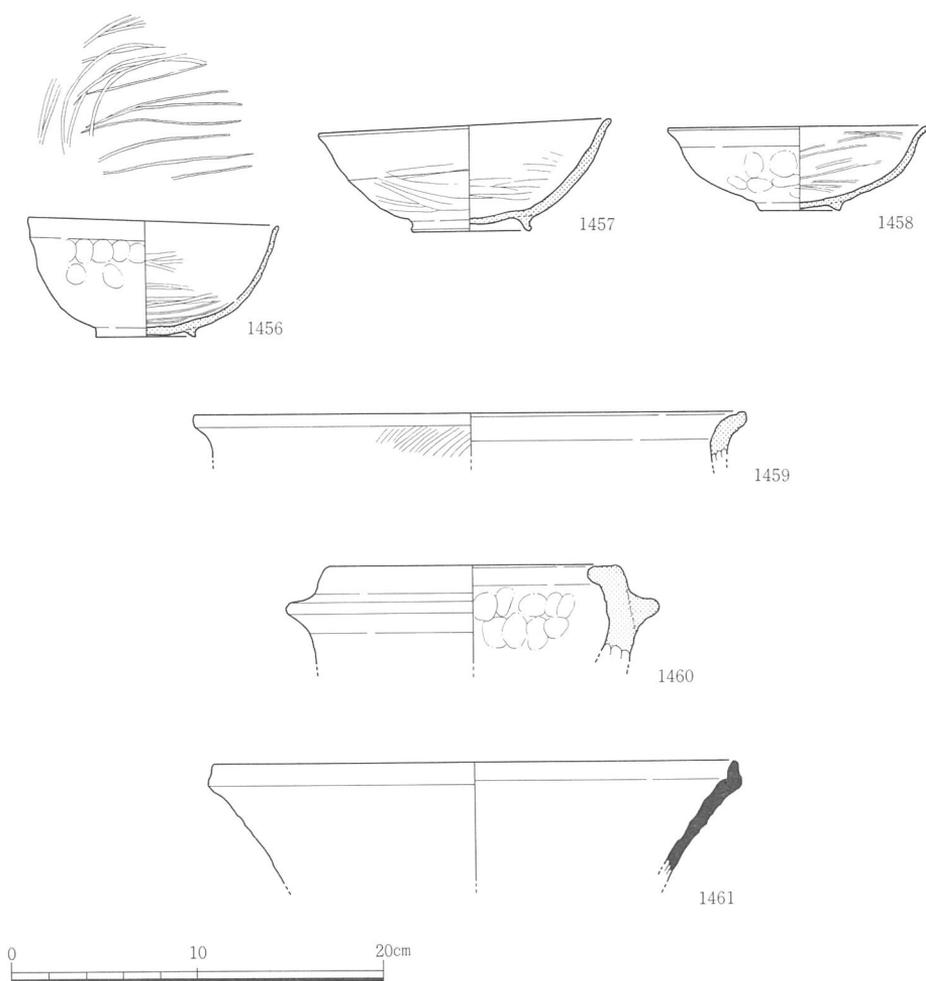
第277図 26-O S 出土遺物(23)

底部外面周縁付近に、断面台形状ないしはV字形状の比較的高い貼付高台を付す。器面の調整は、口縁部内面を分割性のみられない連続圏線状にヘラミガキ調整し、外面は指押さえし、そのあと上半のみにヘラミガキを施している。見込みには暗文がみられるが、これらには三方向の斜格子状暗文（1411）、口縁部内面のヘラミガキと同じ幅の斜格子状暗文（1389、1390など）、細く深い斜格子状暗文（1386、1393など）、格子状暗文（1404、1423など）、平行線状暗文（1405、1407など）、細く深い平行線状暗文（1408）、連続圏線状暗文（1424）などがある。

1405は平行線状暗文を見込みに施し、その後口縁部内面に圏線状にヘラミガキしているが、最後に口縁部内面上端付近に細く深い右下りの斜状暗文を刻み込んでいる。

1456～1461は26-O Sの溝底から出土した瓦器碗である。1458は上部から出土のものとはほぼ同じ形状を呈するが、1456、1457は器形の深さ、高台径の大きさ、外面のヘラミガキの度合からみてやや他より先行するものと思われる。

これらの瓦器碗は、溝底出土の一部をのぞき、おおむね尾上編年のIII-1型式に含まれるものといえ、12世紀後半の年代を与えられる。



第278図 26-O S 出土遺物(24)

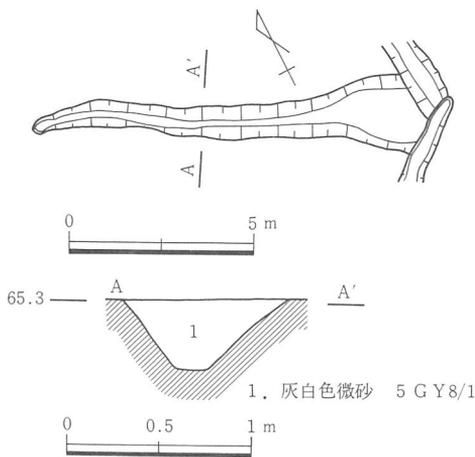
1459は瓦質土器で、甕の口縁部と思われる。端部付近のみの小片で、形状などは不明である。

1460は瓦質土器で鉢と思われる。体部上端以上の破片である。厚手で、口縁の立ち上りがごく短く、内傾する。端部は上側に面をなす。体部上端に幅の狭い肉厚の突帯が付く。

1461は須恵器の鉢である。口縁部の破片で、口縁の立ち上りがわずかに外反しつつ外上方へのびる。端部は上に肥厚し、外側に面をなす。東播系の須恵器と思われる。

27-O S (第279図)

第8地区の中央部の、B03KQ・LQ・LR・LS・MS・MTにまたがる地区で検出した北西から南東方向に走る溝である。検出長は11mで、幅約1m、深さ0.36mを測った。埋土は1層で、5GY8/1灰白色微砂である。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。



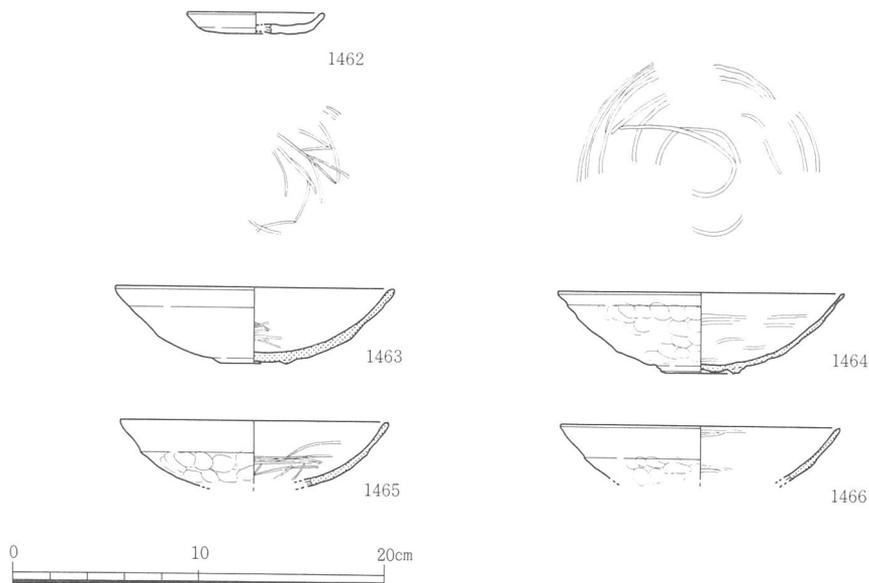
第279図 27-O S平面図・断面図

27-O S出土遺物 (第280図1462~1466)

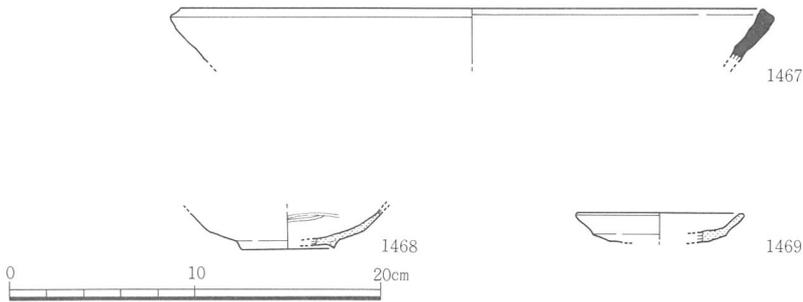
27-O Sからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは5点である。

1462は土師器の小皿である。平底の底部で、口縁の立ち上りが低く、短く外上方へのびる。

1463~1466は瓦器の椀である。小さな平底の底部で、口縁の立ち上りが内湾しつつ外上方へのびる。比較的浅い器形で、内面のヘラミガキは簡略化されており、外面にはヘラミガキはみられない。見込みに荒い連続圏線状暗文がみられるもの(1464)、平行線状暗文



第280図 27-O S出土遺物



第281図 28-O S出土遺物

がみられるもの（1465）がある。

28-O S

第8地区の北東端部の、B03F T・F Uで検出した東西方向に走る溝である。検出長約7mであるが、北半部は現代の水路に切られており幅は不明である。深さ0.3mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から須恵器・瓦器などが少量出土した。

28-O S 出土遺物（第281図1467～1469）

28-O Sからは須恵器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは3点である。1467は須恵器の鉢である。口縁端部付近の小片で、端部の外側に面をなすものである。

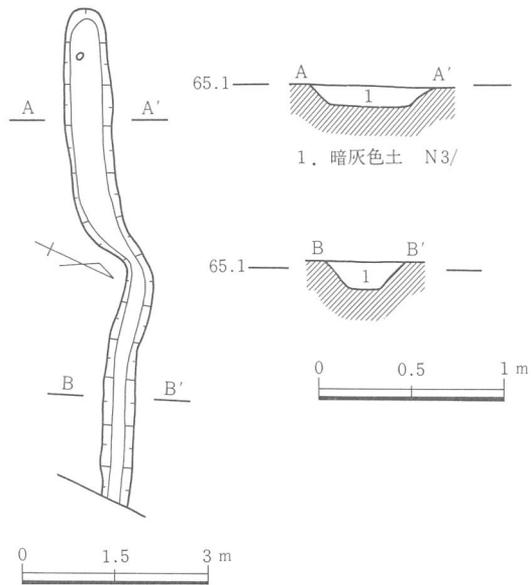
東播系の須恵器である。

1468は瓦器の碗である。底部のみの小片で、断面三角形の貼付高台がみられる。

1469は瓦器の小皿である。底部を欠損しているが、比較的丸みを持つ底部と思われる。口縁の立ち上がりが短く、外上方にのびる。

29-O S（第282図）

第8地区に北東端部の、B03F U・F Vにまたがる地区で検出した東西方向に走る溝で、28-O Sと並行する。西端部は途切れているが、東側は調査区東壁外へのびている。検出長6.5m



第282図 29-O S 平面図・断面図

で、幅0.6m、深さ0.11mを測った。
埋土は1層で、N3/暗灰色土である。
内部から土師器・瓦器などがごく少
量出土した。

29-O S 出土遺物 (第283図1470,
1471)

29-O Sからは土師器・瓦器など
がごく少量出土した。そのうち図示
し得たのは2点である。

1470, 1471はともに瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっ
すぐ外上方へのびる。見込みに規格性のない暗文を施している。

30-O S

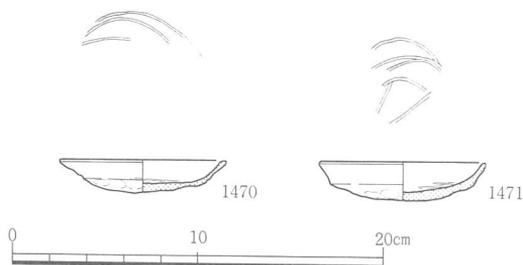
第8地区の中央部の、B03K S・L S・MSにまたがる地区で検出した南北方向に走る
溝である。検出長約5mで、幅0.8m、深さ0.18mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色
土である。内部から土師器・瓦器などがごく少量出土した。

30-O S 出土遺物 (第284図1472, 1473)

30-O Sからは土師器・瓦器などがご
く少量出土した。そのうち図示し得たの
は2点である。

1472は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方へのびる。

1473は瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方



第283図 29-O S 出土遺物

30-O S 出土遺物 (第284図1472, 1473)

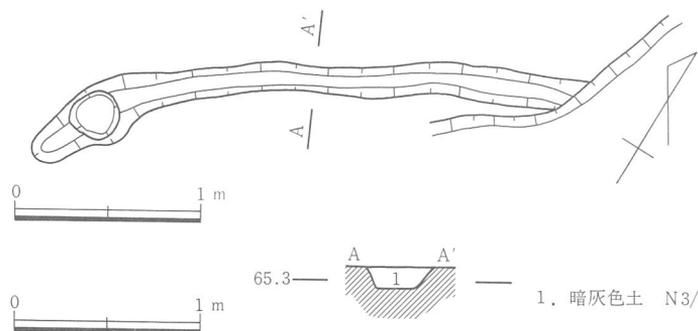
30-O Sからは土師器・瓦器などがご
く少量出土した。そのうち図示し得たの
は2点である。

1472は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが低く外上方へのびる。

1473は瓦器の小皿である。比較的丸みを持つ底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方



第284図 30-O S 出土遺物



第285図 31-O S 平面図・断面図

へのびる。

31-O S (第285図)

第8地区の中央部東端の、B03KT・KUにまたがる地区で検出した東西方向に走る溝である。西端は途切れており、東側は35-O Oに切られている。検出長約3.5mで、幅0.2m、深さ0.06mを測った。埋土は1層で、N3/暗灰色土である。内部から瓦器がごく少量出土したが、図示し得るものはなかった。

5. ピット

第8地区では、50を超える数のピットが検出された。そのうち遺物が出土し、時期比定できたものが6ヶ所あった。

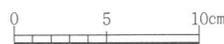
66-O P

第8地区の北半部の、B03ISで検出したピットである。不整円形状を呈し、径0.8m、深さ0.1mを測った。柱痕は確認されなかった。内部から瓦器がごく少量出土した。

66-O P 出土遺物 (第286図1474)

66-O Pからは瓦器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1474は瓦器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがまっすぐ外上方にのびる。見込みに連続圏線状暗文がみられる。



第286図 66-O P 出土遺物

67-O P (第287図)

第8地区の中央部東端の、B03LTで検出したピットである。円形状を呈し、径0.2m、深さ0.2mを測った。内部から瓦器がごく少量出土した。

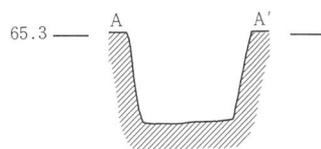
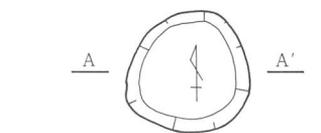
67-O P 出土遺物 (第288図1475)

67-O Pから瓦器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1475は瓦器で、小皿の破片と思われる。口縁部付近のみの小片で、全体の形状などは不明である。

68-O P (第289図)

第8地区の南半部の、B03PUで検出したピットである。



第287図 67-O P 平面図・断面図



第288図 67-O P 出土遺物

不整形円形状を呈し、径0.36m、深さ0.29mを測った。柱痕は円形で、径0.25mを測った。内部から土師器・瓦器などが少量出土した。

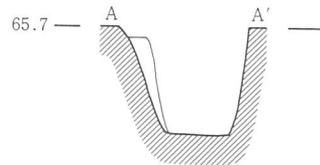
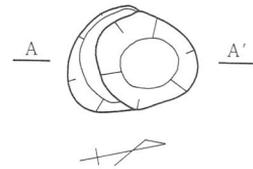
68-OP 出土遺物 (第290図1476~1482)

68-OPからは土師器・瓦器などが少量出土した。そのうち図示し得たのは7点である。

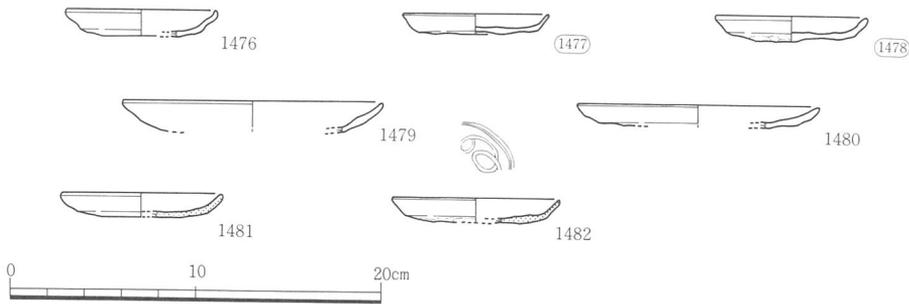
1476~1478, 1481は土師器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが短く、まっすぐ外上方へのびる。

1479, 1480は土師器の皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りがごく低く、短く外上方へのびる。

1482は瓦器の小皿である。平らな底部で、口縁の立ち上りが短く外上方へのびる。見込みに連結輪状暗文が施されている。



第289図 68-OP 平面図・断面図



第290図 68-OP 出土遺物

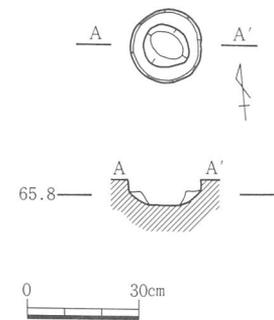
69-OP (第291図)

第8地区の南半部の、B03PUで検出したピットである。円形状を呈し、径0.2m、深さ0.07mを測った。柱痕は径0.15mの円形である。内部から土師器がごく少量出土した。

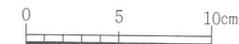
69-OP 出土遺物 (第292図1483)

69-OPからは土師器がごく少量出土した。そのうち図示し得たのは1点である。

1483は土師器の小皿である。中央部が突出した形状を呈する底部で、口縁の立ち上りがわずかに内弯しつつ外上方へのびる。



第291図 69-OP 平面図・断面図



第292図 69-OP 出土遺物